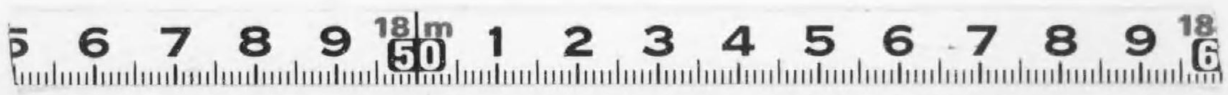
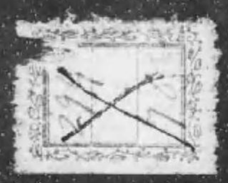
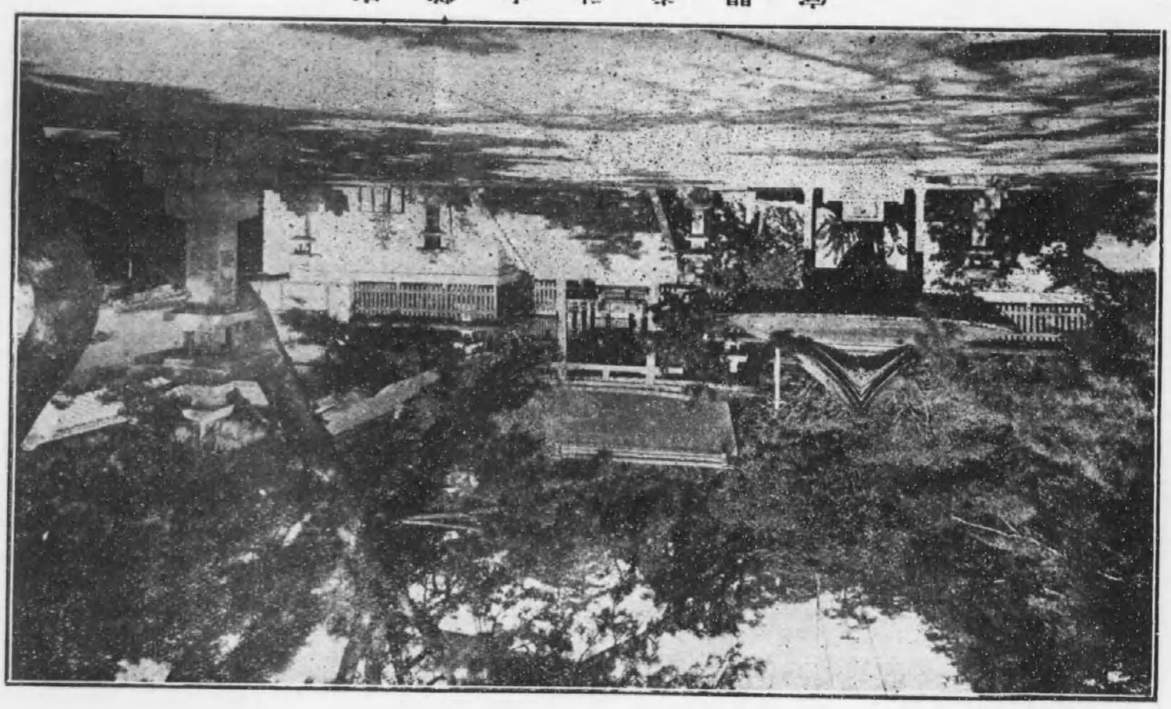

5 6 7 8 9 18 m 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 6



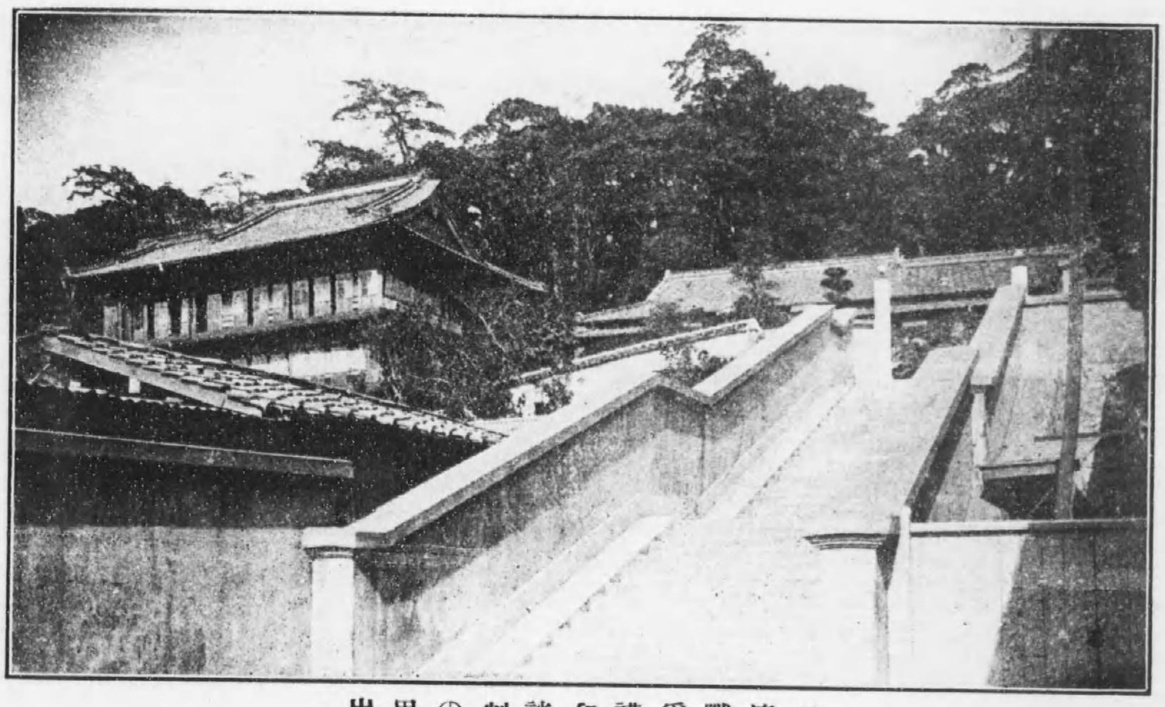
特116
102

關名鑑

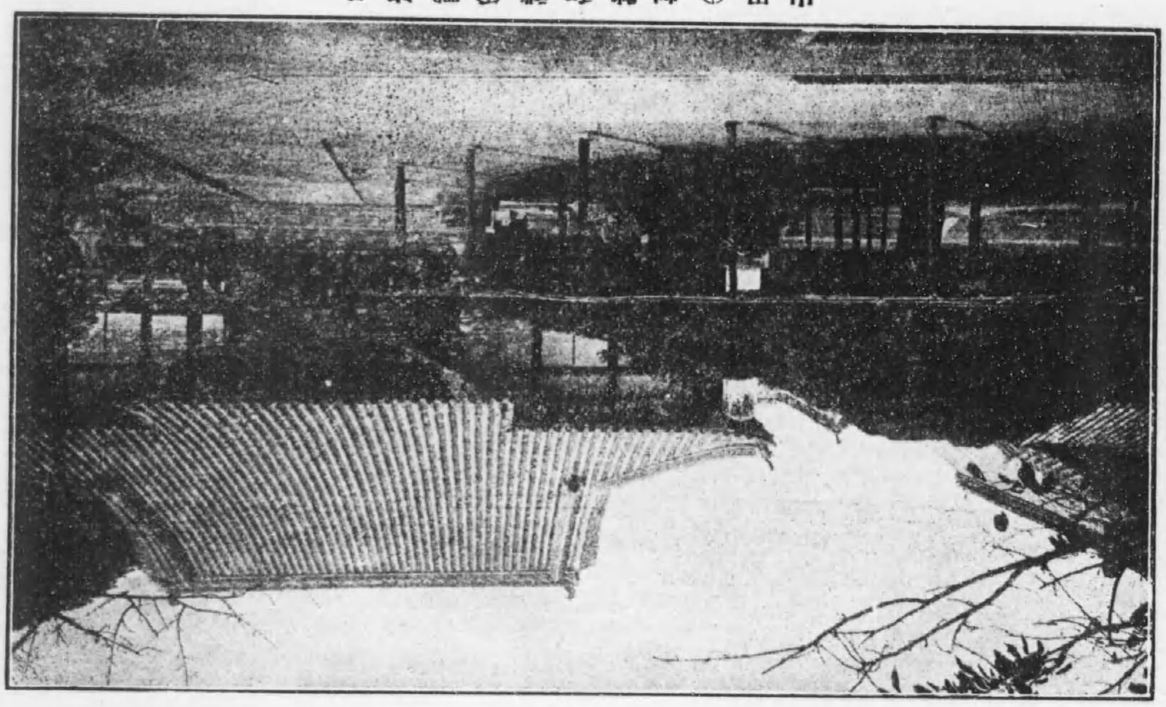
大正
14.11.17
内交



京 間 赤 疵 中 幣 官

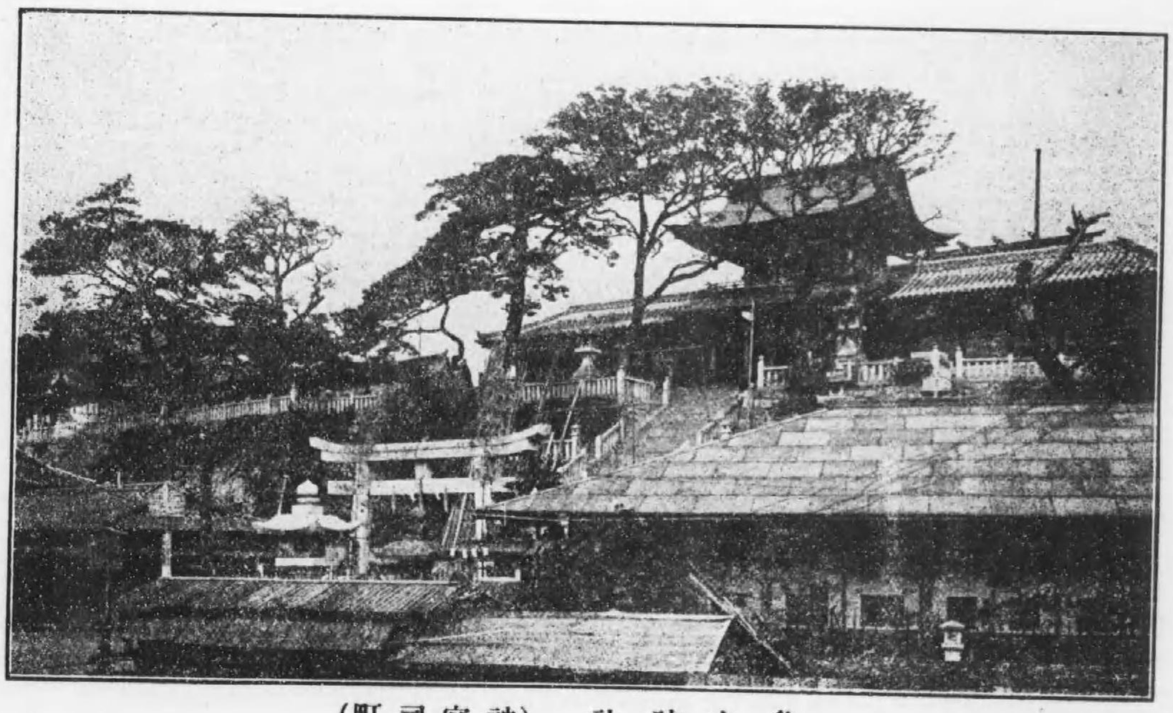


日清戰爭講和談判の思出
春帆樓



出恩の軍艦和議守戰濟日

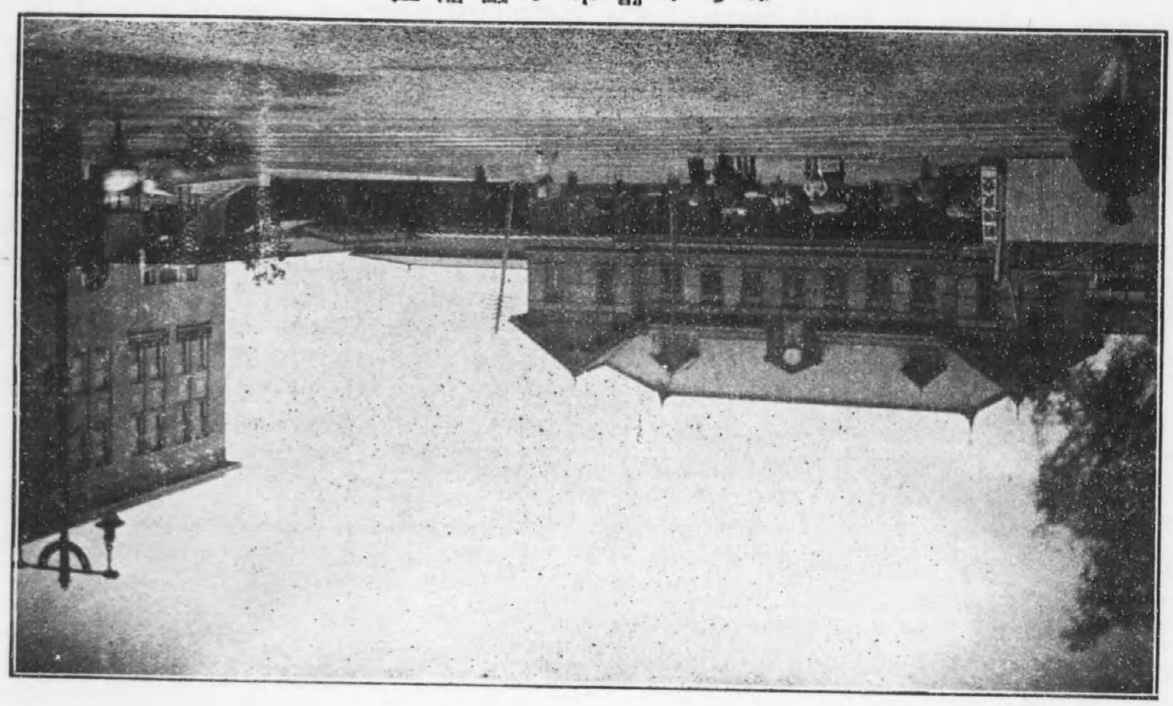
寺　接　引



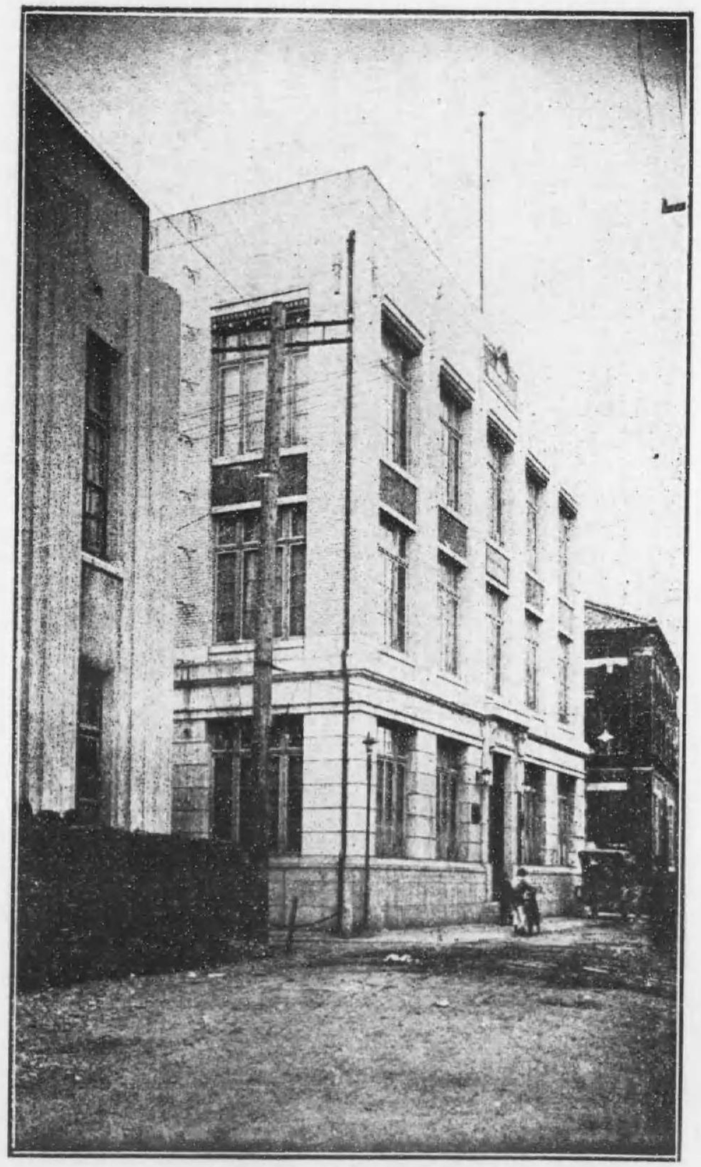
(町司宮神)　社神山龜

社　神　島　嚴

署察警と所役市關下



パテホ陽山と驛園下



近附所議會業商關下

貴族院議員
林　平四郎氏

衆議院議員
秋田寅之介氏

前代議士
藤井啓一氏

山口縣會議員
岩邊次郎寶氏

下關市助役
氏郎太茂田浮

下關市長
氏郎太林崎山

下關商業會議所副會頭
氏介由尾松

下關商業會議所會頭
氏三音谷桝 中歐渡下日

下關市會議長
村岡清吉氏

山口縣會議員
土井重吉氏

山口縣會議員
辯護士村岡吾一氏

下關市會議員
島田定吉氏

下關市會議員
松永幸作氏

下關市會副議長
岡平八郎氏

下關市會議員
吉永音吉氏

下關市會議員
山本尙文氏

下關商業會議所議員
氏吉定長善

下關市會議員
氏一禎井筒

下關商業會議所議員
氏一彌美藤伊

下關商業會議所議員
氏作正崎宮

下關市會議員

上段(右)福田辨三氏　(中)西山音治氏　(左)林米吉氏
中段(右)西村重吉氏　(中)田榮藏和氏　(左)黑田憲夫氏
下段(右)道森吉藏氏　(中)前田金造氏　(左)山下富太氏

下關市會議員

上段(右)田上孫作氏　唯山岩(中)亮氏　亀田福(左)太郎氏

中段(右)川西定雄氏　部西(中)德太郎氏　藤野鹿(左)藏氏

下段(右)谷古判治氏　岡藤(中)寅之助氏　仁田三(左)作氏

下關商業會議所議員

上段(右)河崎　光藏氏　(中)上　淵　繁氏　(左)安井光三氏

中段(右)土井實太郎氏　(中)石井喰一氏　(左)港　文平氏

下段(右)菊谷武次郎氏　(中)大村岩吉氏　(左)菊谷音藏氏

下關商業會議所議員

上段(右)富海松兵衛氏　誠本藏(中)　河村光藏氏(左)

中段(右)泉菊太郎氏　進之光田藤(中)　東善之助氏(左)

下段(右)柳千三郎氏　一照木垢(中)　野平寅五郎氏(左)

（夫霽　港）者著の居邸

下關名鑑

維時大正十四年五月十日祥雲天に靉き、瑞氣四周に滿つ、此の日は　今上天皇陛下大婚を擧げさせ給ひしより正に二十有五年に相當し、畏くも聖上、皇后、兩陛下には宮中に於て銀婚式の盛儀を行はせ給ふ。

吾等七千萬同胞は肅んで此盛典を祝し奉るの光榮に浴す、恭しく惟みるに二十五年の年月日其歷程を回顧すれば世相物象、大事小件累々として忙雜を極めしも、皇統無彊、大內山の綠ますます濃やかに、竹の園生は彌繁りに茂らせ榮へまし、聖恩洽く內外に光被して蒼生無窮の惠澤に賴らざるはなし、苟くも生を此の聖代に享けたる我等の欣幸、筆克く之を述ぶ能はず、皇居を遙に仰ぎ聖壽の萬歲を祈るのみ。

不肖淺學菲才なるも本日銀婚式を擧げさせ給ふに方り、是を記念として下關名鑑と題し、下關市の沿革と現況を略述し奉祝の微意を表して廣く頒たんとす。

大正十四年五月十日

海峽社　清壽夫識

序

下關名鑑を示して余に序文を求む。清君は東京農業大學に學び官界に其の生活をなすこと十年にして、官界の前途を捨てゝ好める文筆に走り既に四ヶ年、余は君の官を退くにあたり寧ろ君の望める操觚界の人たらんことに贊したり。下關に在りて齡を重ぬるに到り、聖上銀婚式に遭遇して下關の狀勢を知らんとするものゝ爲めに書を著して頗つ誠に君の精力の現れなり。

官界にありての君は主として技術、統計に長じ最も得意とするところは本書によりても推察し得て餘あり。下關の狀勢は本書によりて其大略を考察すべく統計的に最も簡明に著したる點に苦心の存する所なり。

大正十四年十月

農學士　三尾純太郎

目次

宮城……「一」
皇宮及御所……「二」
皇室……「三」
銀婚式……「六」
下關市沿革概略……「九」
下關現況(總說)……「一〇」
關門の氣象……「一二」
土地……「一三」
戶數及人口……「一五」
神社及宗教……「一六」
教育……「一九」
農業……「二一」
工業……「二四」
商業……「二七」

下關經濟界概要……「四二」
外國貿易……「四二」
內國貿易……「四四」
內地貿易……「四六」
魚類の集散……「四六」
金融狀況……「四八」
交通狀態……「五〇」
各種組合……「五二」
下關米取引所……「五三」
會社……「五四」
會社所在地其他……「五七」
銀行……「六七」
郵便局……「六八」
關門商況……「七一」
水產……「八六」
衛生施設……「九一」
交通及運輸……「九三」
倉庫……「九六」
船舶……「九六」
內航出入主要貨物……「九八」
外航出入主要貨物……「一〇二」
鐵道主要貨物……「一〇三」
社會事業……「一〇八」
水道……「一〇九」
下關市歲入出豫算……「一一一」
市役所（歷代の市長、助役、收入役）……「一一三」
市會（歷代の正副議長、參事會員、議員）……「一一五」
下關市選出衆議院議員……「一三〇」
同貴族院議員……「一三一」
同縣會議員……「一三二」

警察署……「一三三」
下關消防組……「一三七」
裁判所……「一三八」
刑務所……「一三九」
新聞事業……「一四〇」
各官署……「一四一」
宿屋及宿泊人……「一四二」
貸座敷及娼妓……「一四二」
藝妓及置屋……「一四二」
劇場及活動寫眞館……「一四三」
各種案内……(以下)……「一四四」

宮城

東京市の中央にあり、総面積三十萬六千七百六十坪の内西方を舊西城と云ひ、東方を舊本城と呼ぶ、舊西城の西方一帶を吹上御苑と稱ふ、今日の宮城は明治二十一年十月竣工總建坪一萬二千七百三坪、表御殿二千二百十坪餘と拜承し主なる結構を左に列擧す。

賢所、 天照大神の靈代として神鏡八咫鏡を奉安せられ内侍所とも稱へらる。

皇靈殿、 御歴代の天皇、皇后、皇親の御靈を鎭祭し賢所の西に位す。

神殿、 初めは神產日神、外七神の神靈のみ祀らせ給ひしも後には總ての天神地神を奉齋し給ふ、賢所の東にあり。

神嘉殿、 天皇親ら新嘗祭を行はせ給ふ、賢殿の西位にあり。

正殿、 公儀諸式典を行はせ給ふ、御簡素の各御殿中結構最も壯麗十三間に十五間と承る。

豐明殿、 宮中御饗宴所、正殿と別棟の御造營なり。

御座所、 御座所は十間四方の建物を四間に西南の御間に陛下出御、西北の間は近侍の控所其他鳳凰の間(内謁見所)竹の間(小食所)牡丹の間(婦人の間)葡萄の間(女官面謁所)以下十數間を總稱して表御殿と稱す。

奥御殿、　聖上御居間にして中央に御寢室あり、御日常の間は西南の隅にありと仄聞す。

皇后御座所、　奥御座所より約十間を隔てゝ御建物は同じく九室あり御結構又大差なしと承る

振天府、　日清戰役の戰利品、紀念品、等を御保存あらせらる。

懷遠府、　北清事變に關する前同樣の御思召に成れる御建物。

建安府、　日露戰役に關する前同樣の御思召に成れる御建物。

悖明府、　日獨戰役に關する前同樣の御思召に成れる御建物。

御　門、　御正門は二重橋を前にし西丸大手門、坂下門は元西丸坂下門御車寄は宮城の南面、東車所は東面す。

皇宮及御所

京都皇宮、　京都の北位にあり、地積三萬三千餘坪、四方に十二の宮門あり、現在の宮殿は安政三年の御造營に係り、紫宸殿、清涼殿、常御殿、春興殿、等の御殿あり、皇室典範に依り即位大禮大嘗祭は此の皇宮に於て行はせらるゝ定めなり。

東宮假御所、　元の赤坂離宮、洋館は明治四十一年の御造營にして、震災後東宮御所となり御成婚後引續き御住居遊さる。

東宮御所、　芝區高輪にあり初め高輪御所と申し大正三年東宮御所となり大正十二年九月一日の大震災に大部分燒失す。

青山御所、　舊青山氏邸及紀州侯邸の一部、明治七年皇宮となる、明治四十五年昭憲皇太后茲に住はせられしも現時は大奥の一部に澄宮殿下御住居あらせらる。

皇子御殿、　構内の東南隅にあり、第三皇子高松宮の御常殿なり。

皇　室

天皇陛下、　人皇第百二十三代　御名嘉仁、明治天皇第三皇子、明治十二年八月三十一日御誕生同二十年八月三十一日東宮宣下、同年九月學習院初等科に御修學、同二十二年十一月三日皇太子に立たせられ陸海軍少尉に御任官、爾後御累進、同四十二年十一月三日中將、同四十五年七月三十日御踐祚、大正四年十一月十日御卽位。

皇后陛下、　御名節子、故從一位公爵九條道孝第四女、明治十七年六月二十五日御誕生、同二十二年九月十一日華族女學校御入學、同三十二年七月三十一日御卒業、同三十三年五月十日御入輿、皇太子妃宣下。

皇太子殿下、　御名裕仁、御稱號、廸宮、今上天皇第一皇子、明治三十四年四月二十九日御誕

生、同四十一年四月學習院御入學、大正元年九月九日陸海軍少尉に御任官、大勳位に叙せられ、爾後御累進、同三年四月二日初等科御卒業、爾後東宮御所内東宮御學問所に於て御修學、同五年十一月三日立太子禮、同十年三月三日海外御巡遊、同年九月三日御歸着、同十年十一月二十五日攝政御就任、同十二年十月三十一日中佐に任せらる、同十三年一月二十六日、久邇宮良子女王殿下と御結婚。

皇太子妃殿下、 御名良子、久邇宮邦彦王第一王女、明治三十六年三月六日御誕生、大正八年皇太子妃に柵立御治定、同十三年一月二十六日御成婚。

第二皇子、 雍仁親王、御稱號、秩父宮（舊淳宮）明治三十五年六月二十五日御誕生、同四十二年四月六日學習院御入學、大正四年四月二日御卒業、同月六日中等科へ御進級、回六年四月九日陸軍中央幼年學校御入學、同九年三月同校御卒業、同十一年七月陸軍士官學校御卒業、同年十月歩兵少尉に御任官、近衛歩兵第三聯隊御勤務。

第三皇子、 宣仁親王、御稱號、高松宮（舊光宮）明治三十八年一月三日御誕生、同四十四年四月六日學習院御入學、大正九年五月海軍兵學校御入學、同十三年七月御卒業。

第四皇子、 崇仁親王、御稱號、澄宮、大正四年十二月二日御誕生、大正十一年四月學習院御入學。

昌子内親王、 御稱號常宮、明治天皇第六皇女、明治二十一年九月三十日御誕生、同四十一年四月二十七日竹田宮恒久王に御婚嫁。

房子内親王、 御稱號周宮、明治天皇第七皇女、明治二十三年一月二十九日御誕生、同四十二年四月二十九日北白川宮成久王に御婚嫁。

允子内親王、 御稱號富美宮、明治天皇第八皇女、明治二十四年八月六日御誕生、同四十三年五月六日朝香宮鳩彦王に御婚嫁。

聰子内親王、 御稱號泰宮、明治天皇第九皇女、明治二十九年五月十一日御誕生、大正四年五月十八日東久邇宮稔彦王に御婚嫁。

銀婚式

明治三十三年五月十日御目出度き御結婚の御式を擧げ給ひし兩陛下には聖上御齡四十七歳、皇后御齡四十二歳、本年五月十日を以て御結婚滿二十五年、世間一般最も目出度きことゝして祝福する銀婚の齡を迎へ給ふ。

本日宮中に於て御祝典を擧げさせらるゝは國民の等しく御喜び申上げ奉る所なり。

四月十二日官報を以て左の如く公布せらる。

本年五月十日、　天皇皇后兩陛下御結婚滿二十五年の御祝儀を擧げさせらるべき旨仰出さる。

◆

宮内省に於ては、聖上御靜養中なれども　さきに明治二十七年三月九日、明治天皇銀婚の御祝典を盛大に擧げさせられし當時に鑑み種々調査準備を始めると共に此儀を兩陛下に奏請したり。

陛下には國帑多費の際勉めて簡素に行ふべき旨との有難き思召ありしと承る。

茲に於て始めて具體的の準備を進め官報公布と同時に左の御祝典の大綱も亦發表したり。

一、五月十日宮中賢所、三殿に御結婚滿二十五年の奉告祭を行はせらる、

二、當日豐明殿にて小範圍の御賜宴を開かせらる、

三、當日より四日間（五月十日より十三日迄）參賀を受けさせらる、

四、養老の思召により全國の九十歳以上の高齡者に養老杯並に酒肴料一封宛を下賜、

五、全國の孝子節婦義僕其他の篤行者に對し表に彰狀御菓子料一封宛を添へて下賜される外かねて是等篤行者の善行錄を編纂し各本人に一部宛を賜るのみならず廣く全國の諸官衙各公私立學校圖書館等に下賜さる、

御祝典は右の如く極めて小範圍に限られて明治大帝御在世當時の如き夜會、觀兵式、叙位、叙勳、授爵、大赦、又紀念章等のことは遊ばされずこは然し現世の世情を大に考慮遊ばされし結果と外形的よりもよく精神的にこの御祝典を擧げさせられる爲めと仄聞し奉る更に新らしき紀念事業を起す旨發表せらると承る。

兩陛下には當日前に沼津の御避寒先より宮城へ御還奉啓遊され祝賀を受けさせらる。

◆

當日よりの祝典の次第は奉告祭は十日午前中賢所御前並に三殿に行せ給ひたり、九條掌典長、兩陛下の御結婚滿二十五年を迎させられし旨を皇祖皇宗の御靈に嚴かに告げ奉り、兩陛下、兩殿下、各皇族の御親拜にて式を終り同時に陛下には京都桃山御陵伊勢神宮、神武天皇御陵等へ勅使として侍從を差遣し給ひ奉告祭を擧げさせらる、この奉告の儀終つて正午、皇后陛下には東宮妃兩殿下以下

各皇族殿下を從へさせられ豐明殿の賜饌場に出御相成、當日御召しの親任待遇以上の文武官約二百名よりの祝賀を受け給ひ、御饗宴を開かせらるゝその夜は又引續き御內儀にて各皇族方のみを御召しの上御祝宴を催され給ふ。

聖上陛下には御靜養中のことゝて御祝宴に出御なく御祝膳につかせ給ふ。

翌十一日より十三日まで前日に引續き文武百官の參賀を受け給ふ、高等官五等以上の文武官並に貴衆兩院議員、社會事業功勞者、外交團等約六千名に對しては特に豐明殿其他の御殿に於て茶菓を賜ひ御祝典を滯りなく告げさせられたり。

下關市沿革概略

本市の史的沿革は遠く神代に起り古書傳說等に考証すべきもの多きも今之を措きて政治的方面より尋ぬるに、紀元一千三百年代卽ち大化新政の國郡制度の當時此地は長門國司に隷屬する豐浦郡司の配下にありて其次後之が統治の任に當れるものゝ如し、中古鎌倉幕府守護地頭の制を布くや、長門守護の治下にあり、降つて大內氏時代に至り幾變遷を重ね毛利氏、大內氏に代り關ヶ原の役減封せられて防長二州を領し一族を分封するに當り此地は萩本藩、長府、淸末の兩支藩に分轄せられ各代番所を設け支配せり、斯くて明治維新となり四年廢藩置縣の令あるや七月山口、岩國、豐浦、及淸末の四縣に分ち十一月十五日更に山口縣となり縣廳を山口に支廳を萩、岩國及赤間關に置き各一部を管理せしめ其部下に部署を設け五年十月部署を改め會議所とし六年十二月三支廳を廢し二十一大區を置く、而して此地は第十五大區に指定せられ更に三小區（第一第二區は現在の下關市にして第三區は彥島、六連なり）に分ちて大區長の下に區長を設け民政を掌り其後十一年郡區町村編制法公布せられ翌十二年一月從來の大小區並に各扱所を廢し赤間關區長を置き、町村會を開き町村選出の議員を公選し又町村共同の事業及經費收支を議せしむ、二十年三月戶長を廢し區長之を統一支配したり、而して二十一年四月市制の發布あり翌二十二年彥島六連の二島を割き二十三ヶ町一ヶ村を

以て市の區域と定め四月一日より市制を實施せり、是に於て始めて自治團体として獨立するに至れり、其後二十九年唐戸灣を埋立て新に唐戸町を置き三十五年六月一日市名「赤間關」を「下關」と改稱し大正十年生野村を合併し今日に至る。

之より先明治十六年特別輸出港に指定せられ朝鮮貿易を開始し爰に始めて外國貿易港たるの形式を備へ下つて三十二年八月海外貿易港となり、三十四年五月山陽鐵道開通し三十八年九月關釜連絡定期船の航路を開き次に大正三年四月北沿岸と連絡すべき長州鐵道開通す、其他陸に海に運輸交通の便備はり商業益々發展を來し、又都市としての施設年と共に整ひ市勢逐年殷盛を加ふ。

下關市現況

總說

下關市は東經百三十度五十四分二十三秒より百三十度五十七分二秒に至り、北緯三十三度五十七分二秒より三十三度五十九分三十三秒に終り、本州の西南端に位し三方海を繞らし、即ち東は早鞆の瀬戸を出て、周防灘に面し南は一帶の水の關門海峽を隔て九州の北端門司市と相對し、西は小門の小海峽を挾んで豐浦郡彦島町に對し、海峽の外は茫々たる玄海灘を望み、北東は丘陵起伏の間、

田野を介して豐浦郡長府町、勝山村、川中村、に接續す、

市街地は商家櫛比し旅客の往來貨物の集散逐年增加殷盛を極め景趣に富める丘陵其間に點綴連亘し街路は狹隘にして交通量に比較し幅員の小なるは地勢の許さゞるとはいへ他の都市にみざるが如し、然るに近く都市計畫法の實施に共に市區の改正を見んとす。

本港の港域 は東方市の東端舊壇の浦より西南へ一線舟島（巖流島）東端を經て彦島町弟子待に至る延長一里十町餘に渉り、西は今浦地先より對岸彦島町海士郷に至る其水面積實に百八十萬餘坪、水深二十五尺餘に達し潮流急なるも波浪穏かにして内外の大小船舶織るが如く出入す、又内務省の本港修築工事も着々進捗し之が完成の期に至らば更に對外貿易港たる實力を有するに至らむ。

國有鐵道 山陽線は本市を終點とし關門連絡船を以て對岸門司市を起點とせる九州各線と連接し關釜連絡船は僅かに八時間にして朝鮮釜山府に達す、而して鐵路支那、滿州、西伯利亞を經由し遠く歐洲各國に連續す、私設長州鐵道は本年六月一日を以て國營となり本市幡生驛を起點とし山口縣の西岸を縫ひ更に北岸仙崎萩に延び山陰線に接續せば海陸の交通の便益々完備するに至らむ。又長州鐵道株式會社の經營する幡生東下關驛間は更に唐戸町關門汽船株式會社迄線路の延長をなし電車の運轉を見むとしつゝあり。

對岸門司市 とは關門連絡船の外、本市唐戸町より關門汽船株式會社の經營する連絡渡船あり

て關門兩市の來往に頗る便利なり。

本市には下關要塞司令部ありて完備せる要塞により海峽を扼して本邦全土の安全を保持し交通上軍事上、樞要の地を占め眞に帝國の關門たり、而して電氣、瓦斯の如き事業は夙に民間會社によりて經營せられ官公署學校會社等各所に散在し特に金融機關に至りては我國大銀行の支店を有し其出納金額實に四十六億萬圓を算す、商工業は勿論本市の一大產業たる漁業は日に月に發展し一大漁港築造の計畫ありて本邦唯一の港灣都市として益々隆盛に赴かんとしつゝあり。

關門の氣象

關門地方は大陸に接近するを以て風土上大陸の影響を蒙り天候の變化急にして其氣候は他の島嶼に於けるが如く溫和ならすと雖も三面海流を以てすれば又島嶼たるの性をも全く失はず顯著なる低氣壓の影響を受けざる常の地方性天候は午前は本州極西部の主山脈に基因する東風吹き午後は急に北西の海風となり其風力は疾風の弱き程度にて朝夕一時的雲量を見るも漸次晴良となるが關門地方固有の天候なり、

夏期に於ては亞細亞大陸の大氣甚だしく熱するを以て大氣輕薄となり之れが影響により關門地方も夏期の中頃氣壓最も低く之に反して冬期は大陸非常に冷却するを以て大氣濃厚となれば其影響により冬期の中頃に最も高く即ち冬期に於ては高氣壓常に西伯利亞地方に、夏期に於ては常に本邦の南東海岸遙かの洋上に低氣壓は冬期に於ては北海道の東方洋上に夏期に於ては常に西伯利亞地方に存在するを以て地勢上冬期に於ては關門地方も常に北西乃至西北西の季節風强く吹くを以て門司港は風浪高かれ共下關港は之に反して靜穩夏期に於ては常に東乃至南東の季節風吹けども冬期の如く强からざれば常に靜穩なるも夏秋期の候に於て偶々颱風が支那海に襲來せる時は下關港は東風强烈となりて風浪高けれ共門司港は之に反して頗る靜穩なれば關門兩港相俟つて頗る天惠良港と謂ふべし

土地

面積一方里〇一五强の土地を有し東西、龍司山頂より根嶽西南岬に至る一里一町五十間、南北、下關驛關釜連絡阜頭より縣道小串下關線郡市界に至る一里六町にして是れが地目別面積は、

一、官有地	一一二二、反一〇九	
一、民有地	一〇一四五、八〇二	(官有地は陸軍用地の築城部處營を含まず)
一、民有免租地	六八八、七〇九	
計	一一九五六、六一六	

民有地有租地を細別すれば

田	二三二七反 七〇三	六四五二〇円
畑	二二〇三、七一四	七〇六六
宅地	二二七三、七一六	二二四七二三一
池沼	一、七一二	七二
山林	三三〇四、九〇二	三二〇五
原野	三三、七〇三	二九
雜種地	、二一二	二九
計	一〇一四五、八〇二	二三二二一五二

又以上を市内及市外に居住する者の所有者別は左の如し、

	市内所有者	市外所有者
宅地	六五七、九三九坪	二四、一八七坪
田	六一八、三五二	七九、九六一
畑	六四二、四八九	一八、六三五
山林	九五五、八四七	三五、六二五
原野	九、七一三	、四〇〇

池沼	五二二	—
雜種地	七二	—
計	二、八八四、九三四	一五八、八〇八

免租地（[illegible]）て市役所敷地、高尾病院敷地、市營住宅敷地、水道用地、火葬場用地、墓地、學校用地、公園用地、等合計 二〇一反三一七にして其他の學校、鐵道、警察、神社、墳墓、溜池、保安林、井溝、其他を合して 六八八反七〇五あり。

土地賣買價額（但時價）

市役所調査を基礎として錄す。

	上等	中等	下等
宅地	八〇〇円（坪當り）	二七〇円	六〇円
田地	二〇〇〇、（反當り）	七〇〇、	五〇〇、
畑他	一六〇〇、	一二〇〇、	五〇〇、

尙之が賃貸は一ヶ年宅地坪當り上等十二圓、中等四圓五十錢、下等九十錢、田地反當り上等米一石四斗、中等一石一斗、下等七斗、位なり

戸數及人口

既往三十六年間に於ける戸數人口が如何なる變遷を經つゝありやを調査したるに、漁業を中心に各種の事業勃興に伴ひ戸數人口の增加を來し明治二十四年戸數、六千二百五十四戸、人口男一萬七千百十一人、女一萬六千七百十五人、計三萬千八百二十六人、五年後の二十九年　戸數七千二百四戸、人口男一萬九千八百八十五人、女一萬七千三百八十五人、計三萬七千二百七十人、十年後の三十八年　戸數一萬六千五十九戸、人口男二萬四千九百九十二人、女二萬三千七百十八人、計四萬八千七百十人、更に十年後の大正四年　戸數二萬二千三百七十四戸、人口男三萬八千三百十七人、女三萬三千七百十七人、計七萬二千百十七人に激增したるも是は單に市の公簿面に表はれたるものにして大正九年十月一日國勢調査の結果は著しく減少し、九年には戸數一萬六千百四十戸、人口男三萬七千百四十人、女三萬六千百五人、計七萬三千二百四十五人にして、

大正十四年五月十日　銀婚式當日現在は

戸數一萬八千五百六十五戸　人口八萬五千五百二十一人

神社及宗教

大正十四年五月十日現在の神社は（神饌幣帛料供進社）

社格	神社名	所在地	例祭日
官幣中社	赤間宮	赤間町	拾月七日
縣社	亀山八幡宮	神宮司町	拾月拾五日
鄕社	嚴島神社	新地町	拾月拾七日
村社	鎭守八幡宮	阿彌陀寺町	拾月拾五日
同	大歲神社	竹崎町	四月拾五日
同	嚴島神社	伊崎町	拾月拾一日
同	椋野八幡宮	椋野	拾月五日
同	八幡宮	幡生	拾月九日
同	八幡宮	大坪	拾月九日
招魂社	官祭櫻山招魂社	長崎町	四月拾六日

尙　無格社八社を加ふれば拾八社、神職專任拾人、兼職拾三人にして、神社境內坪數官有地二千六拾坪二五、民有地、四千七百九拾七坪六九、計六千八百六拾二坪七二ありて氏子、戸數六千一戸人員三萬五人、總代五拾九人、に及び崇敬人員八萬四百人を數へつゝあり。

寺院は

曹洞宗寺院六、住職六人、僧侶七人、檀家總代二拾五人、檀家二百四拾五戸、檀徒千四拾五人、土地坪數二萬三千六百四拾五坪、建物坪數八百四拾五坪あり。

眞宗寺院九、住職九人、僧侶二十六人、檀家總代四十六人、檀家二千八百六十三戸、檀徒一萬二千七百五十六人、土地一萬三千三十一坪、建物千五百八十坪。

眞言宗寺院四、住職四人、僧侶三人、檀家總代、二拾六人、檀家千六拾戸、檀徒五千二百二拾六人、土地八千二拾五坪、建物五百九拾一坪。

臨濟宗寺院四、住職四人、僧侶九人、檀家總代拾人、檀家二百七拾五戸、檀徒千三百人、土地一萬千三百二拾八坪、建物六百二拾六坪。

淨土宗寺院四、住職四人、僧侶拾二人、檀家總代拾四人、檀家千三百三拾九戸、檀徒六千二百六拾人、土地一萬二千百六拾八坪、建物六百八拾七坪。

日蓮宗寺院三、住職三人、僧侶拾人、檀家總代九人、檀家七百七拾七戸、檀徒三千四百三拾一人、土地二千四百四拾一坪、建物五百四拾六坪。

時宗寺院一、住職一人、僧侶一人、檀家總代三人、檀家八拾戸、檀徒四百人、土地一萬四千九百六拾坪、建物百五拾四坪。

右の如く寺院三拾八、宗旨八種、住職三拾八人、僧侶八拾一人、檀徒三萬千三百拾六人にして市

の人口八萬五千五百二拾一人より考察するに五萬四千二百五人は確かなる宗旨なきが如し。

基督教會布教師、外國人男女各一人、內國人男六人、計八人にして四つの教會と信者男二百拾七人女三百四拾五人、計五百九拾二人あり。

教育

下關市の豫算中經常部臨時部を合して大正十四年度總額百三十三萬三千九百五十一圓の內教育費三十四萬六百一圓にして如何に市財政の行詰りを來すと雖も教育費の削減等其餘地なく更に不足を生じ、尋常小學校の如きは一校を建設せざれば就學兒童を收容し難き狀勢にして現在各小學校共一學級に六十名乃至七十餘名を收容するは教育上輕々に看過すべき問題にあらず。

教育施設に就き既往を調査考察するに大正八年度の教育費は十二萬八千六百三十圓、同九年度二十三萬八千五百九十七圓、同十年度二十七萬七千八百十五圓、同十一年度三十二萬六百九十一圓と累年增加し大正十四年度に於ては前記の如く三十四萬餘圓に激增したり、其內義務教育費即ち尋常小學校費十三萬五千二百九十三圓を最高に市立商業學校費四万六千二百四十八圓、高等女學校、高等小學校、實踐學校、幼稚園費、年々歲々人口の增加と共に教育費の膨張は勢の免るゝ能はざるものなり。又是が收入を見るに大正八年度五萬千六十八圓、同九年度七萬七圓、同十年度七萬六千五百

十一圓、同十一年度九萬七千七百三十一圓、同十二年度に至り十萬一千七百七十七圓にして細別せば授業料六万四千百十九圓、國庫補助金一万千二百九十七圓、基本財產より生ずる收入三百二十三圓、等にして、各學校の資產は尋常高等小學校三十八万八千圓、商業學校十九万四千圓、高等女學校十二万五千圓、幼稚園十七万七千圓、實踐學校六万八千圓、合計百六十九万七千二百十六圓なり

大正十四年五月十日銀婚式當日に於ける現在各種學校名、位置、創立、年月日、學校長名等左の如し。

校名	所在地	創立年月日	現任學校長氏名
市立養治尋常小學校	園田町	明治六年三月	武永彦一
市立關西尋常小學校	竹崎町	仝年三月二十一日	立野又吉
市立王江尋常小學校	王江山	仝七年八月十四日	佐古勉
市立下關高等小學校	王司町	仝二十一年四月	多賀彦熊
市立菁莪尋常小學校	上田中町	仝三十七年九月十六日	岸本貫一
市立名池尋常小學校	名池山	仝四十二年四月二日	林正助
市立櫻山尋常高等小學校	上新地町	大正四年九月一日	田上傳介
市立生野尋常高等小學校	生野	明治六年（尋常小學校ト命名ハ明治二十年四月）	下田張助

縣立下關中學校	後田	大正九年三月十七日	津守馨
市立下關商業學校	名池山	明治十七年十月十八日	藤井鶴松
市立下關高等女學校	高尾	仝三十八年四月二十八日	水上浩然
市立下關商業實踐學校	東南部町	仝四十三年四月十一日	矢田謙造
市立下關工業實踐學校	竹崎町	大正十年三月二十八日	立野又吉
私立阿部高等技藝女學校	吉見山	明治四十五年四月	阿部ヤス
私立下關梅光女學院	丸山町	仝年四月一日	廣津藤吉
私立下關博愛盲啞學校	上田中町	仝四十年八月十六日	齋藤軍八郎
私立關西高等簿記學校	園田町	仝四十一年十一月	中春彙雄
市立幼稚園第一園	上田中町	仝三十二年十一月十五日	木下ツネ
同　第二園	丸山町	仝四十二年十一月八日	上田タケ
同　第三園	竹崎町	仝年十月一日	篠谷ツマ
同　第四園	宮田町	大正十一年六月	重宗キチ

都市として普通農業の振興せざるは當然の狀勢なるも、特用作物乃至蔬菜園藝に至りては年々其産額を增加しつゝあり。

大正九年頃には關後地村に僅か百戸の農家散在し主として蔬菜園藝に從事せるも大正十年生野村を合併し、農家三百三十戸、內自作農百三十一戸、小作農九十三戸、自作兼小作農百七戸を現在有するに至り、之が耕作田地は百二十一町一反歩、畑地百十九町九反歩にして、農家一戸當り田地三反七畝歩、畑地三反六畝歩、計七反三畝歩なり、普通農事其他の特種農産物收穫高は二十五万七百八十九圓なり。各種別生産額は左の如し。

一、米作收穫高

イ、水稻粳米	二千五百十四石	ロ、水稻糯米	二百四十五石
計	二千二百九十九石		

二、麥作收穫高

イ、大麥	三十八石	ロ、小麥	八石
ハ、裸麥	三百九十八石	計	四百四十四石

三、果實收穫高

イ、梅	二百十一本	ロ、梨	五十五本
ハ、宜柑	百七十本	ニ、柿	六百八十三本
ホ、（ネーブルオレンヂ）三十五本		ヘ、其他	百四十本
ト、夏橙	六百十八本	計	樹數 千九百十二本

〔但十四年の市價を以て算出せり。〕

四、蔬菜類收穫高

作付反別　百町七反二畝歩、　金額六万千四百五十二圓。

五、豆類甘藷其他

作付反別　十六町四反歩、　金額五千九百十九圓。

六、牛乳搾乳

搾乳戸數　四戸　産乳　九百二十八石　金額四萬六千四百圓。

七、家禽類

飼養戸數五百七十一戸　家禽數一万三千七百八十羽　値段一万二千八百七十六圓

産卵數　六拾五万千百六拾個　價額　三万二千五百五拾八圓

八、屠畜類

牛　四百五拾九頭　收量　二万千五百九拾四貫　金額　七万五千七百五拾三圓
豚　四拾六頭　同　六百九拾貫　同　二千七拾圓
計　五百五頭　計　七万八千二百七拾三圓

（搾乳屠畜）は農業關係にあらざれども便宜上家畜關係として此の部に附記したり。

以上の如く農業關係生産高は三拾二万千七百三拾七圓に過ぎず、前記の外林業養蠶等あるも微々として振はず都市とし農業の推移は知るを得べし、

工業

本市に於て産出、製造に係る主要なる工産物は製綿、染物、莫大小製品、造船、機械類、車輛、度量衡品、体溫器、農具、硝子器、油類、木蠟、蠟燭、賣藥、肥料、醬油、味噌、清凉飲料水、氷菓子、罐詰、麵類、豆腐及蒟蒻、紙器、和傘、木製品、竹製品、靴、硯、漁網、帽子、疊床、石鹼等にして總生産高年間四百拾六万千三百八拾九圓に達す。

右の内最も多き生産は菓子、の八拾六万百三拾五圓、木製品の五拾一万四千七百八拾九圓、漁網の四拾五万八千圓、氷の三拾九万四千九拾五圓、清凉飲料水の三拾二万八千七百七拾五圓、罐詰の二拾六萬三百拾五圓、油類の二拾萬六千五百四拾一圓、体溫器の拾三萬二千圓、車輛の拾萬九千五百五拾圓、醬油拾三萬八千四百八拾圓、等にして其他の製品は何れも拾萬圓以下なり、但造船は年に依り三拾萬圓内外二拾乃至三拾の製造あることなしとせず。

文筆の士が最も珍重する本市特産品所謂名物として内外に知らるゝ赤間關の硯につき調査したるに製造戸數四、男工八、生産量一萬六百九拾個、價額一萬七百六拾圓にして金額に數量に僅少なるを知るべし。

電燈及動力、東邦電力株式會社下關支店の營業區域に屬する本市の電燈使用戸數は約一萬八千戸七萬四千個の燈數を有し、線路長四拾哩、線條長二百拾哩、電動力使用戸數三百四拾戸、八百四拾二馬力、KW六三〇内外なり。

瓦斯、は下關瓦斯株式會社により供給せられ引用戸數千三百五拾、燈火用孔數三千九百二拾、熱用三千四百にして之が製造高は四〇五二二、九〇〇立方呎なり。

工業其他に消費する石炭の量は大正八年度に於て、船舶用三〇、五七八、〇九七斤、價額三九七、

五一五圓、工場用四二、二五三、六〇七斤價額五四九、二九六圓にして五年後の大正拾三年に於ては船舶用一四四、四六八、四六〇斤　價額一、一九九、〇八八圓、工場用二一、二九六、八八〇斤　價額一七六、七八四圓、　合計年間　一六五、七六五、三四〇斤　價額一、三七五、八七二圓に達するに至れり。

大正十四年五月十日　各種職工賃金表

塗師	日給貳圓五拾錢	染物	日給壹圓八拾錢	和服仕立	日給貳圓拾錢
錺職	仝　參圓	指物	仝　貳圓六拾錢	煉瓦積工	仝　參圓貳拾錢
大工	仝　貳圓八拾錢	畳刺	仝　貳圓五拾錢	菓子製造	仝　壹圓八拾錢
木挽	仝　貳圓九拾錢	靴工	仝　貳圓五拾錢	車製造職	仝　貳圓六拾錢
左官	仝　貳圓八拾錢	下駄職	仝　貳圓參拾錢	洋服仕立	月給五拾五圓
石工	仝　參圓貳拾錢	鑄物工	仝　貳圓五拾錢	馬車挽	仝　百貳拾圓
瓦葺	仝　貳圓七拾錢	鍛冶工	仝　貳圓五拾錢	車力挽	仝　七拾圓
植木	仝　貳圓五拾錢	鍼力工	仝　貳圓七拾錢	日傭人夫	日給　貳圓
仲仕	仝　參圓五拾錢	印刷工	仝　貳　圓	活版植字	仝　貳圓
綿打職	仝　貳　圓	油搾職	仝　貳圓貳拾錢	醬油杜氏	月給五拾七圓

船大工	仝　參　圓	樋職	仝　貳圓參拾錢	下男(賄付)	仝　拾六圓
下女	月給拾貳圓(賄付)				

商業

下關商業會議所沿革概要

赤間關商法會議所……赤間關商工會……赤間關商業會議所……(明治二十六年改稱下關商業會議所)

本會議所は明治十三年八月有志者の發起にて、本縣縣令に出願し其の許可を得て、赤間關商法會議所を創設したるに起因し、明治二十一年六月其の組織を變更して、赤間關商工會と改稱し、明治二十三年九月商業會議所條例發布せらるるに當り、更に組織を變更して翌年六月商業會議所の設立認可申請を爲し、同年九月農商務大臣の認可を得たり、之れ即ち公法上の創始にして、同年十二月議員の選擧を行ひ以て其の成立を告げたり。

其後三十五年三月に至り、商業會議所法發布せられ、同年七月一日を以て實施の期と定められたるに依り、同年六月議員總會に於て、該法に據り繼續することに決議し、議員の定數及選擧資格に關する制限並に議員選擧其他に關する諸規定を議定し、翌三十六年二月議員選擧の施行申請を爲し、

同年三月定數議員三十名の選擧を行ひ、次いで翌月役員十名（正副會頭各一名常議員八名）を選任し、同年十二月特別議員六名を選擧し、爰に新組織の機關成り、爾來二年毎に議員の半數改選を行ひ、其の都度役員並に特別議員を改選したりしが、大正五年七月改正商業會議所法發布せられ、經費の强制徵收權の復活と共に、半數改選は總改選となり、六年三月二十九日、三十日の両日總改選を執行し、十年三月任期滿了、同月改選を行ひ十四年三月任期滿了同月改選を行ひ以て五月十日の銀婚式を迎ふるに至れり。

上記の如く本會議所は其の起原より算すれば四十六年の星霜を經、法律上の創始よりすれば三十五年を經過し、全國商業會議所中第十一位にあり、斯の如く起原する處遠く、其の間に於ける事業の擧ぐべきもの亦尠しとせざれども、其の記述は之を他日に讓りて爰には變遷のみに止め其の大要を記することとすべし。

一、赤間關商法會議所

明治十三年八月四日有志者九十三名連署し、發起人として創立願書を當時の本縣縣令關口隆吉氏に提出し、同月九日を以て許可を得、規約を議定し、九月一日總會議を開き、第一期の役員選擧を行ひ十一月五日開所式を擧行したり、會員は發起人の外加入者數十名にして、役員は會頭一名副會頭二名常置委員七名理事一名とし、維持費として縣廳より特に下附金を受くるの外、會員より會費

を徵收して之れが經營に當りしも、事創始に屬するが上に經費は少額に失し、維持に困難を感ずるに至りしかば、十六年末組織變更の議起り、會議を重ねて從來の規約を改め、會員の範圍を擴張して、赤間關區に居住する商工業者一般を網羅することとし、通常會員、特別會員の二種に分ち、前者は各町より二名宛を公選したる者、後者は希望に依る入會者とし、役員を正副會頭各一名、委員七名、理事一名として、其の任期を一年とし、以てその基礎を固くして、明治二十一年三月商工會と改稱するまで繼續したり。その間の役員氏名左の如し。

會頭	佐々木男也	副會頭	難波舟平	同　小松昌平（自明治十三年至明治拾六年）
會頭	伊藤房次郎	副會頭	松尾寅三	（自明治拾七年至明治二拾一年）

二、赤間關商工會（自明治二十一年　至明治二十四年）

商法會議所創立以來年を閲すること八年、時代の推移は所務に繁雜を加へ、經費亦之れに伴ふて增加を免れざる等、關係者の苦心一方ならず、前記の如くその組織を改むるに至りしが、更に再び改正の議起り、二十一年三月十日臨時總會を開きて、商工會と改稱すると共に事務の發展を期すべく決議し、伊藤房次郎、松尾寅三、德永安兵衛、增富久三郎、三井忠藏氏の五氏を整理委員に選任して、規程並に議事細則を制定し、役員の選擧を行ひ、六月八日を以て發會式を擧げたり、斯くして、二十二年に至り、政府に於て商業會議所條例制定の議あり、全國主要都市の商工業者を集め諮

問し、成案を得たるも發布の時機に至らざりしが、時代の要求は之れが急施を要するものあり、同年九月總會の決議を經て同條例發布の請願書を提出し、政府の容るゝ處となり、翌二十三年九月十一日を以て發布せられたり、是に於て商工會は同條例に準據し維持斷續する爲め、同年十月九日春帆樓に於て創立發起人會を催し協議の結果、經費收支豫算並に選擧權者其の他設立に伴ふ重要案件調査の爲め松尾寅三、芳岡六左衛門、古谷滿二郎、關谷禎造、小松昌平の五氏を委員に選み、諸氏は急速に之れが調査を了して、同月二十九日其の結果を報告し、更に委員芳岡、松尾、古谷、小松四氏の外に、德永安兵衛、永積安兵衛、難波舟平の三氏を加へて、設立委員に選み、翌二十四年六月一日設立認可申請書を其筋に提出し、同年九月九日付を以て認可の指令に接したり、是れ即ち本所創始なりとす。

商工會當時の役員は左の如し。

會頭　伊藤房次郎　副會頭　三井忠藏　〔自明治二十一年至二十二年〕

幹事　松尾寅三　德永安兵衛　草刈隆一　芳岡六左衛門　永積安兵衛

會頭　小松昌平　副會頭　三井忠藏　〔自明治二十三年至二十四年〕

幹事　芳岡六左衛門　松尾寅三　德永安兵衛　永積安兵衛

三、赤間關商業會議所（明治二十五年下關商業會議所と改稱す）

前記の如く設立認可の指令に接したるは二十四年九月九日にして、夫れより直ちに選擧名簿の作成に着手し、縱覽其の他の規定の手續を了はりて同年十二月十八日會員選擧會を開き、選擧委員には芳岡六左衛門、小松昌平、永積安兵衛、關谷禎造四氏、立會人には嶋田直太郎、林二郎、松尾寅三、三氏之に當り、議員三十名の選擧を行ひ、續いて同月二十五日市長高洲素介氏の招集により、永積安兵衛氏を假會頭に選び、設立第一回の會員總會を開き、定款起草委員として、松尾寅三、永積安兵衛、芳岡六左衛門、小松昌平、瓜生寅の五氏を選任し、二十五年二月八日起草定款議定の爲め臨時總會を開催し、更に三月十四日再び臨時總會を開きて、會頭一名、副會頭二名、常議員五名の選擧を行ひ、爰に全く成立を告げ、爾後二年毎に會員並に役員を改選し、明治三十五年三月商業會議所法の發布に際し、松尾寅三、內田吉三郎、關谷禎太郎、林平四郎、土井重吉、小松元吉、和田又藏、岡田好治郎、德永安兵衛、齋藤軍八郎、十氏を委員に選任し、新法に據る諸規定を制定して、翌三十六年三月議員の總選擧を行ひ、一級二級に分ちて各十五名を選出し、續いて、會頭副會頭各一名常議員八名を選擧し、爾來二年毎に議員の半數及役員の改選を行ひ、四十二年定款改正に際し常議員を五名とし、大正二年改めて七名と爲し、大正五年所法の改正あり、從來の半數改選は總改選と改められたると共に任期は四年となり今日に至れり、赤間關商業會議所創立以來の役員並

に議員氏名左の如し。

明治二十四年

會頭　伊藤房次郎　副會頭　松尾寅三　同　永積安兵衛

常議員　德永安兵衛　內田吉三郎　芳岡六左衛門　小松昌平　難波舟平

會員　增富久次郎　三宅熊太郎　米光吉右衛門　關谷禎造　林平四郎

有光茂吉　市藤清太郎　安井作次郎　原五郎兵衛　德永又輔

關谷福太郎　福田重次郎　藤田重治　桝谷平三郎　瓜生寅

桐山秀四郎　米商會所　第百國立銀行　林政二郎　小松元吉

高瀨德藏　古谷滿二郎

明治二十六年

會頭　伊藤房次郎　副會頭　松尾寅三　同　永積安兵衛

常議員　德永安兵衛　小松昌平　芳岡六左衛門　內田吉三郎　關谷福太郎

會員　桐山秀四郎　林平四郎　藤田重吉　瓜生寅　岡田好治郎

三宅熊太郎　原五郎兵衛　佐々木茂兵衛　小松元吉　市藤清太郎

木梨信一　福田重二郎　土井梅三郎　古谷二滿郎　有光茂吉

米光吉右衛門　桝谷平三郎　山名松次郎　關谷禎造　增富久次郎

磯部良介　高瀨德藏

明治二十八年

會頭　伊藤房次郎　副會頭　松尾寅三　同　永積安兵衛

常議員　德永安兵衛　芳岡六左衛門　小松昌平　內田吉三郎　關谷福太郎

會員　小松元吉　和田又藏　木梨信一　貞永知介　澁谷勝

三宅熊太郎　瓜生寅　桐山秀四郎　林平四郎　岡田好治郎

原五郎兵衛　佐々木茂兵衛　市藤清太郎　土井重吉　古谷滿二郎

有光茂吉　米光吉右衛門　關谷禎造　增富久次郎　高瀨德藏

山名松次郎　藤城安右衛門

（山名松次郎　兩氏辭任）

（三宅熊太郎　芳岡六左衛門　米光吉右衛門　小松昌平　の三氏死亡）

明治二十九年（伊藤會頭辭任補欠選擧）

會頭　松尾寅三　副會頭　永積安兵衛　同　德永安兵衛

明治三十年

會頭　松尾　寅三　副會頭　內田吉三郎　同　關谷福太郎

常議員　永積安兵衛　小松　元吉　岡田好次郎　土井　重吉　林　平四郎

會員　高瀨　德藏　市藤清太郎　關谷　禎造　川崎助左衛門　桐山秀四郎

古谷滿二郎　溝國　勢平　福田重次郎　佐々木茂兵衛　奈良原善助

藤田重次郎　瓜生　寅　三宅熊太郎　米光吉右衛門　木梨　信一

桝谷平三郎　磯部　良介

加藤良介（補欠）　藤井庄藏（補欠）　竹井千之亟（補欠）　畠山島藏（補欠）

明治三十二年

會頭　松尾　寅三　副會頭　內田吉三郎　同　關谷福太郎

常議員　永積安兵衛　小松　元吉　岡田好治郎　土井　重吉　林　平四郎

會員　高瀨　德藏　市藤清太郎　關谷　禎造　川崎助左工門　桐山秀四郎

古谷滿二郎　佐々木茂兵衛　溝國　勢平　福田重次郎　奈良原善助

德永安兵衛　和田　又藏　川崎　重吉　竹井千之亟　梶永　吉藏

安井作次郎　早野重右衛門　貞永　知介　藤井　庄藏　山村　茂

梶山　新介　藤城安右衛門

明治三十四年

會頭　松尾寅三　副會頭　內田吉三郎　同　關谷福太郎

常議員　土井　重吉　和田　又藏　林　平四郎　小松　元吉　岡田好次郎

會員　德永安兵衛　川崎　重吉　竹井千之亟　早野重右衛門　梶永　吉藏

安井作次郎　貞永　知介　藤井　正藏　藤城安右衛門　山村　茂

梶山　新助　關谷　禎造　溝國　勢平　佐々木茂兵衛　河村　安藏

日野　甚吉　高瀨　德藏　市藤清太郎　川崎助左衛門　內田　傳吉

佐野　竹藏　秋田又次郎　中嶋榮助（補欠）

明治三十六年

會頭　下關米取引所代表　內田吉三郎　副會頭　林　平四郎

常議員　土井　重吉　和田　又藏　安井作次郎　梶永　吉藏　川崎　重吉
柳井清兵衛　內田　傳吉　永積德兵衛

議員　藤井　庄藏　佐々木茂兵衛　百合本安太郎　原田米之進　桝谷　音三
梶谷七三郎　藤城安右衛門　松本新左工門　山村　茂　田中庄之助
寶邊岩次郎　中尾　直吉　關谷福太郎　河村　安藏　岡田好次郎
西村惣四郎　原田　周藏　秋田又次郎　西村　傳藏　足立　祐三

明治三十八年

會頭　室田　義文　副會頭　土井　重吉

常議員　桝谷　音三　梶永　吉藏　柳井清兵衛　安井作次郎　高瀨　德藏
佐々木茂兵衛（辭任）　原田　周藏　內田　傳吉　林　平四郎（補欠）

議員　永積安兵衛　原田幾之進　藤城安右衛門　山村　茂　西村惣四郎
河村　安藏　岡田好次郎　松本新左工門　早川　金助　岡七左工門
下關米取引所　川崎助左工門　鞍崎伊之助　秋田又次郎　阿南榮太郎

福田辰五郎　小畑　吉藏　廣橋　嘉市　原田　岩吉

明治四十年

會頭　室田　義文　副會頭　土井　重吉

常議員　桝谷　音三　高瀨　德藏　梶永　吉藏　原田　周藏　安井作次郎
內田　傳吉　柳井清兵衛　下關米取引所代表者　岡田好治郎

議員　川崎助左工門　桝岡七左工門　早川　金助　鞍崎伊之助　秋田又次郎
阿南榮太郎　福田辰五郎　小畑　吉藏　廣橋　嘉市　原田　岩吉
藤城安右工門　西村惣四郎　綿山勝三郎　松尾　由介　金井淺次郎
河村　安藏　豐永　七藏　林　助之進　三由　仁作　菊谷　茂吉

明治四十二年

會頭　關谷福太郎（任期中辭任）　副會頭　豐永　七藏

常議員　松尾　由介　平野榮次郎　林　助之進　三由　仁作　綿山勝三郎

議員　原田　周藏　安井作次郎　土井　重吉　菊谷　茂吉　西村惣四郎

梶永　吉藏　金井淺次郎　下關米取引所　河村　安藏　秋田又次郎
枇杷茂太郎　鞍崎伊之助　藤城安右工門　阿南榮太郎　阿部幸次郎（辞任）
御喜　作藏　内田　善助　吉永辰三郎　大谷芳太郎　河崎正三郎
港　文平　河野　久藏　安部　貞雄　秋田寅之介（補欠）

明治四十四年

會頭　内田吉三郎　副會頭　豊永　七藏
常議員　秋田又次郎　松尾　由介　平野榮次郎　御喜　作藏　安井作次郎
議員　秋田寅之介　西村惣四郎　菊谷武治郎　林　平四郎　綿山勝次郎
豊田市九郎　百合本安太郎　福田　新作　林　菊次郎　尼田　德藏
枇杷茂太郎　鞍崎伊之助　阿南榮太郎　内田　善助　吉永辰三郎
大谷芳太郎　河崎正三郎（死亡）港　文平　河野　久藏　阿部　貞雄
土井彌三郎（補欠）　原田周藏（補欠）

大正二年

會頭　内田吉三郎　副會頭　豊永　七藏
會頭　林　平四郎（大正三年）
常議員　松尾　由介　御喜　作藏　百合本安太郎　西村惣四郎　安井作次郎
吉永　米藏
議員　秋田寅之介　菊谷武治郎　林　平四郎　豊田市九郎　福田　新作
林　菊治郎　尼田　德藏　林　米吉　秋田又次郎　内田　善助
安部　貞雄　泉　菊太郎　上村　鶴助　柳　千三郎　中尾源次郎
河野德之助　今田儀三郎　船越　眞鄉　繩田政次郎

大正四年

會頭　桝谷　音藏　副會頭　吉永　米藏
常議員　松尾　由介　西村惣四郎　秋田又次郎　三由　仁作　土井彌三郎
御喜　作藏　林　米吉
議員　内田　善助　安部　貞雄　泉　菊太郎　上村　鶴助　柳　千三郎
中尾　源次郎　河野德之助　今田儀三郎　船越　眞鄉　繩田政次郎

秋田寅之介　菊谷武治郎　安井作次郎　淺海壽之吉　寶邊岩次郎
善長定吉　豊田市九郎　福田新作　松田剛市　藤田光之進
百合本安太郎

大正六年（爾後總改選）

會頭　下關倉庫株式會社代表　德永安兵衛　副會頭　松尾由介

常議員　西村惣四郎　百合本安太郎　三由仁作　豊永七藏　秋田寅之介
菊谷武治郎　林米吉

議員　土井實太郎　廣瀧幸吉　内田善助　豊田市九郎　安井一郎
柳千三郎　前田金造　善長定吉　小島幸助　關谷美濃介
大村岩吉　兒島吉三郎　泉菊太郎　藤井直二郎　合資會社内傳商店
矢野久太郎　中村信太郎　船越眞郷　長谷川虎藏　野上直吉
藤田光之進

大正十年

會頭　下關倉庫株式會社代表　德永安兵衛　副會頭　松尾由介

常議員　林米吉　豊永七藏　富海松兵衛　善長定吉　菊谷武治郎
百合本安太郎　三由仁作〔イロハ順〕

議員　柳千三郎　東善之助　矢野久太郎　安井光三　藤田光之進
大村岩吉　平野虎五郎　增田來助　港文平　益野幸吉
河崎光藏　豊田市九郎　泉菊太郎　中島德治郎　林新吉
兒島吉三郎　中島寅之進　關谷美濃介　前田金造　重岡熊太郎
藤井直二郎〔議席順〕

特別議員　林平四郎　桝谷音三　齋藤謙　秋田寅之介　西岡貞太郎
貝嶋太市　藤井啓一　寶邊岩次郎　山崎繁樹〔議席順〕

大正十四年

會頭　桝谷音三　副會頭　松尾由介

常議員　豊永七藏　河崎光藏　城山保次郎　善長定吉
林米吉　三由仁作　富海松兵衛

議員　大村岩吉　平野虎五郎　石井喩一　中嶋寅之進
前田金造　藤田光之進　萬代增次　藤本誠
小島幸助　河村光藏　菊谷音藏　山本德一
安井光三　重岡熊太郎　宮崎正作　林新吉
兒嶋吉三郎　柳千三郎　淵上繁　伊藤美彌一
菊谷武治郎　富田鶴三　港文平　土井實太郎
泉菊太郎　垢木照一　東善之助
特別議員　林平四郎　齋藤謙　西岡貞太郎　貝嶋太市
藤井啓一　寶邊岩次郎　土井重吉　秋田寅之介
村岡清吉　松崎壽三

下關經濟界概要

外國貿易

下關港に於ける外國貿易は船舶が門司港に出入し其輸出入貨物が門司港を經由する關係上門司港

と切放して見ることを得ずされは關門兩港としての貿易を十年前に溯り其對比表を掲げて趨勢を示さむ。〔單位千圓〕

關門兩港外國貿易表

	輸出	輸入
大正四年	二〇、六五九	二四、四〇九
仝　五年	三四、六五〇	三三、一八〇
仝　六年	五四、五六七	三三、一八〇
仝　七年	五三、六二五	七三、四八一
仝　八年	五〇、〇二七	九五、六八〇
仝　九年	五二、八七七	九〇、三〇〇
仝　十年	三四、二四七	六二、四三六
仝　十一年	三〇、四二八	六五、九五五
仝　十二年	二六、六七六	七〇、四六六
仝　十三年	三〇、一五一	九二、三二六

右の如く關門兩港の輸出入關係に於ては常に輸入超過し昨十三年に於いては輸出三千十五萬百十五圓輸入九千二百三十二萬六千圓、合計一億二千三百四十七萬圓にして十年前の大正四年に比すれば

輸出九百四十九萬圓餘、輸入六千八百九十一萬圓餘各增加し合計七千八百四十萬圓餘の增加を來せり、大正六年より同九年に至る四年間は歐洲戰時中より戰後にかけて本邦經濟界の好景氣時代にして其の消長は明らかに經濟界の　昌を現はしたるものなり、關門兩港の輸出入は主として對支貿易

內國貿易

內國貿易としては臺灣、朝鮮、九州等に對する交通の要路に位置せる關係上其の貿易の範圍汎く所謂中繼港として主要なる地位を占めつゝあり、左に朝鮮臺灣內地沿岸に分ち貿易の狀勢を示せば左の如し。〔單位千圓〕

朝鮮貿易表

	移出	移入
大正四年	八、六九五	七、一五九
五年	一一、二六七	八、六五四
六年	一七、一〇一	一六、八三四
七年	二六、三九〇	三五、八〇六
八年	三五、六二〇	四八、四〇四
九年	三五、六二〇	四〇、九二〇
十年	二〇、四六八	三八、七五五
十一年	二〇、四六八	三八、七五五
十二年	三〇、二〇三	三〇、八七七
十三年	一三、六〇一	二六、〇一二

我內地に於て朝鮮貿易の最高順位は第一位大阪、第二位神戸、第三位は實に我下關なり。

臺灣貿易表

	移出	移入
大正四年	五、〇六五	三、九二八
五年	七、三三四	一四、二五六
七年	一〇、五〇五	一一、四六五
八年	一三、二二六	一三、〇六八
九年	一四、四〇八	一八、九八一
十年	一二、六九五	一一、三九八
十一年	一一、六六三	一三、六九一
十二年	一一、四四七	二〇、三一七

十三年　一三、四九九　三一、五五〇

内地貿易

内地貿易は船舶による内地關係の貿易にして最も海産物は別に掲ぐる事として此貿易の範圍は本縣下は勿論、四國、九州、中國、京阪各地方に渉りて最近五ヶ年の對比を示さんとす。

下關内地貿易表

	移出	移入
大正九年	八四、一三一	九五、六一六
十年	六三、三八九	五九、三四七
十一年	五三、六一三	七〇、九〇五
十二年	四七、三八四	六六、六七二
十三年	四九、〇一五	六七、六五六（水産物を除く）

大正十三年の移出入額は一億一千六百六十七萬一千圓にして大正九年の一億七千九百七十四萬七千圓に比すれば六千二百七萬六千圓に減退し九年以下の現今の經濟界が如何に沈滯しつゝあるかを知るを得べし。

魚類の集散

下關港は魚類の集散に於て本邦中第一位を占むるの誇りを有し、此の誇は本邦の食料政策上の見地より本邦第一の漁港を築造すべく計劃されつゝあり、宜なりと謂ふべし。

其集散高は年に依り漁獲に關係し多少の增減あるも大正十三年中の移入も金額に積算せば鮮魚四千五百六十七萬七千圓、塩魚九百九十七萬八千圓干魚七百九十三萬八千圓なり。

之に海産肥料、海草、其他を合算すれば約七千萬圓を超へつゝあり。

漁港築造の必要は主として鮮魚の集散關係にありて其集散の如何なる狀態にあるやを探究せざるべからず、先づ其發展の起原よりせば近來頓に發達せる遠洋漁業船卽ちトロール船、手繰網船等は下關港を根據地として活動するに至りたるを抑々の起りと云ふべく現在是等の漁撈船にして下關を根據とするトロール船五十六隻（本邦制限數七十隻）手繰船大型七十隻同小型百二十隻、運搬船約四百隻の多數に上り港内常に賑ふ、手繰網船とは、二隻の發動機船にて共同作業をなす底曳網漁業にして大型は二十噸以上五十噸、而して是等大型トロール船の漁撈地は支那海、臺灣海峽等の遠洋にして一航海に一週間以上を要す、前記の鮮魚移入額の四千五百六十七萬七千圓は主として是等漁撈船の漁獲高にして供給地方は下關市内外、北九州は勿論殆ど全國に亘れり、十三年中下關驛より汽車にて發送したるもののみにても十二萬一千百二十一噸に上り其發送先の主なる地方は左の如し

下關驛鮮魚發送噸數（大正十三年中、單位噸）

大阪	三八、〇八七	福山	二、一八〇
兵庫	一一、九〇二	濱松	七八三
靜岡	三、九三六	東京	一八、〇八七
松江	九三一	熱田	四、〇九九
京都	二一、四三三	姫路	一、三八一
岡山	五、二六三	其他	一二、四九〇
合計	一二一、一二一		

金融狀況

下關市內の主なる商業銀行は七行にして、『百十銀行、住友銀行支店、横濱正金銀行支店、三井銀行支店、十五銀行支店、朝鮮銀行支店、第一銀行支店、』此の七行に於ける大正四年より十三年迄十ヶ年間各年末勘定による預金及貸出高は左表の如し。（單位千圓）

	預金高	貸出高
大正四年末	七、三五二	一〇、〇七六
仝　五年末	九、一七九	一五、一〇五
仝　六年末	一三、三四二	二〇、九四一

仝　七年末	三〇、七八〇	三四、六〇四
仝　八年末	三二、四七一	四七、九四八
仝　九年末	三一、九六七	三〇、五五一
仝　十年末	三四、八二九	三三、〇六四
仝十一年末	三四、九五三	三〇、四三四
仝十二年末	三五、〇四一	三四、二二八
仝十三年末	三四、六一二	三三、六一一

以上の如く昨十三年と大正四年と即ち十ヶ年前に對比せば其間の金融狀態を考察し得べく大正八年の如きは貸出高最も多額に上り九年は頓に減退し以後は預金は增加の趨勢を辿り貸出は增減常ならざる狀態なり、大正六年に於ける急激なる增加と九年に激減等は共に經濟界變動の狀勢を明示せるものと見るべし、前記の如く十三年中に入れる金額は二億五千六百萬三千圓、出に係る金高は二億八千三百五十一萬三千圓にして之を十年前に對比せば入金五倍强出金五倍弱となれり、元より之は下關市に出入せる總金額にあらず又悉く商取引によるものにもあらざれども最近年間に於ける出入金高の如何と商取引の狀態も略察知し得べし。

交通狀態

交通方面より觀たるうの發展の趨勢は以下の如し。

大正四年	乘車	四二九、六四〇人	降車	四七三、一〇一人
同　五年	仝	四七九、六三六	仝	五六五、一七五
同　六年	仝	六七六、三五四	仝	六二九、七八八
同　七年	仝	九一四、三四三	仝	八六六、六〇五
同　八年	仝	一、一三八、八二三	仝	一、〇八一、七八七
同　九年	仝	一、一九〇、八八一	仝	一、一五三、五二四
同　十年	仝	一、二〇二、八〇三	仝	一、一八三、八一八
同十一年	仝	一、二六〇、六三三	仝	一、一六八、六四〇
同十二年	仝	一、四三四、九八五	仝	一、三九八、二二三
同十三年	仝	一、五五三、六二五	仝	一、五一一、八五八

右は下關驛、幡生驛、及長州鐵道東下關驛に於ける乘降車人員にして幡生驛は大正十年市の區域内に編入せるものなれば十一年より此計算に加へたるものなり、尙船客の乘船降船人員は左の如し。

大正四年	乘船	一、〇二四、二三五人	降船	一、一〇六、五一一人
五年	仝	一、一五六、六四二	仝	一、二一六、四二七
六年	仝	一、二九六、〇三〇	仝	一、二七六、三八五
七年	仝	一、六六二、九七三	仝	一、七〇〇、七六八
八年	仝	二、二五三、三九八	仝	二、二八九、一七七
九年	仝	二、六四九、八六六	仝	二、五三六、五〇六
十年	仝	二、四四三、四九七	仝	二、五六二、五六八
十一年	仝	二、六五三、二二一	仝	二、七一〇、一四八
十二年	仝	二、九四八、七〇五	仝	三、〇二一、〇七八
十三年	仝	二、七九六、六三一	仝	二、八八八、四九二

右は內外各航路、關釜連絡船、及び關門連絡船に於ける出入人員にして此外陸續の両街道卽ち長府北浦方面及小門海峽を距つて彥嶋町よりの出入は別としても最近年間の出入人員は八百七十五萬一千六百六人、內『出四百三十五萬二百十六人』『入四百四十萬三百五十人』にして十年前の三百三萬三千四百八十七人に比し殆ど三倍に上り如何に下關市が交通上本邦の主要の位置にあるやを察知し得らるべし。

各種組合

産業組合

産業組合法により設立されたる組合としては大正五年六月下關市大字關後地村の有限責任下關貯金支局購買組合を最初として組合員三百四十五名、出資口數三百六十、出資總額三十六圓なり、

同じく有限責任下關信用組合は大正六年十月市内關後地村に組合員百五十八名、出資口數千百五十一、出資總額一萬一千五百五圓なり、

無限責生野信用購買組合は大正六年十月設立し組合員三百三十一、出資口數八百二出資總額四千十圓にして舊生野村幡生にあり。

同業組合並準則組合

同業組合準則組合としては明治二十年六月岬之町に下關四十物組合の創設せられし以來左記各組合の設立あり現在相當成績を收め活動中のものを錄すべし、

同業組合	關門海産物貿易商同業組合	大正七年三月設立	組合員六十二	岬之町
同	下關肥料商同業組合	仝 八年五月設立	同 百六十七	西南部町
準則組合	下關四十物組合	明治廿年六月設立	同 七十四	岬之町

準則組合	下關疊刺業組合	明治廿二年五月設立	組合員二十七	觀音崎町
同	下關物品問屋組合	仝 廿三年一月設立	同 八十五	西南部町
同	下關海運業組合	仝 三十年八月設立	同 二十三	仝
同	下關洗濯業組合	大正五年五月設立	同 三十	阿彌陀寺町
同	下關東部魚商組合	仝 年十月設立	同 七十五	仝
同	下關工匠組合	仝 七年三月設立	同 四百十五	觀音崎町
同	下關洗染業組合	仝 八年八月設立	同 四十四	仝
同	下關家具業組合	仝 九年九月設立	同 三十七	奥小路町
同	下關京染悉皆業組合	仝 十年八月設立	同 十九	東南部町
同	下關履物商組合	仝十二年四月設立	同 七十五	下關商業會議所内

下關米取引所

下關米取引所最近年間に於ける賣買高及受渡高、公定相場、取引所員等は左の如し、

大正十二年中　賣買高一千七萬五千百石、受渡高三萬九千五百石、全年公定相場平均當限三十圓十錢、中限二十四圓三十五錢、先限三十圓八十一錢、

大正十三年中　賣買高七百二十七萬六千三百石、

大正十四年五月　賣買高三十七萬二千四百石

取引所取引員

澁谷儀右衛門　河野德之助　河野久藏　石川悅藏
永島小三郎　林米吉　仁田貞夫　小島茂吉
伊藤和吉　柳千三郎　桝谷米吉　益野幸吉
港文平　久野勘介　有吉幸熊　坂口条次郎
市來友三　枇杷茂太郎　潮先卓郎　有田隆市

五月限　三十九圓〇八錢
六月限　三十九圓五十一錢
七月限　三十九圓八十八錢

會社

下關市に於ける各種會社を資本金別に社數、資本金、拂込濟資本金、最近年間に收得せる純益金等を調査したるに左の如し。

資本金二十萬圓未滿　株式會社十五、資本金總額百四十八萬圓　拂込額百二萬六百六十圓、
積立金二萬六千七百八十圓、　純益金九萬三千六百三圓、
資本金二十萬圓未滿　合資會社二十六、資本金總額六十一萬七百圓、拂込額六十一萬七百圓、
積立金一萬六千八百七圓、　純益金三万四百五十九圓、
資本金二十萬圓未滿　合名會社十六、資本金總額四十九萬八千圓、拂込額四十五萬三千圓、
積立金二萬八千九百五十九圓、　純益金二萬八千八百四十九圓、
資本金五十万圓未滿　株式會社九、資本金總額二百二十八萬圓、拂込額百十五万六千五百圓、
積立金十萬六千六百三十八圓、　純益金十一万三千五百八十七圓、
同　合資會社二、　資本金總額六十萬圓拂込濟、
積立金純益金等十二年迄にはなし、
同　合名會社三、　資本金總額七十万圓、全額拂込
積立金二万五千九百圓、純益金二万五千八百三十四圓、

右の投資種別は商業に、株式會社、十一、合資會社十八、合名會社十四、水産業に株式會社一、合資會社一、運輸業に株式會社三、合資會社七、合名會社三、其他に株式會社九、合資會社二、合名會社二、等なり。

資本金百五十萬圓未滿　株式會社十二、資本金總額八百三十二万五千圓、　拂込額五百十六万六千六百四十五圓、積立金五十万三千三百九十五圓、　純益金五十四万千九百十五圓、

資本金百五十万圓未滿　合名會社一、資本金總額五十万圓、拂込全額

資本金五百万圓未滿　株式會社五、資本金總額九百万圓、拂込額六百八万三千七百五十圓、積立金二十三万三千七百四十六圓、純益金十八万七百五圓、

之が投資別は商業に株式會社三、合名會社一、鑛業に株式會社二、水產業に株式會社三、運輸業に株式會社二、其他に株式會社七、等なり。

資本金五百万圓以上を有する株式會社は三社にして投資種別は商業二社鑛業一社

資本金總額三千六百八十万圓、拂込額二千七百十三萬七千五百圓、積立金二百四十三萬八千六十九圓、純益金二百十二萬六千三十圓、

資本金五百萬圓以上の合名會社一にして資本金總額四千萬圓の全額拂込、積立金一萬二千圓、

要するに株式會社五十五、資本金總計五千七百八十八萬五千圓、拂込額總計四千五十六萬五千五十五圓、積立金總計三百三十萬八千六百二十八圓、

純益金總計三百五萬五千八百四十圓、

合資會社五十六、資本金總計百三十三萬四百五十圓、拂込額總計百二十一萬七百圓、積立金總計一萬六千八百七圓、純益金總計三萬四百五十九圓、

合名會社二十六、資本金總計四千百六十九萬八千圓、拂込額總計四千百六十五萬三千圓、積立金總計六萬六千八百五十九圓、純益金總計五萬四千六百八十三圓、

會社所在地其他

株式會社下關米取引	東南部町	定期米賣買	社長　林平四郎	明治九年十一月創立
株式會社百十銀行	西南部町	銀行業	頭取　植村俊平	仝十一年十一月仝
關門汽船株式會社	東南部町	海運業	社長　久野春之助	仝十九年十月仝
下關倉庫株式會社	西南部町	倉庫業	同　桝谷音三	仝三十七年六月仝

防長度量衡株式會社	岬之町	度量衡器製作販賣	社長	德永四郎	明治四十年七月創立
株式會社關門ビルブローカー	東南部町	金融業	同	秋田寅之介	仝四十四年十二月仝
長州鐵道株式會社	東大坪町	鐵道業	同	林平四郎	仝四十五年三月仝
下關瓦斯株式會社	園田町	瓦斯供給		桝谷音三	大正四年二月仝
日本水產株式會社	岬之町	漁業、漁獲物運搬並販賣	同	山脇宗次	仝五年二月仝
初見炭坑株式會社	觀音崎町	石炭採堀販賣	同	西岡貞太郎	仝五年九月仝
株式會社桝谷商會	同	機械金物商	同	桝谷音三	仝六年一月仝
關門商事株式會社	東南部町	土地建物賣買貸借仲介業	同	秋田寅之介	仝六年三月仝
土佐捕鯨株式會社	竹崎町	捕鯨業	同	中部幾次郎	仝六年十月仝
株式會社馬關每日新聞社	西ノ端町	新聞發行	同	秋田寅之介	仝七年十一月仝
株式會社丸十商會	東南部町	肥料販賣輸入雜穀商	同	平澤喜介	仝七年十月仝
彥島船渠株式會社	同	船渠業	同	秋田寅之介	仝七年十一月仝
株式會社下關物產商會	西南部町	肥料製造並ニ輸入販賣	同	有田隆市	仝八年四月仝
下關牛乳株式會社	長崎町	牛乳販賣業	同	吉岡茂	仝八年四月仝
帝國炭業株式會社	觀音崎町	石炭及其他鑛產物の採堀販賣	同	西岡貞太郎	仝八年五月仝

日本漁網船具株式會社	岬之町	漁網船具製造並ニ船具金物販賣	同	山脇宗次	仝年八月仝
下關乾餾工業株式會社	長崎町	骨炭及肥料販賣	同	藤波重雄	仝年九月仝
株式會社武久園	西南部町	建物土地賣買及貸貸業	同	中島繁雄	仝年九月仝
貝島商業株式會社	唐戸町	石炭販賣業	同	貝島太市	仝年十一月仝
大下關土地株式會社	赤間町	土地建物並信託業	同	久富久吉	仝年四月仝
株式會社海生組	長崎町	漁業及鮮魚運搬	同	中部悅良	仝年五月仝
下關無盡共益株式會社	豐前田町	無盡業	同	兒島喜助	仝年六月仝
下關商事株式會社	觀音崎町	製鹽計器製作	同	松尾由介	仝年七月仝
梅崎鑛業株式會社	阿彌陀寺町	石炭大理石及磁石採堀販賣	同	宮本眞策	仝十年一月仝
株式會社平戸商店	西南部町	毛織絹麻綿物販賣	同	平戸清治	仝年二月仝
株式會社東商店	觀音崎町	新古麻袋及糸類販賣業	同	東善之助	仝年二月仝
株式會社日鮮組	岬ノ町	漁業及漁獲物運搬及販賣	同	山脇宗次	仝年三月仝
日本漁糧株式會社	同	水產物ノ製造販賣海產肥料製造販賣	同	飯山太平	仝年六月仝
日本運輸汽船株式會社	外濱町	運送業	同	道森吉藏	仝年九月仝
三龍汽船株式會社	同	運送業	同	同	仝年十月仝

櫻山土地株式會社	東南部町	土地住宅經營賣買仲介業	同	桝谷晉三	仝　年十二月仝
關門證券株式會社	東南部町	有價證券問屋業	同	古谷自助	仝　年十二月仝
下關青果株式會社	神宮司町	果實青物移入及委託販賣	同	仁田貞夫	仝十一年一月仝
防長牛乳株式會社	長崎町	牛乳搾取販賣	同	吉岡茂	仝　年四月仝
下關印刷株式會社	西南部町	印刷業	同	中野吉藏	仝　年五月仝
下關土地建物株式會社	同	土地建物賣買並ニ仲介業	同	藤井正一	仝　年九月仝
株式會社共同購買會	關後地村	物品販賣並ニ仲介金錢貸付並ニ仲介建築業出版並ニ印刷業	代表員	塚崎茂	仝十三年十一月仝
山陽電氣軌道株式會社	西ノ端町	土地住宅並ニ娯樂機關ノ經營其他ノ關聯スルヲ營ム	同	山根武亮	仝　年七月仝
下關漬物株式會社	關後地村	高等漬物並ニ飲料品精米味噌製造販賣業	同	伊藤巴治	仝　年九月仝
株式會社中島商店	西南部町	商品賣買及委託賣買	同	中島繁造	仝十四年三月仝
大日本酒類釀造株式會社	觀音崎町	酒類醫藥用品調味料澱粉麹製造	同	西岡貞太郎	仝　年三月仝
株式會社東明銀行下關支店	東南部町	銀行業	同	河野巖男	仝十三年八月仝
株式會社德富商店	西南部町	菓子製造販賣菓子原料販賣	同	德富要次郎	仝　年十二月仝

林兼冷藏株式會社	竹崎町	水產冷藏保管及冷藏倉庫貸製氷販賣	社長	中部幾次郎	大正十三年二月創立
株式會社林兼商店	同	油類販賣精米製鹽造船造機	同	同	仝　年九月仝
日章製菓株式會社	關後地村	ビスケット製造販賣運送業	同	松尾由介	仝　年七月仝
株式會社仲和館	仲之町	土地建物賃貸借取得	同	寺田久三郎	仝十二年五月仝
下關酒造株式會社	幡生	酒類釀造及販賣	同	村上安介	仝十二年十二月仝

合資會社

合資會社秋田商會	東南部町	海運業、材木商貿易商	代表員	秋田寅之介	明治四十四年十一月創立
同　山村商會	上田中町	水飴製造販業	同	山村勇吉	大正二年十月仝
同ハヤトモ自動車商會	阿彌陀寺町	貸自働車業	同	後藤澤馬	仝　六年十月仝
同　吉岡商店	長崎町	牧畜、略農、獸鳥肉販賣	同	吉岡茂兵衛	仝　八年一月仝

同	藤代紙店	赤間町	和洋紙販賣	同	藤井代吉
豊田商業運送合資會社		西細江町	物品販賣仲介運送業	同	豊田春太郎
合資會社北市屋回漕店		西南部町	海運業	同	竹内義祐
同	山陽商會	田中町	金物類其他販賣	同	山本德一
同	上繁商會	阿彌陀寺町	海運業	同	上繁龍太郎
同	上野商店	外濱町	食料品販賣	同	野上直吉
同	マカラズ屋商店	觀音崎町	舶來雜貨商	同	白石安
湯淺合資會社		西南部町	物品販賣業	同	井上喜代一
合資會社三吉屋商店		東南部町	紙及製紙原料販賣	同	山田可然
同	中馬商店	西南部町	砂糖及雜穀販賣	同	中馬和平
同	初瀨商會	岬ノ町	漁網及石油商	同	初瀨京八郎
同	和田商會	仲之町	美術、雜貨、輸出	同	和田榮三郎
下關運送合資會社		觀音崎町	海陸運送業	同	久富鶴吉
合資會社佐藤商會		丸山町	漁業	同	佐藤正孝
日章製菓合資會社		長崎町	ビスケット製造	同	德富要次郎

合資會社松村商店		赤間町	履物販賣	同	三井傳治
同	富士美商會	西南部町	藁製品竹材、販賣	同	西村深藏
福田合資會社		田中町	賣屋業	同	福田泰三
合資會社美寶堂裝飾店		岬ノ町	時計貴金屬裝身具製造販賣	同	北野音吉
同	小倉商店	入江町	鮮魚及海產物委託販賣	同	小倉長次郎
同	下關製函所	竹崎町	製函業	同	內田吉藏
同	山田電氣工業所	宮田町	電氣、機械器具、製作販賣	同	小嶋一
同	久保商店	西ノ端町	履物類製造販賣	同	久保久平
城合資會社		唐戸町	金錢貸付及附帶事業	同	川島貞次郎
合資會社下關瞬報社		東南部町	一般印刷製本活字鑄造、並ニ和洋製紙文具類販賣業	同	藤田光之進
同	島田商會	入江町	材木、木炭、委託賣買紙文具卸小賣活版印刷業	同	嶋田一郎
同	日高商會	西細江町	鯨大敷網、漁獲物販賣、並養殖業	同	日高不羈夫
同	東本田久商會	同	各種桶類製造卸小賣並ニ附屬スル材料販賣	同	本田政太郎
同	杉尾自轉車商會	阿彌陀寺町	自轉車及附屬品販賣賃貸及修理	同	杉尾直二

同	帝國電話通信社	入江町	職業別電話名簿作製廣告募集名簿販賣	同	柳井津誠八
同	佐久間商店	仲ノ町	家具製造并ニ販賣	同	佐久間重實
紀元製菓合資會社		關後地村	菓子製造業	同	德富要次郎
合資會社ミチモリ自動車商會		東南部町	自動車ノ貸賃并ニ定期運轉之ニ附隨スル事業	同	道森吉藏
宮本水產合資會社		赤間町	機船手揚網并ニ鮮魚運搬及販賣	同	宮本邦介
合資會社三嶋商會		觀音崎町	花莚及隔草疊表ノ賣買並醬油ノ賣買	同	三嶋喜久雄
下關製樽合資會社		關後地村	新樽製造販賣古樽函類附屬賣買	同	宮本左作
合資會社瓜生商會		西南部町	代理商仲立商物品販賣業	同	內藤七郎
內傳商店合資會社		同	海產物販賣委託賣買	同	小倉喜三郎
山三運輸合資會社		觀音崎町	海陸運送業	同	高橋繁造
合資會社古川商店		奥小路町	酒類卸小賣業	同	古川進吾
同	高住屋本店	大坪	香油ローソク油並化粧品香料製造	同	高田晴藏
同	田尾商店	入江町	船具金物船具類ノ販賣	同	大本賢作
辰野商店合資會社		阿彌陀寺町	砂糖麥粉米穀雜穀石油肥料販賣	同	辰野兼次

全十四年八月全	全十四年六月全	全十三年七月全	全十四年四月全
全 年五月全	全 年三月全	全十三年一月全	全十三年二月全
全十四年五月全	全十四年五月全	全十三年十一月全	全 年一月全
全 年十月全	全十四年二月全	全十三年二月全	全 年三月全
全 年十二月全			

合資會社中島糸店		西南部町	綿糸、製綿販賣	同	中島マサ
同	リヒト商會	關後地村	防腐劑リヒト販賣	同	田上孫作
同	尾崎商店	入江町	白米雜穀薪炭茶販賣	同	尾崎峰一
同	關門製網所	豐浦郡彥島町彥島	ロップ製造販賣	同	田中三三九
同	梶谷商會	觀音崎町	各種菓子並附屬原料賣買菓子製造	同	梶谷尙弼
同	鳥居商店	岬ノ町	鮮魚鹽干魚販賣	同	鳥居幾太郎
同	朝鮮穀物協會	竹崎町	朝鮮穀物委託賣買	同	佐々木津朗
同	服部商店	西南部町	大小麥粉麵ノ仲立業	同	服部文次郎
同	春野商店	東南部町	酒類販賣業船具品賣込業	同	春野忠藏

全十四年六月全	全十四年七月全	全十四年四月全	全十三年三月全
全 年二月全	全十四年九月全	全十四年六月全	全十三年八月全
同 年同月同			

合名會社

下關石油合名會社	西南部町	石油肥料販賣	代表員	前田利兵衛
合名會社中島商店	同	砂糖麥粉販賣	同	中島德治郎
五大海陸運輸合名會社	岬ノ町	海陸運輸業	同	三由仁作

明治四十年十一月同	
同 四十五年一月同	
同 年四月同	

合名會社秋元商會	仲ノ町	石炭販賣業	同	秋元清助	大正元年十二月同
同　西宗商店	岬ノ町	漁業並ニ海陸物產委託問屋	同	西村惣四郎	同　二年一月同
同　關門飲料商會	園田町	清涼飲料水製造	同	澤村要助	同　五年五月同
同　京野商會	觀音崎町	船具金物漆料鑛油商	同	京野敬次	同　年十月同
同　川半吳服店	西細江町	織物　吳服商	同	園山香代	同　八年二月同
宮本運輸合名會社	岬ノ町	海陸運送業	同	宮本啓介	同　年五月同
貝島合名會社	唐戸町	殖產業	同	貝島太市	同　年十月同
合名會社下關罐詰製造所	赤間町	罐詰製造	同	百合本謙一	同　九年四月同
同　下關寫眞印刷所	丸山町	石版印刷業	同	宮本源一	同　年四月同
同　油政商店	岬ノ町	海陸物產委託問屋	同	三由仁作	同　年八月同
下關塩元賣捌合名會社	岬ノ町	鹽元賣捌業	同	網矢セイ	同　十年六月同
合名會社丸一商會	西南部町	砂糖、參粉、雜穀、肥料商	同	伊藤傳一	同　同
同　森悅商店	岬ノ町	雜貨商	同	森悅藏	同　十一年七月同
仝　善榮商店	仝	海陸物產委託賣買	仝	善長定吉	同　十二年一月同
仝　江州屋	宮田町	吳服取次販賣	仝	松宮喜三郎	同　同

仝　石田藥局	關後地村	處方箋調劑醫化學藥品販賣	仝	石田傳吉	同　年二月同
山岡運輸合名會社	岬ノ町	海陸貨物運送業	仝	有光信質	同　年六月同
合名會社住本屋	奥小路町	洗張請負業	仝	住本朝治	同　同
仝　毛利製菓商會	入江町	菓子製造並ニ之ニ附帶スル事業	仝	毛利市兵衛	同十四年六月同
仝　船喜商店	岬ノ町	海產物委託賣買並ニ賣買及運搬業	仝	船木久太郎	同　年二月同
仁田合名會社	東南部町	不動產及有價證券ノ取得並ニ讓渡	仝	仁田貞夫	同　年四月同
下關寫眞臺紙合名會社	關後地村	寫眞臺紙及紙類加工品製造販賣	仝	田中二郎	同　年三月同
合名會社坂本商店	西南部町	乾物海產物罐詰雜穀類賣買業	仝	坂本虎吉	同十三年十月同

銀行

銀婚式當日現在の銀行及頭取、支店長等左の如し、

百十銀行頭取	齋藤謙	西南部町
横濱正金銀行下關支店長	竹內實敏	西南部町
三井銀行下關支店長	木原兼賢	觀音崎町

住友銀行下關支店長	廣瀨助一郎	西南部町
朝鮮銀行下關支店長	坂井團	觀音崎町
十五銀行下關支店長	伊集院勝吉	仝
第一銀行下關支店長	永井敬	仝
東明銀行下關支店長	中野虎男	東南部町
不動貯蓄銀行下關支店長	佐藤旭	仝

郵便局

下關市內に於ける最近年間の貯金及其他の取扱高を調査したるものを掲げむに、

貯金現在高

下關郵便局	人員一萬八千八百六十人	九十一萬八千三百四十二圓
下關東郵便局	人員一萬九千五百八十二人	百萬七千五百九十二圓
下關今浦郵便局	人員八千百二十三人	三十四萬九千七百七十七圓
下關入江郵便局	人員四千七百九十八人	二十三萬一千九百十八圓
下關觀音崎郵便局	人員三千二百四十四人	十二萬六千四百五十四圓
下關外濱郵便局	人員五千三十五人	二十九萬四千六百七十三圓
下關田中郵便局	人員九千百六十九人	四十七萬八千六百三十三圓
下關奥小路郵便局	人員一千六百十九人	五萬七千九百八十六圓
計	七萬四百三十人	三百四十六萬五千三百七十五圓

取扱高

郵便爲替	振出高 五百十九萬百九十六圓	拂渡金額 二百八十三萬二千六百六十六圓		
郵便貯金	預入高 三百十二萬四千八百六十三圓	拂戻高 三百十七萬一千百七十一圓		
郵便振替貯金	拂込高 三百九十一萬二千六百七十八圓	拂戻高 百万百十七圓		
電報發着	中繼 三百六十八萬七千五百九通			
	內國發信 八十二萬八千八十通	內國着信 七十七萬三千三百七十五通		
	外國發信 五千四百一通	外國着信 五千二百九十四通		
	合計 五百二十九萬九千六百五十九通			
郵便物	普通引受 千四百四十四万千百四十七通	特種引受 三十萬一千二百九十二通		

廣告郵便　十七萬九千二百十通　集金郵便　一萬九千四百九十三通
普通配達　千百五十萬七千百三十七通　特種配達　三十三萬六千七百八十二通
小包引受　十一万六千二百四十八個　小包配達　十四萬五千二百七拾四個

電話加入者職業別

官公衙學校	七一個	銀行	四〇個	會社	一四六個
商店員	七個	會社銀行員	六〇個	總代並ニ組合事務所	二一個
病院	一九個	醫師	一九個	辯護士	一五個
藥種商藥劑師	二七個	米取引所仲買人	四三個	神社及寺院	四個
海運並運送業	四四個	株式現物店	二三個	按摩產婆看護婦	一三個
糖粉雜穀商並貿易商	七二個	米穀商	一九個	肥料商	二六個
酒醬油醸造業賣店	六九個	食料品商	一六個	乾物荒物商	三一個
水產業	一五個	諸油商	一二個	人力車駐車場	二五個
料理業	九九個	貸座敷置屋業	八四個	各種請負業	二八個
官吏	一七個	代書業	三個	各種工場	一〇個
鑛業石炭商	一五個	各種物品問屋	八一個	製氷販賣業	五個
旅館	九九個	各種周旋業	六個		

染物並洗濯業	三個	時計並金屬商	二三個	金物商	二一個
雜貨並小間物商	四一個	洋服業	一三個	質屋業	一二個
呉服商	四五個	綿糸商	八個	書籍並文房具商	八四個
活版商	一七個	陶磁器並煉瓦商	八個	自轉車商	一二個
薪炭商	二三個	寫眞師	五個	履物商	一二個
其他雜業	七八個	其他	四二一個	合計	二二六四個

關門商況

大正拾四年五月拾三日銀婚式御祝典當時の關門商況を知友、下關印刷株式會社長中野吉藏氏の經營に係る關門商況機密通信に求めて編したり。

肥料雜穀界

市場小話

△流石最盛需要期で地方筋の買氣弗々擡頭して來た山口縣筋の農家の手當は八九分通りは濟んで居る樣だが九州路は概して手當が薄い樣である　△豆粕は產地とは依然逆鞘を持續してゐるので輸入

筋は透さず買狙ひ昨夕場鍋島が五六月を一萬買ひ本朝は更に買進んだが賣手が萎縮したので場面は躍進氣味　△豊年粕の大連工場は採算不引合のため當分操業休止の報を傳へて萬歳粕は俄かに活氣付いた　△印度粕は賣手も買手も懸引で出合はなかつたが本日神戸筋と當市場某商店とに近入りが百噸沖七拾七圓五拾錢で出來た模樣

▲豆粕關門市場躍進　爲替は百廿六圓五拾錢と小安報を入れたるも銀建粕の高報に弛まず市場は躍進氣味

▲市場手合せ

五月	五千枚	沖二、四三五	賣某	買鍋島
六月	五千枚	〃二、四四〇	〃井上	〃

▲跡氣配賣聲盛買聲乏し　五月物出來跡は總買手にて一部輸入筋は四拾四錢迄買聲を揚げたるも賣手は更に自重して二圓四拾五錢見當を唱ふ　▲六月物跡沖二圓四拾五錢迄買進みたるも賣手は賣聲を潜め買手は更に買進む所にて安値は買狙ひつゝある商狀

▲現物盛んに買慕はる　目先入船物の滯貨懸念もなく又地方筋より弗々買覘かれつゝあるに市場は買聲盛んに乘二圓五拾錢より二圓五拾一錢迄買進みたるも賣手は逆鞘を楯に二圓五拾三錢と高唱へ出合はず

大豆粕　現物乘　二圓五拾二三錢見當　仝青線　仝二圓四拾錢見當

仝五月仝沖　〔二圓四拾五錢（賣手）〕〔二圓四拾四錢（買手）〕　仝六月仝　〔聲なし（賣手）〕〔二圓四拾五錢（買手）〕

▲豆粕大豆大連埠頭在荷　豆粕漸減出廻り依然不振と輸出の擡頭に二百八拾四萬七千枚と前週に比し二拾五萬五千枚の減少を示してゐる

▲大豆激減出廻りは依然薄く六萬三千九百六十噸と前週に比する時は一萬二千四百噸の激減を示してゐる

▲豆粕產地の仕手動靜　奥地よりの出廻り薄く大連の油房筋も採算不引合に操業短縮の萌しありて華商側並に南清方面は相當買進み邦商は賣向ひつゝあり

▲豆粕神戸市漸騰　（午前電話）產地の依然聢りに買進まれ五月物五圓三十錢六月物五圓三十五錢出來跡其邊總買手賣手は二錢方高唱へ

大豆粕	五月	五圓三十錢	買手二錢安
仝	六月	五圓三十三錢	仝

▲豆粕保合　▲大豆保合　（大連入電　前場止）

銀建	豆粕	大豆	豆油	
現物	一、八四五	六、一五	一七、七〇	

五　月　一、八五〇　六、一二　一七、八五
六　月　一、八六〇　六、〇八　一七、九〇
七　月　一、八七〇
八　月　一、八七〇　六、一〇

▲大連爲替下押　現物　百二十六圓六十錢　先物　百二十六圓五十錢

▲硫安關門市場不變　▲クロード會社側は賣物不自由に賣値發表は自重市場小口出來は七圓十五錢　▲大陸現物乘百七十圓より七十一圓見當　▲日窒賣手は七圓廿五錢唱へ纏り口の買覗あらば七圓廿錢出來るところ　▲八幡五月物八幡乘百七十七圓六月物百七十九圓賣唱へ市場買手は一圓下唱へ現物關門小口乘六圓九十錢と不變

▲印度粕五月中入船船先　十三日佐渡丸三百四十噸十四日イタリヤ丸九百噸十九日カッサン丸五百五十噸二十日タカタ丸六百噸二十七日ハンフルグ丸五百噸二十八日山形丸積四百噸合計二千八百九十噸

▲印度粕市場不變　產地入電は變らざるも市場は買聲乏しくさりとて賣手は近入物依然七十八圓五十錢を賣唱へ▲小口現物乘りは五圓五錢より十錢處にて乍小口弗々出來

▲棉味粕一向不變　▲上海粉末　近入六圓五十五錢氣配　▲漢口粉末　五月入船六圓三十五錢氣

配　▲天津日華　六圓廿五錢氣配にて不變　▲朝鮮製油　六圓十錢賣唱へにて不變　▲寫波板粕六圓卅錢見當

▲萬歲豆粕高唱へ　豆粕の强調に不拘撒粕は上足稍々たりしが昨今地方買覗き弗々あり會社側は近く四圓發表を氣構へつゝあり

▲印度生骨粉近入　十四日入船タイリヤ丸二百五十噸の入船あり唱値は三圓九十五錢なるも三圓九十錢は出來るところ

▲雜肥市場乘り唱値　生骨粉　三圓九十五錢　蠟粕三圓九十五錢　蒸製骨粉　四圓十錢　鰊〆粕　八圓五十錢　過燐酸　一圓五十錢　鰛粕　六圓四十錢　黑五號　三圓　仝頭粕　四圓七十錢　落花生　板五圓六十錢　雜魚粕　四圓六十錢　仝粉末　五圓八十五錢　蹄角粉　六圓二十錢　硫酸加里五圓四十錢　藁付種子板　四圓三十錢　石灰窒素　三圓四十錢　仝粉末　四圓七十五錢　萬歲撒粕四圓五錢　日華純正　七圓二十五錢

▲蹄角粉近物船先　十四日入船タイリヤ丸五十噸の入港あり唱値は乘六圓十錢と不變

▲鮮大豆市場不弛　產地は依然品薄を楯に不弛市場必需買覗き乍ら小口▲元山倉廿二圓七十錢▲金効廿二圓六十五錢にて三百叺出來　元山大豆　二二、八〇　義州白目　二一、九〇　連鐵大豆二二、七〇　金汙大豆　二二、六〇　南川三等　二二、五〇　滿洲白眉　九、〇〇　安洲大豆　二

二、〇〇　滿洲一等　八、七〇　宣川大豆　二一、七〇　安東白目　一八、六五

▲色豆類品薄を楯に高唱　▲中長鶏　躍騰後の市場は賣物薄に弛めず十三圓三十錢にて二百俵出來　▲赤五等十四圓三十錢　▲大納豆十五圓十錢　▲大福十九圓六十五錢唱へ

▲臺灣米產地並內地品薄の主因　產地並內地各市場共極度の品薄を傳へて連續的に昇騰せる灣米は昨年二期米が平年作の處に內地米高の爲め本年四月迄の輸入は百五萬六十七石と云ふ一昨年に對し五割八分と云ふ出越の數字を示し一方內地米は消費節約に灣米の消化力多大による

▲外米は依然高唱へ　入荷品は停滯せず荷捌きあり一面炭坑筋の買覘きも相當ありて手堅く▲西貢(現物)乘九圓九十五錢より十圓にて市場小口手合せ

▲外米先物昇騰　產地は賣物薄と關稅復活を氣構へ高唱西貢　四五月積　沖　九圓九十錢(見當)蘭貢　四五月積　沖　十圓八十錢(見當)　四五月積　沖　九圓九十錢(見當)

▲外米關門輸入船先　十三日佐渡丸二百袋十四日タイリヤ丸二千袋十四日里帝丸四百袋十四日クンダ丸三百廿袋二十日廣速丸四百袋

▲下關期米

前場止	寄付	三八、八五	三八、八三	三九、四五	三九、四〇	三九、七〇	三九、七五
後場止	寄付	三八、八九	三八、八六	三九、三五	三九、四〇	三九、八一	三九、八五

高値　三八、九五　三九、四〇　三九、八六
安値　三八、八二　三九、三五　三九、七〇

砂糖、麥粉
肥料、雜穀　關門商況通信

社告

一、商機を逸して成功なし　一、商機を知るは通信にあり
一、通信は我社の使命なり　一、僅かな料金で損失を未然に防ぎ更に進んで大利を得られよ

購讀者便益

▲取引先の紹介
▲市場其他割安手持筋の紹介
▲取引紛擾に關する問合せ
▲市場商店營業狀態問合せ
▲其他特に機密に屬する事項

以上無料を以て御內報可申候

早い話が

此通信が參考になり
▲砂糖を五錢安く買ひ得たら僅か一車で八圓の得が行く
▲麥粉を一錢安く買ひ得たら僅か一車で四圓五十錢の儲けになる
▲豆粕を一錢安く買ひ得たら僅か一車で三圓七十錢の利益がある

下關市東南部町海岸通
下關印刷株式會社
關門商況機密通信部
電話四八三番　一九四三番
振替下關　五九三一番

砂糖麥粉界

▲麥粉市場仕手動靜

強氣節　▲平野　買家の旗頭四圓四五十錢處から五圓五十錢迄連續買ひ五圓六十錢所から落目なので平均買下りに一貫してゐる同店としては舞臺が廣いだけ各地に這入してゐる玉も可成りあるだらう要するに強氣一本に籠城して煎を稼がんとする？

▲鈴木　市場には相當賣てゐる四五月の玉の渡方隊長であるが其懐ろ具合は受取勘定になる強氣筋と云ふ見解が妥當だらう何れにしても旗色を鮮明にしない處に當局の策戰かあるだらう▲服部本店は弱氣得意とする店であるが當市場は小麥も粉も強方針で買進んだだけ手持があるが會社を背景として居るだけ相當籠拔けも出來てゐるだらう▲平虎四限の玉を多數受取つて市場の強氣筋と見られてゐるが案外其裏面には何者か潛在してゐるだらう何れにしても棚あげ玉の處分迄は弱氣に急變も出來まい▲前竹萬年強氣で買進んだが粉界には新參だけ急落後の市況には形勢觀望の態▲舟木鈴木系に屬して居るだけ賣り買ひの手の振方は別として腹は強く進んでゐる

▲下關製粉市況强保合　海外期麥は反撥したが當地としては引續き奉祝氣分の裡に商内閑散先物に對する聲乏しきも地方筋の當用買に現物の賣行は相當活潑になつた模樣であるが相場は五六月限賣

手四圓六十二錢買手四圓六十錢現物四圓五十八錢所强含保合の商狀なり

綠ダイヤ	五六月限	賣手四圓六十二錢 買手四圓五十八錢	日清雪印　現物　四圓五十八錢賣見當
綠ダイヤ	現物	四圓五十八錢賣見當	

▲當製粉市場日本一安　當市場の製粉相場は目下各地市場相場に比較し最も割安になつてゐるが斯の如く市況の低落したのは主として買屋が資金其他金融關係上腰を折つたことに端を發し一面今月末相殺懸念からと見られ月を越さざれば灰汁拔けしないだらうと云はれてゐる

▲大阪製粉市場猛騰す　（大阪午前電話）大阪における製粉市場は昨夕場より旗入れ續出し海外安に拘らず五月限り五圓買手と猛騰を演じ本日更に五圓五錢氣配と續騰步調なり

▲東京名古屋市場保合　（名古屋午前入電）東京名古屋市場は外麥反撥報を入れたるも前場は氣配變らず保合の商狀にて商内閑散なり

△名古屋市場現物　四圓六十五錢氣配　△東京市場現物　四圓七十八錢氣配

▲下關穀市況依然不動　當地穀市場は地方買氣一巡の姿ながら引續き現荷の壓迫がないので市況弛まず保合

青日本穀　六月限　賣手四圓九十五錢　買手四圓九十二錢

青日本穀　現物賣手　五圓十錢氣配　上海穀　現物賣手　五圓十錢氣配

▲内地小麥當市場聲乏　内地小麥市場は引續き賣買共に聲乏しく手合せの見るべきものなきも相場左記見當

内地小麥　八月限　賣手　八圓八十錢　買手　八圓七十錢

▲下關砂糖市況猛反撥　外糖高と大阪市場の續騰歩調に氣配益々引締り分蜜當限りは十四圓八十錢問題と十五錢乃至二十錢方反騰を演じ八月限十四圓十五錢見當現物は十八圓八十五錢處保合精糖は二十三圓九十五錢買手廿四圓五錢は賣物出るところ

▲本日下關市場唱へ値　當市場本日唱へ値左記の通り

ゼイ　現物賣　二十四圓　〇〇〇・仝　廿三圓八十錢　YP　仝　廿三圓七十錢　TBB　十九圓九十五錢　七マーク　納税現物　十八圓九十錢　仝　保税　五月限　賣十三圓八十五錢

買十三圓七十五錢　仝　仝　六月限　賣十三圓九十五錢　買十三圓八十五錢　仝　仝　七月限賣十四圓五錢　買十三圓九十五錢　仝　仝　八月限　賣十四圓二十錢　買十四圓十五錢

▲大阪砂糖市場續强調　（大阪午前電話）玖馬實糖の引締りと定期の續騰歩調に市場氣配强調前場は商内閑散乍ら相場は別項の如く奔騰した

MSIII　（税濟）　十八圓六十錢　ST　現物買　廿三圓八十錢　A双　仝　廿四圓三十錢

分蜜　五月限　買　十三圓七十錢　仝　六月限　仝　十三圓八十五錢　仝　七月限　仝

十四圓　仝　八月限　仝　十四圓十五錢

▲精糖對支輸出行詰る　對支精糖輸出は上海財界の不振と奥地實需の激減とに依りすこぶる不振で支那糖商の安唱へから流石にこれまで安値賣を敢行した明治精糖も採算上賣應じ得ない狀態となつたので新規商談は殆ど杜絶の有樣にある卽ち支那糖商は奥地への荷捌け不良から上海市場の滯貨が一向に減退せず目下なほ約五十八萬俵の多數を算してをるので金融の逼迫や世界的の產糖激增に依る糖價の行先き不安から一層警戒を助長せしめ居りて多數の糖商は値段の如何に拘らず新規買付を見合せてゐる

爲替　英米　四弗八五仙八分一　八分一高　日米　四十二弗　保合　瓜日　一〇五盾　本日未着

銀塊　倫敦　三十一片四分一　八分一安　先物　三十一片四分一　八分一安

市俄古定期　五月　一弗六二仙二分一　三仙二分一高　七月　一弗五六仙二分一　二仙二分一高　九月　一弗四三仙　二仙四分三高

加奈陀定期　五月　一弗七四仙四分三　四仙八分三高　七月　一弗六九仙八分七　三仙四分三高　十月　一弗四〇仙四分一　三仙八分一高

リバープール定期　五月　百四十四片　一片二分一安　七月　百四十四片　二片二分一安

十月　百三十五片二分一　二片四分一安

瓜哇白双　五月　十盾八分七　八分一安　六月　十盾八分五　八分一安　七月　十盾二分一
保合　八月　十盾二分一　保合　九十月　十盾二分一　保合
玖馬實糖　紐育(CF)五月積　二弗八分五　市況好轉
紐育定期　七月積　二弗八〇仙　八仙高　九月積　二弗九一仙　五仙高　十二月積　二ドル九
二仙　七仙高
倫敦定期　五月　十六志二分一　四分一高　八月　十六志四分三　保合　十月　十六志四分三
八分一高

……………………

下關諸物價

◆米穀
防長上米　四五三〇
同中米　四四三〇
大津上米　四五八〇
筑前上米　四三五〇
同中米　四二五〇
豊前上米　四四三〇
同中米　四三三〇
丸宇上米　四三八〇
同中米　四二三〇

丸西中米　四二三〇
肥前中米　四二五〇
肥後上米　四三八〇
同神力米　四二九〇
朝鮮穀良　四二五〇
同神力米　四二〇〇
同一等白　四六五〇
臺南玄米　一二三〇
同丸糯米　一六八〇

中國糯米　四六〇〇
豊前糯米　四六二〇
丸宇糯米　四五八〇
◆雜穀
地廻麥安　一九八〇
中國麥安　一九五〇
豊前麥安　一九〇〇
肥後麥安　一九二〇
備中麥安　一九七〇
讃岐白麥　二二三〇

肥前糯米　四五五〇
肥後糯米　四五五〇
中國小麥　九七〇
豊前小麥　九九〇
肥後小麥　九九〇
丸宇小麥　九九〇
丸西小麥　九九〇
五島小麥　九二〇

朝鮮小麥　八九〇
中國大麥　一三八〇
五島大麥　一三三〇
朝鮮大麥　一三七〇
本山大豆　二四五〇
肥後大豆　二四七〇
五島大豆　二三五〇
壹州大豆　二三七〇
金効大豆　二五九〇
汗浦大豆　二五九〇

釜山大豆　二四八〇
仁川大豆　二五六〇
長端大豆　二五九〇
永洞大豆　二五七〇
元山大豆　二六一〇
連鐵大豆　二五八〇
雄基大豆　二三三〇
薄青大豆　二六五〇
中國小豆　二六五〇
北海小豆　一三三〇

滿州小豆　二〇五〇
朝鮮小豆　二六五〇
同牛小豆　二六〇〇
同花小豆　二六三〇
同花交り　二五三〇
北海黒豆　二三〇〇
同大福豆　二〇〇〇
同丸鶉豆　一五六〇
同中長鶉　一五〇〇
同青豌豆　一三〇〇
中國空豆　一七〇〇

備中空豆　一七〇〇
支那空豆　八五〇
中國菜種　二四五〇
豊前菜種　二五〇〇
壹州菜種　二五二〇
大白胡麻　二一〇〇
連
朝鮮同　二一〇〇
同芥子實　二七〇〇
培子貴　二四〇〇

◆肥料
羽鰊　八一〇〇
鰊粕上々　九〇〇〇
同上　八八〇〇
同中上　八六〇〇
同中　八五〇〇
鰹身粕　六八〇〇
鰹牛身粕　六六〇〇
かれい粕　七四〇〇
雑粕上　六二〇〇
朝鮮鰹粕　六三〇〇
ハタ〱　六〇〇〇
近海鰯粕　八〇〇〇
朝鮮鰹粕　七八〇〇
同太刀粕　七三〇〇

大連豆粕　三一〇〇
九州干賀　六五〇〇
朝鮮干賀　六五〇〇
同海老皮　四五〇〇
雑魚粉末　五六〇〇
蒸製骨十〱　四八〇〇
窒素硫安　七四〇〇
大陸硫安　七二〇〇
五號配合　三五〇〇
過燐酸　一六五
綿實粉末　六六〇〇
天津蹄角　六九〇〇
印度油粕　六六〇〇
朝鮮糠　二〇〇

◆海産物
鰊身欠　一六〇〇
改良數子　三五〇〇
同並品　三〇〇
鱈中　二〇〇

樺太鱈改良　一九五〇
利尻鱈改良　一八八〇
朝鮮開鱈　一五〇〇
鯨尾羽毛　五〇〇〇
同片皮　一七五〇

長門一摩鰯　八〇〇〇
同二番鰯　四二〇〇
對州二番鰯　三八〇〇
北海鰯　三二〇〇

◆鰹節
土佐節大　一七〇〇〇
同中　一五〇〇〇
同小　一三〇〇〇
同亀節　一二〇〇〇

薩摩節大　一五〇〇〇
同中　一四〇〇〇
同　一三〇〇〇
同亀節　一一五〇〇

◆生蠟
豊前古實　四三〇〇
同直り　四〇〇〇
同新實　三八〇〇
地廻古實　四二〇〇
同直り　三九〇〇
同新實　三七〇〇
筑前古實　四二〇〇

同直り　三九〇〇
同新實　三七〇〇
豊後古實　四二〇〇
同直り　三九〇〇
同新實　二七〇〇
晒蠟　四五〇〇

◆砂糖　西南部町湯淺合資會社
精糖
菱J四温　二四四〇
COO四温　二四一〇
YP四温　二四一〇
A五温　二四五〇
分蜜
TAB　二〇六〇
TOB　二〇一〇

TEA　二〇一〇
菱MSIII　二〇二〇
MSA　二〇二〇
三温
OBB　二一五〇
赤双糖
TBD　一六四〇
NSM　一五四〇
菱赤S　一六四〇

◆麥粉
赤ダイヤ　五一五
緑ダイヤ　四八〇
紫ダイヤ　五一五
サンダー　五八五
ピーナス　五八五
雪　四七〇

青鳥　四六〇
寶巻　五三〇
青渦笠　五八〇
曲馬　五八五
青日本數　五一五
同白布　二九〇

◆油類
石油上松　八二〇
虎印　七二〇
白蝙蝠　六五〇
二發輕油　四二〇
ロマシン油　五八〇
青全勝　五〇〇
赤全勝　四九〇
殺虫油　四〇〇
魚油〇上　三五〇

全〇一印　三二〇
全〇〇印　三一〇
正鯨油　五五〇
正稗子油　八九〇
白紋油　九六〇
桐油　一三〇〇
胡麻油　一三五〇
エコ油　一二六〇

◆乾物類　東南部町中尾甚七
凍蒟蒻千切　七二〇
寒天上　三七〇〇
同次　三六〇〇
新高野豆腐　一八八〇
東京干瓢新　二七〇〇
晒葛十〱　四八〇

阿波割薬新　五五〇
晒上片栗　一四二〇
晒餡大　一九五〇
花白玉粉　七二〇
山中白玉　六八〇
朝日饂飩　五一〇
推茸新　二一五〇〇
海苔上　三五〇〇

同　次	三〇〇〇

◆酒類問屋　下關市壇亀本店

清酒（四斗詰）

灘最上	六二〇〇
九州仝	五〇〇〇
廣島仝	四五〇〇
地物仝	四〇〇〇
地物並	三六〇〇
桶中味石	七五〇〇
物	

醬油　三斗七升

一等品	二二〇
二等品	一七〇
三等品	一五〇
四等品	一四〇
五等品	一三〇
六等品	一二〇

◆和洋紙　岬之町　松尾紙店

上質半紙	二三〇〇
白半	二一〇〇
スぴ	一九〇
壽更	五二〇〇
楮紙一貫	七五〇〇
舶來模造	二四〇
三菱模造	二一五
改良柳製	七〇〇〇
同　中	五六〇〇
同　下	四六〇〇
洋半紙　上	三八〇〇
仝　中	三〇〇〇
仝　下	一七〇〇
スミレ	一二五〇

◆丸釘　東南部町　有光商會丸釘部

十七番七分 五厘	一三七〇
十六番一吋	一三三〇
十五番二一五	一二六〇
十四番一半	一一二〇
十三番一七五	一〇六〇
二番二吋	一〇四〇
二番二吋半	一〇三〇
十番三吋	一〇二〇
九番三吋半	一〇二〇
八番四吋	一〇〇〇
八番四吋半	九九〇
七番五吋	九九〇
六番六吋	九九〇
五番七吋	二一〇〇

◆疊表　竹崎町　永吉信吉商店

備後産	上	三〇〇〇
	中	二五〇〇
	下	二〇〇〇
四配		
仝三配	上	一八〇〇
	中	一五〇〇
	下	一三〇〇
仝引通	上	一八〇〇
	中	一六〇〇
	下	一三〇〇
小髪仝	上	一五〇〇
	中	一二〇〇
下		九二〇〇
豊後七嶋産	上	一二一〇
	中	九〇〇
	下	七五〇
石見産	上	九五〇
	中	七五〇
呉座	下	六五〇

▲現株中値（拾錢單位）　東南部町　柳千商店

◎紡績株

鐘紡新	一二五	一三六二
日本紡	五〇〇	一三〇九
東洋紡	五〇〇	一六九〇
仝新	一二五	七八〇
合同紡	五〇〇	一三〇〇
仝新	一二〇	九三〇
毛斯綸	五〇〇	四九〇
富士紡	五〇〇	七七四
仝新	一二五	四四〇
日本毛	五〇〇	一四二〇
仝新	一二五	五三五

◎取引所株

下關米	五〇〇	一九〇〇
東新	一二五	一〇三三
大株	五〇〇	九三八
仝新	二五四	八二三

◎船舶株

關門汽	五〇〇	七五〇
同新	二五〇	三七〇
大阪商	五〇〇	四四八
同新	一二五	一三七
川崎造	五〇〇	五一〇
同新	一二五	一四三
日本郵	五〇〇	六九六
同新	一二五	二四二

◎諸株式

日本油	五〇〇	一〇〇四
同新	二五〇	四六七
久原鑛	五〇〇	七〇二
同新	一二五	一八七
淺野セ	五〇〇	九七五
同新	二〇〇	四四三
小野セ	五〇〇	六九八

◎銀行株

神戸取	五〇〇	九七〇
仝新	二五〇	五八五
堂島米	五〇〇	一〇五
仝新	二五〇	六六三
上海取	五〇〇	一八八
十五銀	五〇〇	一〇五五
同新	二五〇	二五三
朝鮮銀	五〇〇	四三五
安田銀	五〇〇	七四二
同新	三七五	五五五
同一新	一二五	二〇九
加三銀	五〇〇	五四一
白島銀	五〇〇	五六六
同十新	一二五	一六六

▲諸株式（拾錢單位）　王司町　林勳商店

◎取引所株之部

下關米	五〇〇	二三〇
東京新	五〇〇	一〇三三
大阪株	五〇〇	九三八
仝新	二五〇	八三二
上海株	五〇〇	一九〇

◎船運株之部

關門汽	五〇〇	八三〇
仝新	二五〇	四一五

◎諸株之部

大阪瓦	五〇〇	七二五
京都瓦	五〇〇	七一〇
東京瓦	五〇〇	六六〇
神戸瓦	五〇〇	七一五
廣島瓦	五〇〇	五一五
下關倉	五〇〇	九〇〇
同新	二五〇	三三五
日東氷	五〇〇	七九八
小セ新	二五〇	三六一
日麥新	二五〇	一三八
帝國麥	五〇〇	六四二
日東氷	五〇〇	七九八
同新	一二五	二六七
大同電	九〇〇	四八五
日本電	九〇〇	四九一
九軌	五〇〇	七九二
九水	五〇〇	七二〇
東邦	五〇〇	六五〇
富士紙	五〇〇	八五〇
王子紙	五〇〇	九八五
日本粉	五〇〇	五三五
日清粉	五〇〇	一〇八五
星製藥	二二五	六八
東洋鯨	五〇〇	四九三
同新	一二五	一二五

大阪商	五〇〇	四四八
仝新	一二五	一三六
日本郵	五〇〇	七九六
仝新	一二五	二四三
北海炭	五〇〇	四六〇
川崎造	五〇〇	五一〇
仝新	一二五	一四三
東洋汽	五〇〇	九五
仝新	二五〇	二〇
大阪鐵	五〇〇	四〇五
仝新	二七五	二八五

◎電氣瓦斯之部

東京電	五〇〇	七一〇
京都電	五〇〇	九八五
廣嶋電	五〇〇	五六五
九州軌	五〇〇	七五三
同新	一二五	二四八
鬼怒川	五〇〇	五四四
宇治川	五〇〇	六一二
東邦電	五〇〇	六九六
同新	二五〇	三五三
東洋捕	五〇〇	四九〇
同新	一二五	一三〇
アルカ	五〇〇	四六〇
東洋拓	五〇〇	四三五
泉尾土	二〇〇	三八五
大阪土	五〇〇	二六〇
帝國麥	五〇〇	六四二
日本麥	五〇〇	一九五〇
同新	二五〇	一三七五
日本石	五〇〇	一〇一五
同新	一二五	四七〇
久原鑛	五〇〇	七〇三
同新	一二〇	一八八
小野田		
セメン	五〇〇	七〇九
同新	一五〇	三六〇
東洋鐵	四二五	一六〇
富士紙	五〇〇	八五〇
王子紙	五〇〇	九八七
日製粉	五〇〇	五四〇
日清粉	五〇〇	一〇七〇
九州水	五〇〇	七二〇
同新	一二五	二三〇
下關瓦	四六〇	二五〇

▲公債株式（拾錢單位）　西ノ端町　枇杷商店

◎公債之部

特五分	百圓	九二〇
甲五分	百圓	八七八
雜五分	百圓	八四一
二回四分	百圓	七三九
一回四分	百圓	七三一
五い	百圓	九四一
分な	百圓	九六一
利せ	百圓	九五九
國た	百圓	九八〇
債そ	百圓	九八五

◎銀行株之部

日本銀	二百圓	一六五四
正金銀	百円	一八三五
淺洋灰	五〇〇	九九〇
同新	二五〇	四六〇
日魯漁	五〇〇	四〇〇
星製藥	一二五	六七
毛斯紡	五〇〇	五四八
毛斯紡	二五〇	二九二

◎電氣鐵道之部

南滿鐵	百圓	一三二〇
同新	三〇〇	三五七
南海鐵	五〇〇	八六一
小倉鐵	五〇〇	二三三
阪神電	五〇〇	九五三
京阪電	五〇〇	七〇一
阪神急	五〇〇	九二三
九州水	五〇〇	七二一
同新	二二五	二一三
九州軌	五〇〇	七五三
同新	一二五	二四七
勸業銀	五〇〇	六六七
興業銀	五〇〇	四八〇
臺灣銀	百円	五七一
朝殖銀	五〇〇	五二三
朝鮮銀	五〇〇	四二五
第一銀	五〇〇	一〇五五
十五銀	百圓	一〇五〇
信託銀	五〇〇	二六〇
百十銀	五〇〇	五七〇
住友銀	百圓	一三五五

◎紡績株之部

東洋紡	五〇〇	一六八四
鐘淵紡	五〇〇	二六六五
同新	一二五	一五六二
富士紡	五〇〇	七七二
合同紡	五〇〇	一三九六
福島紡	二五〇	一〇一九
日本紡	五〇〇	一三〇七
日清紡	五〇〇	九九五
博多軌	五〇〇	四〇〇
長州鐵	五〇〇	六八〇

◎保險之部

日本火	二〇〇	五五〇
東京火	一三〇	二八八
共同火	一三五	一九五
神戸火	二三〇	二五三

◎製糖之部

日本製	五〇〇	一〇九九
同新	三七〇	八六三
東洋製	五〇〇	六七二
同新	二〇〇	二七三
臺灣製	五〇〇	八四〇
同新	一二五	二八五
鹽水新	五〇〇	七〇七
同新	二五〇	三六八
明糖	五〇〇	九三三
同新	二〇〇	四一九

倉庫出入貨物

最近一ヶ年間に於ける倉庫入出庫貨物の主要なるものにつき調査したる入庫個數三百五十五萬一

千八百八個、見積價額四千百七十五萬三千五百一圓、出庫個數、三百七十六萬九千百八十一個見積價額四千七百七十九萬八千五百六圓にして、粗糖の入庫五十六萬四千五百三個、見積價額一千二百三十六萬九千九百九十六圓を最大とし精糖、內國米、雜品、小麥、朝鮮米、印度綿、豆類、米綿、麥粉、藥種染料、塗料等の順位にして出庫個數は同じく粗糖の五十八万五千三百四十三個見積價額一千二百六十九萬七千八百八圓を最大とし精糖、小麥、雜品、內國米、朝鮮米、海產肥料、麥粉、米綿、豆類等の順位を示し其他の品名を列擧せば左の如し

臺灣米、外國米、大麥、雜麥、雜穀、雜粉、麻及同製品、和洋紙、人造肥料、雜金屬、鐵材、金物製品、機械、織物、綿糸、乾物、酒類、海產物、食料品、支那綿、雜綿、抄紙原料、木材、油及蠟類等

水　產

水產業者及生產額其他

業主本業二百六十四、副業十九、計二百八十三、被傭者本業三千四百三十三人

生產額內漁獲物高一千百十二万三千五百八十八圓、水產製造物高二百十三萬六千五百八十六圓、

合計一千三百二十六萬百七十四圓に達す

漁船には和船二百八十、發動機船三十三、汽船六十六を有し何れも漁業又は運搬に從事す。

漁獲物の種類の主なるものは、眞鰒、鯖、鯛、鮃、鰈、海あなご、河豚、あなご、狗母魚、ばりあぶらめ、すゝき、きすご、ひこで、さより、ぼら、蝶、鮑、螺、烏賊、タコ、蟹、海鼠、和布等なり

近海漁業……漁獲高、二十七万四千九十圓

遠洋漁業……同　八百十三萬六千五百七十一圓（トロール漁業）

同　……同　二百七十一萬二千九百二十七圓（發動機船、汽船の出漁による）

下關港取扱水產物

最近一ヶ年間に下關港に於て取扱はれたる水產物の價額は六千七百六萬一千五百九十圓にして主なるものゝ取扱數量價額は左の如し

生	鯖	五千七百三十五万尾	價額一千三十二萬三千圓
生	鰒	一億二千五百万尾	同　百二十五萬圓
生	鰤	三十三萬五千尾	同　二百五十一万二千五百圓
	鯛	二百四十五萬貫	同　七百三十五萬圓

鯨肉	六百二十万斤	同	百八十六萬圓
其他鮮魚		同	二千百四十八萬七千五百圓
塩鯖	二百五十萬貫	同	百八十七萬五千圓
塩鰮	百四十三萬貫	同	五十萬五百圓
塩鰤	二十四萬貫	同	八十四萬圓
塩鰺	二百五十萬貫	同	百五十萬圓
塩太刀魚	百二十萬貫	同	八十四萬圓
其他塩魚		同	百七十一万一千五百圓
煎魚	八十五貫	同	二百十二萬五千圓
干鰯	二百七十五萬斤	同	百五十万圓
棒鱈	六萬貫	同	十三万二千圓
開鱈	二百八萬三千斤	同	四十九萬九千九百二十圓
目刺鰮	六萬把	同	十八萬圓
其他乾魚		同	二百八十三萬四千百圓
羽鰊	三十二万貫	同	二十一萬七千六百圓

鰊粕	七十八萬五千貫	同	六十二萬八千圓
簀干鰮粕	百五十萬貫	同	七十五万圓
朝鮮鰮粕	二十八万五千貫	同	百九十九萬五千圓
近海鰮粕	百七十萬貫	同	百三十二萬六千圓
其他魚肥料		同	四十八萬九千七十圓
乾和布	三十一万貫	同	十五萬五千圓
昆布	二十五萬三千貫	同	五十八萬一千九百圓
寒天	二百萬本	同	二万八千圓
海苔	二万五千束	同	七万五千圓
布海苔	四万貫	同	九萬二千圓
其他海草類		同	十萬一千圓
其他水産物		同	百三十萬二千圓
計		同	六千七百六万一千五百九十圓

鮮魚鐵道輸送

下關驛より全國各地に輸送する貸切貨車數、發送數量、價額等につき最近一ヶ年間の狀況を掲ぐ

れば次の如し

阪神地方—冷藏庫八千二十一、普通車五百二十八、其他九、計八千五百五十八
噸　數六万八千四百六十四噸　價額一千四百十六萬千七百七十七圓

東京及東海地方—冷藏庫二千二百六十八、普通車百十一、計二千三百七十九
噸　數一万九千三十二噸　價額三百九十三萬六千七百六十七圓

中國地方—冷藏庫二千三百十八、普通車百五十七、其他五十七計二千五百三十二
噸　數二萬二百五十六噸　價額四百十八萬九千九百五十一圓

東北地方—冷藏庫八十三、普通車六、計八十九
噸　數七百十二噸　價額十四萬七千二百七十五圓

九州其他—冷藏庫七百五、普通車四十一、其他十五、計七百六十一
噸　數六千八十八噸　價額百二十五萬九千三百十一圓

以上の如く貨車冷藏庫一萬三千三百九十五車、普通車八百四十三車、其他の貨車八十一車、合計一萬四千三百十九車を費し十一萬四千五百五十二噸正味二千二百五十六萬六千七百四十四貫、價額二千三百六十九萬五千八十一圓に達す如何に下關市が海產物特に漁業の發展せるを察知し得べく大漁港築造の必要を痛感しつゝあるや此の鮮魚輸送の狀況を見ても推察に苦しまざるべし

水產製造物

食料品として素乾、煮乾、塩製、其他等、肥料製造品を合して年間二百十三萬六千五百八十九圓を產出す

下關市水產組合

大正十年十二月二十七日創立し議員二十七名、特別議員四名、會員三百八十一名を有し下關市の水產事業の發達繁榮を期し諸種の研究事業の指導に任じつゝあり

衛生施設

衛生方面を考察するに最近塵芥燒却場を新設し更に二ヶ年繼續事業として傳染病院を建設しつゝあり、既往に於ける傳染病院の經費は大正九年には八千八百四十八圓六十錢なりしが漸次膨脹して大正十二年には二萬六千七百三十一圓五十錢となり本年度に於ては二萬二千二百九十八圓の豫算を計上するに至れり。

傳染病患者はチブス最も多く、赤痢、パラチブス等にて既往五ヶ年の統計に表はれたる一ヶ年の總患者二百四五十人より三百二三十人內外を增減し患者中チブスは十歲乃至四十歲の年齡のもの比較的多數罹病し結核に類する呼吸器病にて死亡するもの年々增加傾向を示しつゝあれば當局に

於ても種々研究中の如し。

大正十二年中の死亡者一千九百七十七人の内傳染病及全身病にて死亡せるもの七百六十七人、呼吸器病にて死亡せるもの三百四十八人内純然たる結核病者百九十五人なり。

市營火葬場の使用料も年々增加し既往五ヶ年間の比較を調査せるに大正八年の收入僅かに二千六百七十三圓なりしも九年には六千六百二十三圓、十年には七千七百圓、十一年には七千六百七十二圓、十二年九千五百九十六圓、十三年度は一萬圓以上の收入を得るに至れり。

種痘の人員は流行の有無により相違するも大正八年には朝鮮系統の痘瘡患者五十八人發生したる爲め强制的種痘を施行したる爲め接種人員四千二百十一人次年は著しく低下したるも大正十二年度の如きは五千七百三人に達し衛生思想も漸次發達しつゝあり。

汚物掃除も市の發展と共に年々增加し之れ又既往五ヶ年間の狀況を調査せるに大正八年の塵芥三萬七千四百五十九車、淤泥二萬九千七百三十七樽、九年塵芥三萬九千五百七十二車淤泥四萬一千六百八十九樽更に三年後の十二年に於ては四萬六千六百五十九車の淤泥と七萬七千四百二十八樽を掃除するに至れり、塵芥一車の重量は七十貫、淤泥一樽廿貫にして一日の平均搬出量八年は塵芥百三車、淤泥八十一樽、五年後の十二年は一日百廿七車の塵芥と二百十二樽の淤泥の搬出を見年々增加著し。

私立病院の入院患者の狀況を見るに一ヶ年の延人員、小林病院の一萬八千五十四人、黑石堂病院の六千三拾七人、小倉記念病院下關分院の五千八百拾九人、佐島病院の三千九拾六人、貴志病院の二千九拾五人、外來患者は前記五病院を通じて一萬八千五百人以上なり。

醫師下關市内に於て開業せる醫師數其他最近の調査によれば大學卒業拾四人、官公立專門學校以上卒業拾九人、私立專門學校卒業卅三人、試驗及第拾六人、從來開業二人、計八拾五人にして之れを現在市の人口につき割當すれば千人に一人となる。

齒科醫卅一人、藥劑師卅四人、產婆四拾七人、看護婦九拾六人、マッサージ按摩術百三拾二人鍼灸術七拾一人、整接骨一人、藥種術五拾三人あり。

娼妓健康診斷病者は一ヶ年の檢査人員三千四百人内外にして、娼妓現在數三百六拾五人の内九拾九人乃至百拾人の黴毒、淋病、軟性下疳其他を生じ恐るべき現況とすべし。

附記銀婚式當時に於ける各種病院、醫院等は末尾に主なるものを錄し置く。

交通及運輸

道路

下關市内の國縣道、市道等合計延長六拾五里拾七町廿八間にて此坪數拾五萬八千八拾五坪なり今その内譯を記載すれば左表の如し

		延長	坪數
國道		一九町一一間	五、六二二坪
縣道		二里二〇、〇一	一九、九五九
市道	二間幅以上	五、四七、四四	四一、〇四三
	二間幅以下	五六、〇二、三二	九一、四六一
小計		六一、一四、一六	一三二、五〇四

橋梁は縣費支辨のもの二、市費支辨のもの二拾八、延長六拾七間八分、面坪百廿六坪三七あり

諸車は牛馬車	四九八車	荷車	三、二一五車
人力車	五〇三	自轉車	三、四二三
自動車	五八	合計	七、六九七

護岸(船舶繫着岸)二千五百七拾四間にして水深六尺乃至九尺(其他の護岸)一千七百五拾三間、水深六尺、岸壁延長二百三拾間、水深二拾四尺、其他の海岸二千七百四拾間、合計延長七千二百八拾七間を有し棧橋の延長幅員、水深等左記の如し。

	棧橋名	構造	延長	幅員	水深
鐵道	關釜連絡船棧橋	混凝土造棧橋型	一九八間〇	八間〇	二四尺〇
鐵道	自働貨車航漕棧橋	懸吊鐵骨造	二〇、〇	二、四	一〇、〇
鐵道	關門連絡棧橋	連絡結吊鐵骨造及木製游動棧橋	一七、〇	七、〇	一二、一
省	荷揚棧橋	木製連絡棧橋及游動棧橋型	七、〇	七、〇	一三、五
省	貨物用棧橋	混凝土造固定棧橋	八、六	九、〇	七、五
	關門渡船棧橋	木製固定棧橋連絡棧橋及游動棧橋	二一、六	二、二	九、二
	稅關棧橋	鐵製固定棧橋木製連絡棧橋及木製游動棧橋型	二一、二	二、〇	九、二
	日東製氷會社棧橋	混凝土造棧橋型	八、九	三、〇	一〇、五
	大阪商船棧橋	木製連絡棧橋及游動棧橋	七、一	一、五	六、二
	秋田商會棧橋	木製固定棧橋連絡棧橋及游動棧橋	一五、七	二、〇	六、二
	肥後又棧橋	木製固定棧橋	二、〇	二、〇	一〇、七
	巡航船岬町棧橋	木製連絡棧橋及游動棧橋	五、〇	二、〇	六、〇
	鈴木商店棧橋	木製固定棧橋	一、五	一、五	六、〇
	彦島渡船棧橋	木製固定棧橋連絡棧橋及游動棧橋	一七、九	三、〇	一二、〇
	水上警察署棧橋	木製固定棧橋連絡棧橋及游動棧橋	一一、六	一、五	一〇、〇

倉庫

下關市内に於ける主なる倉庫は左記五倉庫にして棟數六拾五、坪數六千八百一坪餘を有す

鐵道省倉庫	下關驛構内	棟數 二	坪數 二、六七七、八四
東神倉庫株式會社	觀音崎町	〃 一八	〃 八八五、五三
株式會社浪速倉庫	仝	〃 五	〃 六一三、〇〇
門司税關下關出張所	唐戸町	〃 一	〃 二一六、〇〇
下關倉庫株式會社	西南部町	〃 三五	〃 一、七四六、〇〇
其他		〃 四	〃 六六三、〇〇
計		〃 六五	〃 六、八〇一、三七

船舶

汽船五噸以上	船數 五二	廿屯以上船數 七四	百屯以上船數 五四		
五百噸以上	船數 一	計 船數 一八一	總屯數 一六九六九		
西洋型帆船五噸以上	船數 三九八	廿屯以上船數 一九一	百屯以上船數 四四		
計	船數 六三三	計屯數 二一一二五屯			
日本型帆船五十石以上船數	四五	二百石以上船數 一九			

計	船數 六四	石數計 一二五二四石	小船數 七〇五
合計	船數 一五八三	屯數三九三四六屯	

内國航路の出入船舶の狀勢は商船(汽船)の出入港定船十二萬一千百八十一、屯數二千二百八十萬八千八百七十屯、不定船の出入港船數千三百七十、屯數二十六萬六千屯、に上り、帆船の内西洋型帆船出入港船數十八万五千四百二十、屯數六百廿三萬三千四百七十屯、日本型帆船の出入港數八千三十、石數百五十六萬三千六百六十石、計船數卅一萬六千一、屯數計二千九百四十六萬四千七百六屯にして尙ほ漁船の汽船數三千四百五十六、屯數八十二萬九千四百四十屯、帆船百卅六、屯數五千四百五十二屯、計船數三千五百九十二、屯數計八十三萬四千八百九十二屯なり。

避難船の出入最近の狀勢は汽船六十、屯數一萬七千八百四十屯、帆船二百二十四、屯數六千三百四十六屯、計船數二百八十四、屯數計二萬四千百八十六屯、にして之は主として大正十二年の調査に基く狀況とす。

最近一ヶ年間の船舶の「総出入港」の數は汽船數十二万六千六十七、屯數二千三百九十二萬二千百五十屯、帆船數十九萬三千八百十、屯數六百四十萬一千六百卅四屯、總計船數に於て卅一萬九千八百七十七、總屯數實に三千卅二萬三千七百八十四屯に達するに到れり。

外國航路出入港船數は日本船廿六隻入港し出港廿三隻にして出入屯數六萬二千四百四十六屯なり

外國船は主に門司港に出入す。

內航出入主要貨物

下關港に於ける年間主要貨物の到着は合計百十萬八千七百卅屯、價額一億八千卅一萬二千五百九十圓、發送七十六萬四千九十屯、價額一億三千九白一萬七千七百六十圓にして本港の狀勢を知らんとすには左表を掲ぐるを以て最も便ならんと思料するものなり。（最近五ヶ年間の平均示數）

到着

	噸數(噸)	價額(圓)	重ナル仕出地
生牛	五〇一〇〇	六五一三〇〇〇	門司 朝鮮
馬	七五〇〇	一三二七五〇〇	門司
內地米	一一七二三〇	二三〇九四三一〇	九州東京
朝鮮米	七七八九〇	一五四二二二二〇	朝鮮各港
麥	七九〇〇	六九五二〇〇	門司
小麥	五七〇〇	六二一三〇〇	九州
大豆	六〇七〇〇	七一〇一九〇〇	朝鮮小樽

發送

	噸數(噸)	價額(圓)	重ナル仕向地
生牛	四五〇〇	五八五〇〇〇	門司 四國
馬	三五〇〇	六一九五〇〇	門司
內地米	七〇五八〇	一三九〇四二六〇	名古屋 大阪神戸
朝鮮米	四七七八〇	九四六〇四四〇	門司大阪
麥	七七〇〇	六七七六〇〇	門司 大阪神戸
小麥	五六〇〇	六一〇四〇〇	同
大豆	五五〇八〇	六四四四三六〇	九州 大阪神戸

小豆	七〇三〇	一二六〇八七〇	朝鮮 北海道
其他豆類	一四二〇	一七〇四〇〇	同
麥粉	三四七〇〇	五一〇〇九〇〇	門司
其他雜粉	六七〇〇	九五八一〇〇	門司 北海道
食鹽	六五〇〇	四〇九五〇〇	門司
海草類	五二〇〇	二三四〇〇〇〇	北海道 朝鮮
素麺	二三〇〇	二四六一〇〇	網干飾摩
乾饂飩	一五〇〇	一一二五〇〇	地廻
乾物類	二五五〇	五八六五〇〇	門司大阪
生魚	一一五二〇〇	一九二三八四〇〇	長崎
鹽乾魚	三七五七〇	一一〇二二五〇〇	朝鮮各港
其他海產物	一六〇〇	一二〇〇〇〇〇	仝
蔬菜	一九七〇	一三七九〇〇	九州四國
果實	八四五〇	一九〇一二五〇	朝鮮 北海道

小豆	六一六〇	九七九四四〇	九州大阪
其他豆類	一二〇〇	一四四〇〇〇	同
麥粉	四五一〇〇	六六二九七〇〇	門司東京 其他
其他雜粉	四〇〇〇	五七二〇〇〇	門司其他 各港
食鹽	三五〇〇	二二〇五〇〇	九州其他
海草類	四六五〇	二〇九二五〇〇	大阪九州 其他
素麺	一八〇〇	二九九六〇〇	九州朝鮮 各港
乾饂飩	一六二〇	一二一五〇〇	門司大阪
乾物類	二四九〇	五七二七〇〇	九州朝鮮 各港
生魚	四四八六〇	七四九一六二〇	九州各港
鹽乾魚	三四六六〇	一〇四七八三〇〇	門司 大阪神戸
其他海產物	一四五〇	一〇八七五〇〇	九州各港
蔬菜	一一二〇〇	七八四〇〇〇	九州朝鮮 各港
果實	一二五一〇	二八一四七五〇	仝

醤油	二七五〇	四二〇七五〇	小豆島門司	一九八〇	三〇二九四〇	門司朝鮮各港
清酒	三八三〇	一二二五六〇〇	門司福山	三二八〇	一〇四九六〇〇	九州朝鮮各港
麥酒	三八五〇	六八九一五〇	大阪横濱	四三五〇	七七八六五〇	仝上
砂糖	四八〇〇〇	一五八〇四八〇〇	門司其他各港	二九四一〇	一〇〇四五八三〇	朝鮮中國各港
菓子	—	五四六〇〇〇	地廻	—	五三六〇〇〇	門司朝鮮長崎
罐詰	二二二〇	五五五〇〇〇	門司朝鮮	三九〇〇	九七五〇〇〇	大阪廣島門司
鷄卵	六四〇	一六〇〇〇〇	門司笠岡	五〇〇	一二五〇〇〇	九州各港
石油	二一六五〇	三一三九三五〇	北海道各港	二四七四〇	三五八七三〇〇	九州朝鮮各港
其他油類	六二〇〇	九六〇五八〇	九州大阪	三八〇〇	七一二二八〇	九州大阪朝鮮
蠟燭	五〇〇	一六三五〇〇	門司各港	一四六〇	四七七四二〇	門司朝鮮
綿糸	一三二一〇	一五四四二一九〇	朝鮮大阪神戸	二三六三〇	一九〇六九七三〇	門司大阪朝鮮
絹織物	七五〇	二六二五〇〇〇	九州大阪	二〇五〇	七一七五〇〇〇	門司朝鮮各港
綿織物	二三四〇	一二七九九八〇	仝上	一九七〇	一〇七七五九〇	仝上
紙類	一七〇三〇	五八二四二六〇	門司大阪	一二三七〇	四二三〇五四〇	仝上

石炭	三一二〇〇	四三六八〇〇	九州各港	二〇三〇〇	二八四二〇〇	大阪朝鮮各港
黑鉛	五八〇	八七〇〇〇	朝鮮各港	五八〇	八七〇〇〇	門司其他各港
コークス	一三四〇〇	四六九〇〇〇	九州各港	一四三五〇	五〇二二五〇	門司朝鮮各港
セメント	三四八四〇	一五六七八〇〇	門司小野田大分	四三五五〇	一九五九七五〇	九州朝鮮各港
鐵材	一八三五〇	二二五七〇五〇	八幡大阪門司	一四二五〇	一七五二七五〇	門司仝上
鐵製品	二九七〇	六八〇一三〇	大阪神戸門司	二八九〇	六六一八一〇	仝上
金物機械類	一六六〇	三〇二一二〇	門司大阪	二三五〇	四〇九五〇〇	仝上
陶磁器	二九三〇	二六九五六〇	仝上	三五一〇	三二二九二〇	仝上
硝子製品	一〇七〇	七八六四五〇	仝上	一二五〇	九一八七五〇	仝上
豆粕	三二七五〇	二三二五二五〇	門司朝鮮各港	一八四〇〇	一三〇六四〇〇	九州中國各港
海產肥料	三三六六〇	四三七五八〇〇	朝鮮北海道各港	二〇四九〇	二六六三七〇〇	九州大阪
人造肥料	二四九二〇	二一九二九六〇	九州東京大阪	一三八七〇	一二二〇五六〇	九州各港
木材	四二七五〇	二九九二五〇〇	朝鮮宮崎	八八八四五	三七〇一八〇〇	門司大阪神戸
板類	一八二七〇	二九二三二〇〇	朝鮮熊代門司	一三二四〇	二一一八四〇〇	仝上

木炭	一四三二七〇	六四四七一五〇	門司 朝鮮 嚴原	三六二〇	一六二九〇〇	仝	上
竹類	三二〇〇	五四三〇〇	鹿兒島 仙崎	三二八〇	五五七六〇	門司 大阪 朝鮮	
疊表	三八三〇	九六八九九〇	門司 福山 宇野	四九八〇	一二五九九四〇	門司 朝鮮 長崎	
繩莚叺類	七四八〇	一七九五二〇	門司 宇和島 兵庫	二六〇五	六二五二〇	門司 朝鮮	
漁網	二二五〇	一二三七五〇〇	地廻	一三二〇	七二六〇〇〇	朝鮮 各港	
船具	一七一〇	一〇七七三〇〇	大阪 神戸 福山	二八七〇	一八〇八一〇〇	朝鮮 門司 若松	
燐寸	四〇六〇	三八五七〇〇	大阪 神戸 廣島	三一六〇	三〇〇二〇〇	朝鮮 門司 長崎	
合計	一、一〇八、七三〇	一八〇、三二、五九〇		七六四、〇九〇	一三九、〇一七、七六〇		

外航輸出主要貨物

塩鱒、精糖、清酒、密柑、打綿、綿織糸、綿縫糸、白木綿、足袋、帶子、塵紙、セメント、窓硝子、疊表、小包郵便物、等價額三百七十萬三千三百十四圓、

外航輸入主要貨物

大豆、小豆、砂糖、牛肉、豆粕、小包郵便物、機械、其他諸品等價額百八十二萬一千六十五圓、

鐵道主要貨物

最近一ヶ年間の鐵道主要貨物は小口取扱五萬二千二十五屯、貸切扱十九萬八千六百十六屯、運賃二百四萬一千八十八圓を發送し、到着に於ては小口扱二萬三千九百五十四屯、貸切扱十二萬四千五百卅三屯にして主要なるものは左の如し。

	發送	到着
米	二、五三九噸	一〇、七〇九噸
麥類	七七九	八八八
雜穀	一、八八一	一、五三七
生甘藷	五四	二四五
生馬鈴藷	八七	一三〇
生野菜	二、八〇八	一、三九五
柑橘	二、八五六	四三〇
其他ノ果物類	六、六六九	二、六七八
藁工品	二六一	七四六

杭木	一	二九六	
材木類	二、六三五	一五、八〇四	
木炭	四五三	三、四五八	
薪	二九	一、〇五七	
竹	二一	六七〇	
石材	四九	一一七	
砂利	一	四九三	
石炭	三七八	二七、一九三	
骸炭	三〇一	一九四	
礦物	三八	一〇〇	
石油類	六、四四八	一六、六三四	
鐵及銅	一、四〇七	五八二	
銅	七	一四	
海藻類	五〇〇	三〇五	
鹽	九	一	

鹽乾魚	八、五六二	五、四一七	
鮮魚	一一七、六五七	四、〇三二	
小麥粉	一、七八六	一、四九四	
澱粉類	二一〇	一七二	
砂糖類	一二、一九六	八〇	
味噌醬油	八九	一、一二五	
漬物類	五七三	一、〇九五	
茶	三	六四	
清酒	一八九	二、一三九	
燒酎	三、八〇五	五一八	
麥酒	三、〇四六	一、〇四九	
清涼飲料水	二九九	四一二	
人造肥料	一、七一三	八二	
大豆粕	一〇、九二八	一四〇	
魚肥	六、六一七	一、四四五	

其他ノ肥料	三、五九三	四一一	
飼料	二、八三八	四〇九	
綿	二四	二五九	
綿糸	一三一	四一七	
綿織物類	三一	五四一	
絹織物類	三一	二八	
毛織物類	九	三三	
麻苧類	一	三四	
石炭	五七	五、一一二	
セメント類	一、四八三	一四二	
煉瓦	五〇	三三二	
陶器類	四八	五六六	
土器	一三	六四	
瓦	四四	一〇五	
硝子類及製品	一、八三五	六六一	

襤褸類	一八一	六四	
製紙原料	一八六	五四	
和紙	八二	二七八	
洋紙	一、八四六	二〇六	
畳表類	一三一	六八八	
鐵及鋼製品類	一、八五五	一、一三六	
漆器	一六	四一	
機械類	一七〇	六三五	
油脂蝋類	三一六	四五二	
染料及塗料	一五	三四	
藥品類	二〇	四一九	
燐寸類	三〇	七四〇	
鮮肉	四、五三六	一一一	
皮革類	一〇	一	
馬	一二	二二	

其他	二六、〇三五	二四、七六四
計	二五〇、六四一	一四八、四八七

社會事業

本市社會事業 としては、行路病人、行旅死亡人の取扱ひは勿論、救療所に於ては一ヶ年四千人内外の實費若しくは無料の患者に治療を施しつゝあり、尙市營祭具貸付、市營住宅、公會堂、（食堂）幼兒保育所（大正十二年六月十六日設立）等あり、昨年四月市立職業紹介所を市廳舍の一部に設け一般救職者雇主の間を斡旋しつゝあり、其他下關佛敎同盟濟世會保育院（大正十二年四月廿三日設立）あり、年々兩保育所にて二百人内外の幼兒を所謂共稼ぎの保護者の爲めに便し成績良好なり。

釋放者 保護の爲めには下關保護院、（個人經營）下關佛敎同盟濟世會等主として一時的保護に任ず。

救護團 体として青年團救護團あり、青年團は修養、体育、救護、其他の事業を行ひ團員二千四百五十人を有し正副團長を置き活動しつゝあり、救護團は專ら災害豫防、非常事變の際人命財産

の救護、其他に任じ正副團長を置き團員千名に上り活動目覺しきものあり。

日本赤十字社 下關委員部には現在特別社員六拾八名終身社員千卅四名正社員二百七拾壹名あり て大正拾三年度の醵金收入は金千五百卅圓餘なり。

愛國婦人會 山口支部下關幹事部は現社員千二百五拾九人にして格別揭ぐべき治績を認めず。

水道

下水道布設 は明治廿六年拾月工事費六萬九千七百九拾六圓餘を投じ同卅年三月竣工したるも唐戸灣の埋立工事明治廿七年八月に着し同廿九年拾壹月竣成したる以後田中川の排水に支障を來せるものゝ如く毎年豪雨の塲合沿岸商家の浸水被害甚大にして田中町住民の苦情、市當局に之が排水溝改修等の申請建議など再三にとどまらず、市當局に於ても市會に諮り目下之が調査委員を選任し研究中なるも未だ具体的方策の確立を見ず。

上水道布設 は明治卅三年三月工事に着手し同卅九年三月竣工總工費金八拾八萬五千四百七拾七圓を要したり、給水は明治卅九年壹月より市一部より開始し、明治四拾壹年上水道水源清淨計畫の施行をなし工費四萬六千二百八拾壹圓を投じ、降つて大正四年より大正五年度に於て上水道濾

過池を增築し工費金三萬九千七百六拾壹圓を要し更に大正六年淨水池擴張用地を買收し高尾淨水池の改設を行ひ今日に及ぶも尙人口の增加、營業用、船舶用、等に不足を告ぐるに至れり仍大正十四年四月市は下關水道擴張費百五十萬圓の起債を其筋に申請したり、其申請起債額同年九月百四十三萬六千三百圓に減額修正の上認可せらるゝに至り大正十七年度に竣工の豫定なり然る上は大正廿四五年迄は市の膨脹に伴ふ給水に不足を訴へざるに至る計劃なり。（本書草稿中起債の認可の指令に接したり）

送水管 の延長（各吋鐵管鉛管を加へ）四萬二千六百間に達し最近年の調査による濾過水量一億三千七百八十一萬千八百十三立方尺、配水量一億三千六百七十三萬五千二百十二立方尺に達し一日平均濾過水量四百五十一萬二千六百十七立方尺、配水量四百四十八萬千三百四十七立方尺なり。

一日使用水量 は平均卅八萬立方尺餘にして一人一日の平均使用水量五立方尺餘となる一日一人の使用水量は鐵道、製氷、船舶其他の工業用水を包含して割當てたるものなり、

水道使用料 は年間凡そ家事及營業用十万六千餘圓、湯屋用一萬五千七百圓、船舶用二萬四千二百圓、製氷用三萬七千三百圓、庭園用百三十圓、共用二万九千二百圓、特別給水九百圓等なり

水道貯水池 は內日村、丸形角形濾過池及配水池等は市內高尾にあり現在水道用地は貯水池送水線路、配水線路、淸淨池等總計十七萬八千九十二坪餘を有す、尙水道に要する經費の收支等は

別に大正十四年度本市の豫算を書中に揭げたるを以て參照せらるべし。

大正十四年 下關市歲入出豫算

歲入

金九拾八萬壹千貳百八拾八圓	經常部豫算高	金拾萬九千六百四拾參圓
金卅五萬貳千六百六拾參圓	臨時部豫算高	金貳萬八千圓
合計金百卅參萬參千九百五拾壹圓		

歲出

金七拾五萬四千九百六拾八圓	經常部豫算高	金拾萬九千六百四拾參圓
五拾七萬八千九百八拾參圓	臨時部豫算高	金拾九萬八千五百拾壹圓
合計金百參拾參萬參千九百五拾壹圓		合計金參拾萬八千百五十四圓
歲入出差引殘金ナシ		歲入出差引殘金ナシ

大正十四年 下關市特別會計水道費

歲入

金貳拾八萬百五拾四圓	經常部豫算高	金參拾貳万六百四拾八圓
金貳萬八千圓	臨時部豫算高	歲入豫算高

歲出

金參拾貳万六百四拾八圓	歲入豫算高	金參拾貳万六百四拾八圓
歲入出差引殘金ナシ		歲出豫算高

都市計畫及港灣改良費

歲入

公會堂費

歲入

金參萬五千六百九拾四圓　歳入豫算高
歳　出　金參萬五千六百九拾四圓　歳出豫算高
歳入出差引殘金ナシ

住宅費

歳　入　金壹萬七千九百拾參圓　歳入豫算高
歳　出　金壹萬七千九百拾參圓　歳出豫算高
歳入出差引殘金ナシ

物價調節基金

歳　入　金八千六百六圓　歳入豫算高
歳　出　金八千六百六圓　歳出豫算高
歳入出差引殘金ナシ

基本財産費

歳　入　金七千圓　歳入豫算高
歳　出　金七千圓　歳出豫算高
歳入出差引殘金ナシ

奬學資金

歳　入　金貳千貳百四十八圓　歳入豫算高
歳　出　金貳千貳百四十八圓　歳出豫算高
歳入出差引殘金ナシ

慈惠資金

歳　入　金百八拾六圓　歳入豫算高
歳　出　金百八拾六圓　歳出豫算高
歳入出差引殘金ナシ

市政及議會

市役所

明治廿二年七月一日開廳以來の市長、助役、收入役等を錄すれば左の如し。

歴代市長

御裁可年月日	滿期又ハ退職	前職勳等	氏名
明治廿二年五月十三日	同　廿四年八月退		伊藤房次郎
同　廿四年九月卅日	同　廿五年八月仝		石川良平
同　廿五年八月廿四日	同　廿九年二月仝	陸軍歩兵中佐　正六位勳四等	内田一心
同　廿九年二月廿二日	同　卅二年三月仝		高洲素介
同　卅二年四月廿九日	同　卅八年四月滿	豊浦郡長　從五位勳五等	原勝一
同　卅八年五月三日	同三十九年八月退		同入
同　三十九年十月九日	同四十三年五月仝	宮城縣警察部長正五位勳四等	白上俊一
同　四十三年十月五日	大正二年二月　仝	朝鮮總督書記官從五位勳五等	小林重威
大正三年七月七日	同　六年五月　仝	奈良縣知事　正五位勳四等	青木良雄

金參萬五千六百九拾四圓　歲入豫算高
歲　出
金參萬五千六百九拾四圓　歲出豫算高
歲入出差引殘金ナシ

住宅費

歲　入
金壹萬七千九百拾參圓　歲入豫算高
歲　出
金壹萬七千九百拾參圓　歲出豫算高
歲入出差引殘金ナシ

物價調節基金

歲　入
金八千六百六圓　歲入豫算高
歲　出
金八千六百六圓　歲出豫算高
歲入出差引殘金ナシ

基本財産費

歲　入
金七千圓　歲入豫算高
歲　出
金七千圓　歲出豫算高
歲入出差引殘金ナシ

奬學資金

歲　入
金貳千貳百四十八圓　歲入豫算高
歲　出
金貳千貳百四十八圓　歲出豫算高
歲入出差引殘金ナシ

慈惠資金

歲　入
金百八拾六圓　歲入豫算高
歲　出
金百八拾六圓　歲出豫算高
歲入出差引殘金ナシ

市政及議會

市役所

明治廿二年七月一日開廳以來の市長、助役、收入役等を錄すれば左の如し。

歷代市長

御裁可年月日		滿期又ハ退職	前職勳等	氏名
明治廿二年五月十三日	同	廿四年八月退		伊藤房次郎
同	廿四年九月卅日	同	廿五年八月仝	石川良平
同	廿五年八月廿四日	同	廿九年二月仝	內田一心
同	廿九年二月廿二日	同	卅二年三月仝	高洲素介
同	卅二年四月廿九日	同	卅八年四月滿	陸軍歩兵中佐　正六位勳四等
同	卅八年五月三日	同	三十九年八月退	豐浦郡長　從五位勳五等　原勝一
同	三十九年十月九日	同	四十三年五月仝	宮城縣警察部長正五位勳四等　同入
同	四十三年十月五日	大正二年二月	仝	朝鮮總督書記官從五位勳五等　白上俊一
大正三年七月七日		同	六年五月	仝　奈良縣知事　正五位勳四等　小林重威
				青木良雄

同　六年十月廿五日　同　八年九月死　佐賀縣知事　從四位勳四等　不破彦麿
同　八年十月三十日　同十一年二月十日退　長崎縣知事　從三位勳一等　李家隆介
同　十一年八月七日　同十四年四月廿九日　東京市名古屋市助役　山崎林太郎
同十四年七月六日現在　山崎林太郎

歴代助役

明治廿二年　同　三十年退　豊浦郡書記　勳六等　兒玉雅尙
同　三十年　同三十二年仝　山口縣屬　勳八等　佐々木每輔
同三十二年　同三十九年十月仝　竹田虎之助　栗屋端一
同三十九年十一月十四日　大正四年十二月二日仝　下關市主事　生駒祿藏
大正五年二月五日　同　九年二月四日仝　長崎縣郡長　從五位勳五等　竹尾英敏
同　八年三月　同十一年十二月二日仝　長崎縣屬　後藤九州男
十二年一月二十五日仝　東京市電氣局主事　浮田茂太郎
同　十二年二月三日現在

歴代收入役

明治廿二年　明治廿一年死　豊浦郡書記　勳七等　中原尋亮
同　三十年六月三日　大正五年六月退　山口縣屬　從七位勳八等　田村壽雄
大正五年七月廿日より現任　戸村芳熊

市會

明治廿二年四月廿六日最初の市會以來大正十四年現在に至る市會正副議長市參事會員、議員の氏名等を錄し以て記念とせむ。

歴代の市會議長

明治廿二年　伊藤房次郎　同　廿九年　同三十一年　内田吉三郎
同　廿二年　同三十一年　三井忠藏
同　廿四年　同三十二年　三井忠藏
同　廿五年　松尾寅三　同三十三年　内田吉三郎
同三十五年　内田吉三郎
同　廿五年　同三十六年　關谷福太郎
同　廿七年　内田吉三郎　同三十七年　關谷福太郎
同　廿七年　松尾寅三　同三十七年　磯部良介
同　廿八年　松尾寅三　同三十七年　磯部良介

同三十八年　國香萬里
同三十九年　和田又藏
同四十年　藤本直治郎
同四十二年　和田又藏
同四十三年　山本鳳弼
同四十四年　寶邊岩次郎
同四十五年　三井忠藏
大正二年

同二年　宮本眞策
同六年　關谷福太郎
同七年　寶邊岩次郎
同十年　同人
同十二年　秋田寅之介
同十四年　村岡清吉

歴代の市會副議長

明治廿二年　松尾寅三
同廿四年　小松昌平
同廿八年　古谷滿二郎
同三十年　關谷福太郎
同三十一年
同三十四年

同三十五年　白花鐵二郎
同三十六年　羽野晨介
同三十七年　桝谷音三
同三十八年　有山寅槌
同三十九年　桝谷音三
同四十年　富村武雄
同四十一年　宮本眞策
同四十二年
同四十三年

同四十四年　德永四郎
同四十五年　村岡清吉
大正二年
同二年　淺海壽之吉
同六年　安井作次郎
同十六年　村岡清吉
同十年　村岡清吉
同十四年　岡平八郎

歴代の市參事會員

明治貳拾貳年　永積安兵衛　三井忠藏　松尾寅三　三宅熊太郎　林政二郎　藤田重吉
明治二十三年　永積安兵衛　三井忠藏　林政二郎　松尾寅三　公野傳三　三宅熊太郎

藤田　重吉

明治二十四年

永積安兵衛　關谷　禎造　林　政二郎

山本　鳳弼　藤田　重治　羽野　晨介　内田吉三郎　三宅熊太郎

明治二十五年

關谷　禎造　西尾節太郎　增谷久次郎

古谷滿二郎　山本　鳳弼　羽野　晨介　德永安兵衛　内田吉三郎

明治二十六年

西尾節太郎　村田倉之進　增田久次郎

山本　鳳弼　關谷福太郎　藤田　重吉　小林　昌平

明治二十七年

村田倉之進　桐山秀四郎　增田久次郎　桐山秀四郎　德永安兵衛　古谷滿二郎

小林　昌平　藤田　重吉　小林　昌平

明治二十八年

村田倉之進　桐山秀四郎　古谷滿二郎　關谷福太郎　小林　昌平

小林　昌平　内田吉三郎　德永安兵衛　古谷滿二郎　關谷福太郎

明治二十九年

内田吉三郎　西尾節太郎　桐山秀四郎　德永安兵衛　古谷滿二郎　關谷福太郎

小林　昌平

明治三十年

西尾節太郎　村田倉之進　桐山秀四郎　內田吉三郎　德永安兵衛　古谷滿二郎

關谷福太郎　小林　昌平

明治三十一年

村田倉之進　松尾　寅三　內田吉三郎　磯部國太郎　福田重次郎　西尾郁太郎

古谷滿二郎　高瀨　德藏　關谷福太郎　德永安兵衛

明治三十二年

永積安兵衛　增富久治郎　福田重次郎　大木鬼一郎　磯部國太郎　原田　彌美

西尾節太郎　高瀨　德藏　古谷滿二郎　德永安兵衛　關谷福太郎　內田吉三郎

明治三十三年

大木鬼一郎　原田　彌美　白石鐵二郎　西尾節太郎　林　平四郎　古谷滿二郎

關谷福太郎　內田吉三郎　和田　又藏

明治三十四年

大木鬼一郎　伊藤彌六　白石鐵二郎　關谷禎造　林平四郎　古谷滿二郎

關谷福太郎　和田又藏

明治三十五年

伊藤彌六　關谷禎造　林平四郎　古谷滿二郎

明治三十六年

伊藤彌六　關谷禎造　林平四郎　淺海壽之吉

土井重吉　古谷滿二郎　羽野晨介

明治三十七年

伊藤彌六　關谷禎造　淺海壽之吉　羽野晨介

明治三十八年

伊藤彌六　關谷福太郎　關谷禎造　中島四郎

土井重吉　和田又藏　羽野晨介

明治三十九年

關谷福太郎　中島四郎　淺海壽之吉　羽野晨介

土井重吉　和田又藏

明治四十年

關谷福太郎　中島四郎　淺海壽之吉　磯部良介

林平四郎　土井重吉　和田又藏

明治四十一年

關谷福太郎　中島四郎　淺海壽之吉　磯部良介

明治四十二年

關谷福太郎　御喜々右衛門　中島四郎　有山寅槌

土井重吉　奈良野彌市　林平四郎　淺海壽之吉

明治四十三年

御喜々右衛門　有山寅雄　淺海壽之吉　磯部良介

林平四郎　桝谷音三　奈良野彌市

明治四十四年

御喜々右衛門　有山寅槌　寶邊岩次郎　淺海壽之吉

牛尾恭助　奈良野彌市　山中要三　林平四郎　富盛豊次郎　桝谷音三

明治四十五年

林平四郎　百合本安太郎

寶邊岩次郎　富盛豐次郎　淺海壽之吉　牛尾　恭助　山中　要三　百合本安太郎

大正二年

寶邊岩次郎　菊谷　茂吉　富盛豐次郎　淺海壽之吉　村岡　清吉　牛尾　恭助

富村　武雄　山中　要三　桝谷　音三　百合本安太郎　原田　岩吉　青木　恒平

秋田又太郎　福田重次郎　小林　恒一　西村惣四郎

大正三年

青木　恒平　秋田又太郎　福田重次郎　原田　岩吉　小林　恒一　西村惣四郎

大正四年

青木　恒平　秋田又太郎　福田重次郎　原田　岩吉　小林　恒一　西村惣四郎

大正六年

宮本　眞策　河野　久藏　島田　定吉　大深　武熊　貴田七兵衛　山中　要藏

大正十年

林　米吉　村岡　吾一　牛尾　恭助　土井　重吉　菊谷　茂吉　宮本　眞策

開廳以來の市會議員

明治二十二年四月總選擧

松尾　寅三　廿四年退　草刈　隆一　古谷滿次郎　廿四年退　米光吉左衛門

廿三年退　白石良右衛門　廿三年仝　難波　舟平　廿五年退　南部茂兵衛　廿五年仝　關谷　福太郎

廿四年仝　內田彌四郎　廿四年補缺　原五郎兵衛　廿四年補缺　岡田好治郎　廿四年仝　芳岡六左衛門

廿五年補缺　有光　茂吉　廿四年仝　內田吉三郎　廿四年仝　羽野　嚴介　三宅　熊太郎

福田　重次郎　廿四年仝　德永　又輔　廿五年仝　增富久治郎　廿五年仝　關谷　禎造

廿五年退　德永　安兵衛　小林　昌平　廿五年仝　竹井千之亟　永積　安兵衛

廿四年補缺　江村　助次郎　廿四年補缺　島田貞太郎　三井　忠藏　廿四年仝　松永　正藏

村田　倉之進　廿四年退　白石　良藏　公野　傳藏　廿五年仝　藤田　重治

林　政二郎　廿二年仝　伊藤房次郎　廿五年退　林　平四郎　西尾　節太郎

廿四年補缺　本田　久五郎　廿四年補缺　桐山秀四郎　廿五年退　村岡　清吉

明治二十五年

小林　昌平　佐々木茂兵衛　伊藤房次郎　西尾幾太郎　關谷福太郎

德永　又輔　　内田吉三郎　　米光吉右衛門　　伊藤　彌吉　　永積安兵衛
藤村　五郎　　關谷　禎造　　磯部　良介　　藤井　庄三　　山名松次郎
松尾　寅三　　三宅熊太郎　　三井　忠藏　　古谷滿二郎　　福田重次郎
村田倉之進　　原五郎兵衛　　公野　傳藏　　增富久次郎　　岡田好治郎
江村助二郎　　本田久五郎　　有光　茂吉　　多田直太郎　　桐山秀四郎
竹井千之亟　　三宅熊太郎　　山本　鳳弼　　土井　重吉

明治二十八年

古谷滿二郎　　原五郎兵衛　　公野　傳藏　　村田倉之進　　和田　又藏
德永安兵衛　　永積安兵衛　　林　平四郎　　桐山秀四郎　　松尾　寅三
岡田好治郎　　三井　忠藏　　藤城安右衛門　　溝國　勢平　　白石峰太郎
伊藤　彌六　　小松　昌平　　佐々木茂兵衛　　關谷福太郎　　關谷　禎造
内田吉三郎　　藤村　五郎　　磯部　良介　　山名松次郎　　藤村　庄藏
土井　重吉　　竹井千之亟　　山本　鳳弼　　三宅熊太郎　　西尾節太郎
兼田　音熊　　磯部國太郎

明治三十一年

内田吉三郎　　增富久次郎　　伊藤　彌六　　伊藤房次郎　　市藤清太郎
梶山　義勝　　福田重太郎　　土井　重吉　　白石鐵二郎　　關谷福太郎
花田　佐助　　大木鬼一郎　　中島　四郎　　安井作次郎　　古谷滿二郎
原五郎兵衛　　德永安兵衛　　和田　又三　　村田倉之進　　林　平四郎
永積安兵衛　　桐山秀四郎　　三井　忠藏　　松尾　寅三　　岡田好治郎
兼田　音熊　　磯部國次郎　　溝國　勢平

明治三十四年

永積安兵衛　　高瀨　德藏　　林　平四郎　　和田　又三　　梶永　吉藏
大津勝太郎　　淺海壽之吉　　青木　垣平　　福田辰五郎　　溝國　勢平
岡田好次郎　　竹井千之亟　　船井福藏　　畠山　島藏　　國香　萬里
内田吉三郎　　增富久次郎　　伊藤　彌六　　伊藤房次郎　　市藤清太郎
梶山　義勝　　福田重次郎　　土井　重吉　　白石鐵次郎　　關谷福太郎
泥田　佐吉　　中島　四郎　　藤井　庄藏　　大木鬼一郎　　安井作太郎

羽野　嚴介

明治三十七年

原田　岩吉　有山　寅槌　百合本安太郎　桝谷　音三　藤本直次郎
磯部　良介　寶邊岩次郎　富村　武雄　富盛豊次郎　柳井清兵衛
工藤　虎吉　小林安太郎　高瀨　德藏　永積安兵衛　林　平四郎
青木　恒平　大津勝次郎　梶永　吉藏　和田　又藏　淺海壽之吉
福田辰五郎　岡田好次郎　溝國　勢平　船井　福藏　竹井千之亟
畠山　島藏　國香　萬里

明治四十年

能美　甚作　宮本　眞策　牛尾　恭助　德永　四郎　村田　音松
土岐　多藏　平野榮次郎　進登又右衛門　大野甚四郎　淺海壽之吉
山本　要藏　大津勝次郎　和田　又藏　石田喜代助　村岡　清吉
原田　岩吉　林　菊次郎　百合本安太郎　桝谷　音三　有山　寅槌
磯部　良介　寶邊岩次郎　富村　武雄　藤本直次郎　柳井清兵衛

富盛豊次郎　奈良野彌市　御喜々右衛門　工藤　虎吉　小林安太郎
神田　初治

明治四十三年

菊谷　茂吉　島田　定吉　百合本安太郎　田代與之助　秋田寅之介
藤田光之進　寶邊岩次郎　河野　久吉　池田吉五郎　富盛豊次郎
繩田政次郎　小林　恒一　吉永　米藏　藤井　綱之　福田辰五郎
竹内辰次郎　柳井清兵衛　山本　鳳弼　久野久太郎　岡　精一
公野權次郎　能美　甚作　宮本　眞策　牛尾　恭助　德永　四郎
村田　音松　下野甚四郎　進登又右衛門　平野榮次郎　大津勝次郎
淺海壽之吉　山中　要藏　村岡　清吉　和田　又藏　林　菊次郎
民繁　福壽

大正二年

鞍崎伊之助　村岡　清吉　百合本安太郎　山本　要藏　廣瀨信太郎
青木　平七　林　菊次郎　中土居傳太郎　秋田寅之介　桝谷　音三

田代與之助　林　助之亟　豐永七藏　小林　恒一　秋田又太郎
富村　武雄　内田吉三郎　島田　定吉　淺海壽之助　淺井　曉
原田　岩吉　中尾　諤郎　御喜々右衛門　兒島　喜輔　富盛豐次郎
下野甚四郎　藤田光之進　菊谷　茂吉　宮本　眞策　磯部　良介
松尾　琢三　福田榮次郎　秋元　清助　西村惣四郎　三由　仁作
青木　垣平　福田重二郎　井内松之助　安井作次郎　林　平四郎
大深　武熊　近松德太郎　淺利滿壽身　嶋田助太郎　尾田　德造
島田　定吉　西村　傳藏　桑原藤右工門　藤田光之進

大正六年

村岡　清吉　佐々木宗臣　中尾　諤郎　原田　岩吉　御喜　作藏
近松德太郎　富盛豐次郎　島田　定吉　小林　恒一　末廣德太郎
秋田寅次郎　藤田光之進　寶邊岩次郎　松永　幸作　大畑　太郎
西村惣四郎　山中　要藏　貴田七兵衛　菊谷　茂吉　河野　久藏
井上　槌藏　牛尾　恭助　百合本安太郎　大深　武熊　關谷福太郎

兒島　喜輔　坪井與太郎　增富　久藏　宮本　眞策　池田新五郎
土井　重吉　吉賀德太郎　西村貞二郎　永積　德助　平野榮次郎
中土居傳太郎

大正十年

村岡　清吉　河野德之助　道森　吉藏　寶邊岩次郎　永積　德助
城山保次郎　牛尾　恭助　豐永七藏　長沼　富藏　三由　仁作
小嶋　幸助　田上　孫作　秋田寅之介　近松德太郎　筒井　禎一
土井　重吉　久富　久吉　畑田　峰作　秋元　清助　小林　恒一
村岡　吾一　林　米吉　貴田　勝馬　藤永松次郎　廣瀨信太郎
廣田元次郎　宮本　眞策　嶋田　定吉　三井　潔
福田　辨三　松永　幸作　畑迫　末作　平山良太郎

大正十四年四月改選現在議員

議　長　村岡　清吉
副議長　岡　平八郎

參事會員　林　米吉　島田　定吉　福田龜太郎　松永　幸作

議員　福田　辨三　筒井　禎一　黑田　憲夫　山中　要藏
道森　吉藏　藤野　鹿藏　川西　定雄　吉永　晉吉
永積　德助　森川　儀一　藤岡寅之助　山本　尙文
村岡　吾一　青木　作雄　西村　重吉　山下　富太
迫畑　末作　秋田寅之介　中部　兼市　野村　嘉市
齋藤磯三郎　三由　仁作　宮本　岩吉　古谷　判治
西山　音治　前田　金造　西部德太郎　田上　孫作
和田　榮藏　岩山　唯亮

〔以上議席順〕

下關市選出衆議院議員

明治三十五年　解散　松尾寅三
仝　三十七年三月　三井忠藏
明治三十六年　解散　三井忠藏
仝四十一年五月　松尾寅三

仝四十五年五月大正三年十二月（解散）　土井重吉
大正六年四月　林平四郎
仝十三年五月　秋田寅之介

貴族院議員

大正十四年九月十日　林平四郎

下關市選出縣會議員

明治十七年二月辭任　松尾寅三
仝　十八年　仝　福田儀兵衛
仝　十八年十一月補缺　永積安兵衛
仝　二十三年　當選　三井忠藏
仝　二十六年　補缺　三井忠藏
仝　廿九年三月　仝　關谷福太郎
大正四年三月六年一月解散　林平四郎
仝　九年五月　藤井啓一
明治十七年補欽　石田清太郎
仝　十八年九月補辭　松尾寅三
仝　十九年三月當選　三井忠藏
仝　二十五年　仝　內田吉三郎
仝　廿七年二月仝　松尾寅三
仝　卅一年一月辭任　關谷福太郎

仝　三十一年　仝　土井重吉
仝　三十三年　補辭　伊藤房次郎
仝三十五年十一月補缺　土井重吉
仝　三十八年三月增員　永積安兵衛
仝　四十五年十月當選　松尾琢三　宮本眞策
大正八年十月　仝　御喜々右衛門　松尾由介
仝　十二年五月　仝　土井重吉　村岡吾一
仝　十三年九月　辭任補缺　松尾由介　寶邊岩次郎
仝　三十二年十月當選　土井重吉
仝　三十五年一月當辭　內田吉三郎
仝　三十六年十月當選　林平四郎
仝　四十年十月當選　當辭補缺　松尾琢三　桝谷音三　藤井啓一
大正四年十月　當選　御喜々右衛門　久富久吉
仝　十一年九月　死亡補缺　御喜々右衛門　土井重吉
仝　十四年五月　銀婚式御祝典當時現在　土井重吉　寶邊岩次郎　村岡吾一

警察署

明治五年五月十三日取締組支廳として警察署は水上警察事務を開始し以來今日に至る、下關警察署は陸上警察の一般事務を管掌し下關水上警察署は水上警察事務一般を管掌しつゝありて陸署の取扱犯罪件數年々二千二百件に達し殺人、强盜、窃盜、詐欺、放火、其他の刑法犯等犯人逮捕者一千四百五十件を處理し被害財貨額十三萬八千餘圓、水上署に於て又犯罪取扱件數二百件、被害財貨額一萬圓等其他變死者、棄兒年間両署に於て處理せしもの百件に及び自殺者五十人を處理するの外更に行政方面に就ても取締りを要する營業、質屋、古物商、宿屋、料理屋、湯屋、銃砲火藥商、理髮店、醫師、賣藥商藝娼妓、仲仕寄場、劇場、等其他五十餘種の多きに達し年々警察事務の增加を來し現在の警察配置（陸上警吏百五名　水上警吏三十四名）にては市民の生命財產を完全に保護し難き狀勢なるを以て警備配置等近く增大を計劃中なり。歷代兩署長は左の如し、

下關警察署

署長	警部	古川龍三	不詳
署長心得	仝	櫛部莊一	明治十六年六月四日
署長兼務	仝	高橋英一	仝　十八年四月八日

明治十六年六月四日　山口警察署ニ轉任
仝　十八年四月
仝十八年五月二十一日

署長	莊 正衡	仝十八年五月二十一日	仝 十九年十月	
仝	竹内正加可	仝十九年十月十一日	仝二十二年六月十三日	警察部警務課長轉任
仝	田上 競	仝二十三年六月十三日	仝二十七年十月二十七日	警察部警務課長轉任
仝	山田 晟	仝二十七年十月二十七日	仝二十八年四月十九日	岩國署長ニ轉任
仝	小野勇次郎	仝二十八年四月十九日	仝三十一年六月二十八日	廣島縣ヘ出向フ
署長兼務 仝	山田 晟	仝三十一年六月二十八日	仝三十一年七月十六日	兼務ヲ命ス
署長 仝	奥田職輔	仝三十一年七月十六日	仝三十三年三月三十一日	依願免本官
署長心得 仝	長井正太郎	仝三十三年三月三十一日	仝三十三年四月十八日	署長心得
署長 仝	加藤正典	仝三十三年四月十八日	仝三十三年七月四日 仝三十四年六月十七日	任警視補赤間關警察署長 任阿武郡長
仝	警視 齋藤金祐	仝三十四年六月十七日	仝三十九年六月二十七日	釜山理事廳警視
仝	熊谷直正	仝三十九年六月二十七日	仝四十三年六月	大島郡長
仝	小野誠一	仝四十三年六月	大正二年六月	任長崎縣北浦郡長
仝	杉 喜熊	大正二年六月	仝三年九月二十六日	依願免本官
仝	中谷美松	仝三年十月二十六日	仝六年十一月十三日	依願免本官

仝	西 金藏	仝 六年十一月	仝 十年四月一日	任厚狹郡長
仝	村田廣一	仝 十年四月一日	仝 十一年二月	任厚狹郡長
仝	厚 半平	仝十一年二月十八日	仝 十一年二月	死亡
仝	村上英罩	仝十一年二月二十八日	仝十一年十月	任大島郡長
仝	筒井卯三郎	仝十二年三月十三日	現任	

下關水上警察署

警部	田上 競	明治二十六年七月四日	明治二十六年七月四日	兼務ヲ命ス
仝	村上五郎	仝二十六年七月四日	仝二十七年三月二十一日	柳井分署長ニ轉任
仝	島岡徹吉郎	仝二十七年三月二十七日	仝二十七年六月三十一日	非職
仝	富屋直太郎	仝二十七年六月二十一日	仝二十九年四月一日 仝三十年七月十四日	赤間關水上警察署長兼赤間關警察詰 室積警察署長ニ轉任
仝	小野勇次郎	仝三十年七月十四日	仝三十一年六月十八日	廣島縣ヘ出向フ
仝	山田 晟	仝三十一年六月二十八日	仝三拾二年七月拾五日	兼務ヲ命ス
仝	奥田職輔	仝三拾二年七月拾六日	仝三拾三年三月三拾一日	依願免本官
仝心得	佐藤 梧	仝三拾三年七月四日	仝三拾四年一月拾一日 仝三拾四年四月 拾 日	赤間關水上警察署詰 深川警察署長轉任

警視事務心得　加藤正典　仝三拾四年一月拾一日　仝三拾四年六月拾七日　任阿武郡長

警視　齋藤金祐　仝三拾八年拾二月二拾一日　仝四拾年八月　三田尻警察署ニ轉任

仝　水野尚一　三拾八年拾二月二拾一日　仝四拾年八月　三田尻警察署ニ轉任

警部　杉喜熊　仝四拾年八月五日　大正二年六月二拾七日　下關警察署長ニ轉任

仝　加藤信太郎　仝二年六月二拾七日　大正三年拾月二日　豐浦警察署ニ轉任

仝　石川太郎　仝三年拾月二日　仝三年六月拾四日　三田尻警察署ニ轉任

仝　岡村三藏　仝五年六月拾四日　仝九年拾一月　宇部警察署ニ轉ス

警視　村田廣一　仝九年拾一月八日　仝拾年四月一日　下關警察署ニ轉ス

仝　石川太郎　仝拾年四月一日　仝十一年十月十六日　山口警察署ニ轉ス

仝　出野彰一郎　仝十一年二月二十日　仝十三年十月十六日　大島郡長ニ轉ス

仝　服部稔　仝十三年十月十八日　仝十三年十二月二十日　山口警察署長ニ轉ス

警部　權代忠兵衛　仝十三年十二月廿日　仝十四年二月二十八日　死亡

仝　清水助太郎　仝十四年二月二十八日　現任

下關消防組沿革

明治十七年一月市立赤間關消防組設置定員五百名五大組とし一大組に小區を置き一小區定員五十名各小區に小頭及副小頭一名宛又一大組に頭取及副頭取各一名宛を置く。

明治二十三年一月警察署指揮となる。

明治二十七年一月定員二百五十名に減員同日各小區に小頭三名を置き副小頭を廢す。

明治二十八年一月二十八日定員五百名に增員全員を十部となし各部に部長を置き定員五十名となし小頭四名内「一名部長」を置き尙ほ組頭を置く。

明治三十九年七月知事訓令を以て定員を二百一人に改め各部に部長一人小頭二人消防手十六人宛第六部に限り部長一人小頭三人消防手二十五人其第六部が他各部に比し員數の差あるは蒸汽喞筒付きなるを以てなり。

尙現在委員五十名、組頭一名、部長十名、小頭二十一名、消防機關手四名、消防手百八十九名、計二百二十一名にして組員一につき現在八十四戸の割合なり。

組頭　淺海壽之吉　明治三十五年十一月一日任命　大正三年六月五日辭任

同　御喜作藏　大正五年六月五日　仝　同　十年七月十日仝

同　土井重吉　同　十年七月十四日　仝　現在

裁判所

明治九年四月十二日本市に裁判所を創設せられて以來今日に至る、下關區裁判所、山口地方裁判所、下關支部、共に年々事件の取扱數增加しつゝあり、最近年間の調査による地方支部の民事々件の狀態を略記せむに、第一審通常訴訟、證書訴訟、爲替訴訟、人事訴訟、年間八百件以上に達し、假差押處分、其他を合すれば一千百件に及び刑事々件は刑法犯、特別法犯、其他の事件七十件內外にあり。

下關區裁判所民事々件取扱數は通常訴訟、證書訴訟、爲替訴訟、禁治產、準禁治產、失踪、督促家資分散、假差押處分、强制執行、競賣法による競賣其他の事件を合し六千件の多數にして刑事々件、刑法犯、特別法犯、私訴其他を合し五百件を數ふるに至り更に世間一般の不景氣に伴ひ事件の激增を來しつゝあり。

現任判檢事の氏名を左に錄したり。

監督判事　二階堂富作
豫審判事　佐伯顯二
判事　樋口恒通
陪席判事　松浦彌太郎
上席檢事　石塚橙一
檢事　片山昇

判事　豊田著壽
判事　白石金五郎
判事　美坂金治
檢事　相原守正
檢事　眞鍋正和

刑務所

（大坪）

明治五年創始大正十一年十月監獄法の改正に伴ひ山口刑務所下關支所と改稱し今日に至る、歷代所長氏名を左に錄す。

明治十一年十二月　宮原貞亮
仝　十四年八月　清水重次
仝　十六年十一月　松田治良
明治十三年六月　古川龍藏
仝　十六年九月　山本信三
仝　十七年九月　山本信三

仝 二十一年四月	井上次郎	
仝 二十四年九月	奥富義眞	
仝 三十三年二月	伊藤孝之	
仝 三十六年四月	今川廣吉	
仝 四十三年四月	蒲原儀一郎	
大正二年五月	山崎千吉	
仝 五年五月	郡司幸壽千	
仝 十一年十月	森永義郎	
仝十三年十一月現任	高橋松之助	

新聞事業

本市に於ける新聞發行は日刊、關門日々新聞　明治二十五年四月十九日第三種郵便物認可を受て以來本稿草する九月二十六日迄に第一万四千四百八十七號を發行し社礎益々強固となり發行部數本縣唯一の言論機關として名實共に日本の關門の誇とするに足る。　現社長　末光鐵之介氏

仝二十三年十二月	加部謙二	
仝 二十九年三月	栗屋稔	
仝 三十四年三月	栗屋稔	
仝 四十年九月	伊藤孝之	
仝四十三年四月	吉野德市	
大正三年十一月	宮野彦助	
仝 九年十二月	宮野彦助	
仝 十二年十一月	湯淺芳治	

馬關毎日新聞　明治二十五年二月二十五日第三種郵便物認可を受け即ち本市に於ける言論界に最も古き歴史を有し第一萬一千三百十號を發行し益々發展しつゝあり。現社長　秋田寅之介氏

關門報知新聞　社長　西川定雄氏

各新聞支局　防長新聞關門支局、門司新報下關支局、福岡日日新聞下關支局、大阪東京時事新聞關門支局、關門附錄新聞下關支局、等日刊新聞の支局として設置しあり、其他の本市に發行所を有する旬刊以下の新聞は（有保証）は、日本之關門、六連報、關門水平新聞、內鮮時報、防長青年時報、關門プレス、國粹新報、海峽新聞、等なり。

各官署

前記以外の官署、創設年月日長官等を錄せむ、

下關要塞司令部	司令官　中將　福田彦助	
下關憲兵屯所	所長　陸軍憲兵少佐　若林佐太郎	明治九年四月十日創設
內務省下關土木出張所	所長　片山定松	明治四十四年四月一日仝
下關測候所	所長　根岸又藏	明治十六年一月一日仝

熊本遞信局海事部下關出張所　所長　堀直靖
門司稅關下關出張所　所長　末松喜兵衛
下關貯金支局　局長　佐々木鬼數斗
下關東郵便局　局長　福田榮作
同　西郵便局　局長　大黑孝衛
下關電信局　電話課長　都野純吉
下關稅務署　署長　細倉重義
門司稅關下關驛出張所　所長　上野唯勝
下關驛　驛長　伊東信一

宿屋及宿泊人

下關市內に於ける宿泊營業は旅人宿百三十、下宿五十、木賃宿三十五、計二百三十五にして宿泊人員內地人は最近年間の統計により觀るに八万一千人內外、外國人七百三十五人前後にあり、內主なる旅人宿は末尾案內の如し。

貸座敷及娼妓

現在本市に於ける貸座敷數は東華遊廓二十二軒、豊前田遊廓四十三軒、竹崎遊廓六軒、今浦遊廓

十軒、新地遊廓四十三軒にして娼妓三百九十五人、遊客每年九千人乃至二萬人にして遊客一人平均消費金額は六圓餘なり。

藝妓及置屋

東華券番の置屋は四十四軒、藝妓百八十人、豊前田藝妓置屋四十三軒、藝妓二百七十人、竹崎藝妓置屋六軒、藝妓三十九人、今浦藝妓置屋十軒、藝妓五十人、新地藝妓置屋四十二軒、藝妓二百六十人、にして主なる置屋は各券番別として末尾記載の如し。

劇場及活動寫眞館

常設劇場、裏町辨天座、赤間町　いろは館、豊前田　稻荷座、新地　新富座、田中町　新榮館、等なり。

活動常設館としては　壽館、山陽倶樂部、山皓館、朝日館、の四つあり、觀覽客の最近年間の調査によるに劇場に、四十万一千人、活動に　五十萬人、即ち　九十萬一千人となる。

正誤

二一頁　阿部高等技藝女學校ノ吉見山トアルハ貴船町

三九頁　桝谷音藏トアルハ音三

四四頁　三行目ノ經濟界ノ昌トアルハ隆昌

五七頁　株式會社米取引ノ下ニ所

六〇頁　株式會社共同購買會ノ代表社員トアルハ社長

七八頁　三行ノ强氣節トアルハ筋

一四〇頁　十三行ノ發行部數ノ下ニ等

大正十四年五月十日

銀婚式御祝典記念

下關各種案內

關門汽船株式會社

社長　久野春之助
支配人　高木新一

電話　本社一四番
岬桟橋一九三五番
江ノ浦桟橋一〇五番

下關市唐戸町

貝島合名會社
貝島商事株式會社

電話　六一番。一二九二番
一八〇番。一二一三番

2

東邦電力株式會社下關支店
支店長　高村榮太郎

株式會社下關米取引所
社長　林平四郎

3

下關市西南部町
株式會社 **百十銀行**
電話四番二〇番六五三番一一五一番
下關驛前 西 支店 電話三一番一五七六番
市內唐戶町 東 支店 電話二八三番一〇〇七番
市內今浦町 今浦支店 電話四一七番
市內新町二丁目 新町出張所 電話六四九番

資本金 壹億
積立金 參千壹百四拾六萬圓

下關市觀音崎町
株式會社 **十五銀行**
下關支店
下關市田中町 東出張所
同市豐前田町 西出張所
門司市西本町一丁目 門司出張所

資本金 七千萬圓
總預金 四億圓

下關市西南部町
株式會社 **住友銀行**
下關支店 電話（長五四四番 七六八番 八一二番）
山口縣柳井町 柳井支店 電話長三五番

資本金 五千萬圓
諸積立金 四千六百四拾萬圓

東京市日本橋區兜町
株式會社 **第一銀行**
下關市觀音崎町 下關支店
山口縣長府町 長府支店
門司市西本町 門司支店

資本金 壹億圓（拂込濟）
積立金 八千五拾萬圓

橫濱正金銀行
下關支店
電話 特長一三六八 一四八五番

朝鮮銀行
總裁 鈴木島吉
本店 京城
支店出張所 內地 東京、大阪、神戶、下關
下關市貴船町（電話一三四〇番）
辯護士 古谷判治

資本金 壹億
積立金 五千六拾萬圓
諸預金 四億八百餘萬圓
（大正十三年下期末現在）

株式會社 **三井銀行**
下關市觀音崎町 下關支店 電話 六三九 八六八 一五四一番
門司市東本町 門司支店

下關市豐町
辯護士 弘重定一
下關市新町二丁目（電一五五四番）
辯護士從六位 岡本勳治

下關市赤岸町三丁目（電一一〇五番）
辯護士 田崎慶一

下關市赤岸裁判所下（電一四〇〇番）
辯護士 筒井禎一

下關市本町三丁目（電長一五二六番）
辯護士 松本新六

下關市本町三丁目
辯護士 法學士 兼崎理藏

下關市赤岸町三丁目（電話五三七番）
辯護士 法學士 河添鑑

下關市吉原町三丁目（電話長五三番）
辯護士 村岡吾一

下關市王司町坂上（電話一九七番）
會計士 大畑太郎

下關市赤岸町四丁目（電一三八五番）
代書業 柴田稔

下關市新町常樂園大賀別莊下
ち疾 肛門病 專門 下關肛門病醫院
電話二一一八番 院長 川村利吉

豐浦郡黑井字涌田
精神病專門療養院
陀長 入佐龍剛

下關市竹崎町（電一〇九八番）
花柳病 內外科 日本病院

下關市入江町九五（電長一一三二番）
外科一般 中澤外科醫院

下關市觀音崎舊本通（電話一六六番）
神代內科院
院長 醫學士 神代正一

下關市觀音崎町（電話一〇二四番）
產婦人科 泌尿器科 田中醫院

內科、外科、小兒科
耳鼻咽喉科、婦人科
皮梅科、泌尿科X科
下關市西細江町
貴志病院
電話四〇一番

X光線人工科太陽燈
ワッセルマン氏梅毒檢査
外、內科 皮膚病 花柳病 泌尿器科 婦人科
下關市赤岸町
黑石堂病院
電話 一〇四番 一八二六番

下關市新町（電話一七〇七番）
小兒科 專門 日高小兒科醫院

下關市南本町（清和園）
內科 泌尿花柳病科 福島醫院

下關市西細江町八五
醫師 矢野元利